

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)

国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)

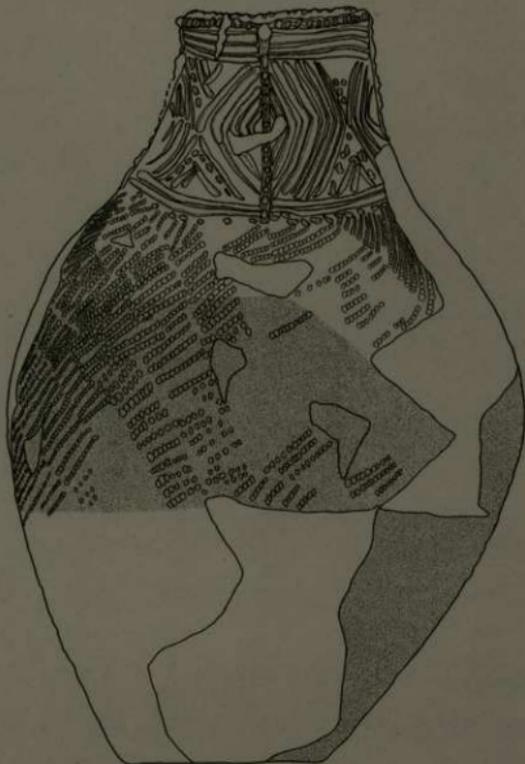
上野原遺跡

(第10地点)

所在地 鹿児島県国分市大字上之段字水ヶ迫ほか

第5分冊

縄文早期土器編2(早期後葉編1)



2001年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

第5分冊凡例

- 1 本分冊は、縄文時代早期後葉前半期の時期に属する土器を報告した部分である。他の時期に属する遺物については、「各分冊構成」を参照の上、該当する分冊にあたられたい。
- 2 土器については、各型式ごとに「～式土器出土状況全体図」、「～式土器出土状況図」、「～式土器実測図」の3種類の挿図を作成した。
- 3 上野原遺跡第10地点の発掘調査は、40m四方のグリッドを設定し、原則としてグリッド単位で行った。また遺物取上では、遺物番号を各グリッドごとに1番から通し番号を付けて取り上げることとした。さらに遺物取上図面は、原則として1/50で作成することとし、調査担当者がそれぞれ分担し作成した。
- 4 本報告書掲載の「～式土器出土状況全体図」は、各グリッドごとに遺物取上図面を50%縮小した図面を元図とし、各土器型式ごとに拾い出した図面を下図として作成した。この図を10%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載したので、各図は1/2000の仕上がり図面である。また、この図で使用した地形測量図は、アカホヤ火山灰直下のM層上面で作成した図を1mコンターで掲載した図である。
- 5 本報告書掲載の「～式土器出土状況図」は、4で作成した下図を、37%縮小のうえ、原則として6グリッドを1枚の挿図としてトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。
また、この図に掲載した土器の番号は、「実測図」の番号と一致する。
- 6 上記の「～式土器出土状況全体図」と「～式土器出土状況図」とに示した土器出土地点を示すドットは、本分冊に限り本書に実測図に掲載した土器のみを、1ドット1点の土器片が出土したことを示したものである。したがって、当該土器型式に属する全ての土器片を提示していない。
- 7 上記の「～式土器出土状況全体図」と「～式土器出土状況図」とでは、深鉢形土器を黒色印で、埋納土器・重文深鉢形土器・壺形土器は赤色印で示した。
- 8 本報告書掲載の「～式土器実測図」は、土器実測図を67%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。したがって各図は1/3の仕上がり図面である。
なお報告番号は、各土器型式ごとに1番から通し番号をふつた。この番号は該当する「～式土器出土状況図」の報告番号と一致する。
- 9 今回報告に際して、本分冊に限り「～式土器出土状況図」や「～式土器実測図」に他型式の土器が多数混入していることが、校正の段階で判明した。この段階での版の組替えは

諸般の事情で不可能であったため、次のように対処した。

- 1) 「～式土器実測図」に関しては、レイアウト番号の横に以下の記号を付け判別する。したがって下記の記号が付いた土器は型式名が異なることに留意していただきたい。

(凡例)

- …妙見式土器, ○…天道ヶ尾式土器, ◎…妙見土器,
- …平栴A類土器, □…平栴B類土器, ☆…平栴C類土器,
- ▲…平栴土器

- 2) 「～式土器出土状況図」は、全ての図が正しい状況に訂正してある。他の「～式土器実測図」へ混入した土器については、略号とレイアウト番号を付して記入した。

(凡例)

- 妙式…妙見式土器, 天…天道ヶ尾式土器, 妙…妙見土器
- 平A…平栴A類土器, 平B…平栴B類土器,
- 平C…平栴C類土器, 平…平栴土器

- 3) 混入した土器は以下の通りである。

【型式正誤表】

妙見式土器実測図に混入した他型式の土器		平栴土器実測図に混入した他型式の土器	
挿図番号/レイアウト番号	正しい型式名	挿図番号/レイアウト番号	正しい型式名
31	250 天通ヶ尾式土器 (O)	161	6 妙見式土器 (●)
32	29 天通ヶ尾式土器 (O)	161	6 妙見式土器 (●)
33	30 天通ヶ尾式土器 (O)	161	7 妙見式土器 (●)
33	31 天通ヶ尾式土器 (O)	161	7 妙見式土器 (●)
36	62 平栴土器 (●)	242	9 妙見式土器 (●)
37	65 天通ヶ尾式土器 (O)	162	10 妙見式土器 (●)
40	79 天通ヶ尾式土器 (O)	平栴土器実測図に混入した他型式の土器	
40	80 天通ヶ尾式土器 (O)	挿図番号/レイアウト番号	正しい型式名
41	86 天通ヶ尾式土器 (O)	117	8 平栴土器 (■)
41	87 天通ヶ尾式土器 (O)	122	8 平栴土器 (■)
41	88 天通ヶ尾式土器 (O)	172	13 妙見式土器 (●)
45	101 天通ヶ尾式土器 (O)	172	13 平栴土器 (■)
天通ヶ尾式土器実測図に混入した他型式の土器		173	16 平栴土器 (■)
		173	19 妙見式土器 (●)
59	31 平栴土器 (■)	173	22 妙見式土器 (●)
69	37 妙見式土器 (●)	174	23 妙見式土器 (●)
76	114 妙見式土器 (●)	174	24 妙見式土器 (●)
平栴土器実測図に混入した他型式の土器		174	25 平栴土器 (■)
		174	26 平栴土器 (■)
挿図番号/レイアウト番号		174	26 平栴土器 (■)
100	6 天通ヶ尾式土器 (O)	174	27 妙見式土器 (●)
101	6 天通ヶ尾式土器 (O)	180	36 妙見式土器 (●)
118	48 平栴土器 (■)	194	69 平栴土器 (■)
122	69 平栴土器 (■)	199	63 平栴土器 (■)
124	78 平栴土器 (■)	212	123 妙見式土器 (●)
126	88 天通ヶ尾式土器 (O)	214	131 妙見式土器 (●)
128	94 天通ヶ尾式土器 (O)	217	143 天通ヶ尾式土器 (O)
128	97 天通ヶ尾式土器 (O)	218	154 平栴土器 (■)
129	103 天通ヶ尾式土器 (O)	220	159 妙見式土器 (●)
129	104 天通ヶ尾式土器 (O)	222	176 天通ヶ尾式土器 (O)
129	105 天通ヶ尾式土器 (O)		
129	106 天通ヶ尾式土器 (O)		
129	107 天通ヶ尾式土器 (O)		
132	119 天通ヶ尾式土器 (O)		
135	140 平栴土器 (■)		
136	141 平栴土器 (■)		
139	160 天通ヶ尾式土器 (O)		
140	164 平栴土器 (■)		
140	165 平栴土器 (■)		
140	169 平栴土器 (■)		
140	170 平栴土器 (■)		
141	172 平栴土器 (■)		
141	173 平栴土器 (■)		
141	174 平栴土器 (■)		
143	187 天通ヶ尾式土器 (O)		

- 10 本書における土器の部位と文様帯における位置関係は次の通りである。



口縁部文様帯

頸部文様帯

胴部文様帯



第5分冊目次

第IV章 発掘調査

第8節 縄文時代早期の調査

2. 遺物	24
(土器)	24
A 縄文時代早期後葉の土器	24
a. 早期後葉前中期の土器	24
① 第1群妙見式土器	24
② 第2群天道ヶ尾式土器	61
③ 第3群平栴A類土器	101
④ 第4群平栴B類土器	171
⑤ 第5群平栴C類土器	176
⑥ 第6群特殊小型土器	265
⑦ 小結	266
附圖 1. 上野原遺跡出土の赤彩遺物について	273

第5分冊挿図目次

第1図 上野原台地周辺地形および上野原テクノパーク 跡地形・テクノパーク内遺跡分布図	7	第18図 妙見式土器出土状況図(1)	27
第2図 露島・板島地形断面図	8	第19図 妙見式土器出土状況図(2)	28
第3図 上野原遺跡跡10地点の土層	9	第20図 妙見式土器出土状況図(3)	29
第4図 縄文早期後葉前中期土器出土状況 全体図	11	第21図 妙見式土器出土状況図(4)	30
第5図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図1(N・O・P-5・6区)	12	第22図 妙見式土器出土状況図(5)	31
第6図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図2(Q・R・S-5・6区)	13	第23図 妙見式土器出土状況図(6)	32
第7図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図3(N・O・P-7・8区)	14	第24図 妙見式土器実測図1(深鉢-1)	33
第8図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図4(Q・R・S-7・8区)	15	第25図 妙見式土器実測図2(深鉢-2)	34
第9図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図5(N・O・P-9・10区)	16	第26図 妙見式土器実測図3(深鉢-3)	35
第10図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図6(Q・R・S-9・10区)	17	第27図 妙見式土器実測図4(深鉢-4)	36
第11図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図7(N・O・P-11・12区)	18	第28図 妙見式土器実測図5(深鉢-5)	37
第12図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図8(Q・R・S-11・12区)	19	第29図 妙見式土器実測図6(深鉢-6)	38
第13図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図9(N・O・P-13・14区)	20	第30図 妙見式土器実測図7(深鉢-7)	39
第14図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図10(Q・R・S-13・14区)	21	第31図 妙見式土器実測図8(深鉢-8)	40
第15図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図11(N・O・P-15・16区)	22	第32図 妙見式土器実測図9(深鉢-9)	41
第16図 縄文早期後葉前中期土器出土 状況図12(Q・R・S-15・16区)	23	第33図 妙見式土器実測図10(深鉢-10)	42
第17図 妙見式土器出土状況全体図	26	第34図 妙見式土器実測図11(深鉢-11)	43
		第35図 妙見式土器実測図12(深鉢-12)	44
		第36図 妙見式土器実測図13(深鉢-13)	45
		第37図 妙見式土器実測図14(深鉢-14)	46
		第38図 妙見式土器実測図15(深鉢-15)	47
		第39図 妙見式土器実測図16(深鉢-16)	48
		第40図 妙見式土器実測図17(深鉢-17)	49
		第41図 妙見式土器実測図18(深鉢-18)	50
		第42図 妙見式土器実測図19(深鉢-19)	51
		第43図 妙見式土器実測図20(深鉢-20)	52
		第44図 妙見式土器実測図21(深鉢-21)	53
		第45図 妙見式土器実測図22(深鉢-22)	54
		第46図 妙見式土器実測図23(深鉢-23)	55
		第47図 妙見式土器実測図24(深鉢-24)	56
		第48図 妙見式土器実測図25(深鉢-25)	57
		第49図 妙見式土器実測図26(深鉢-26)	58
		第50図 妙見式土器実測図27(壺-1)	59
		第51図 妙見式土器実測図28(壺-2)	60
		第52図 天道ヶ尾式土器出土状況全体図	62
		第53図 天道ヶ尾式土器出土状況図(1)	63
		第54図 天道ヶ尾式土器出土状況図(2)	64
		第55図 天道ヶ尾式土器出土状況図(3)	65
		第56図 天道ヶ尾式土器出土状況図(4)	66
		第57図 天道ヶ尾式土器出土状況図(5)	67
		第58図 天道ヶ尾式土器出土状況図(6)	68
		第59図 天道ヶ尾式土器実測図1(深鉢-1)	69
		第60図 天道ヶ尾式土器実測図2(深鉢-2)	70
		第61図 天道ヶ尾式土器実測図3(深鉢-3)	71
		第62図 天道ヶ尾式土器実測図4(深鉢-4)	72
		第63図 天道ヶ尾式土器実測図5(深鉢-5)	73
		第64図 天道ヶ尾式土器実測図6(深鉢-6)	74
		第65図 天道ヶ尾式土器実測図7(深鉢-7)	75
		第66図 天道ヶ尾式土器実測図8(深鉢-8)	76

第 67 页	天道卍日式土器実測図 9 (深鉢-9)	77	第 116 页	平栴 A 類土器実測図 19 (深鉢-19)	128
第 68 页	天道卍日式土器実測図 10 (深鉢-10)	78	第 117 页	平栴 A 類土器実測図 20 (深鉢-20)	129
第 69 页	天道卍日式土器実測図 11 (深鉢-11)	79	第 118 页	平栴 A 類土器実測図 21 (深鉢-21)	130
第 70 页	天道卍日式土器実測図 12 (深鉢-12)	80	第 119 页	平栴 A 類土器実測図 22 (深鉢-22)	131
第 71 页	天道卍日式土器実測図 13 (深鉢-13)	81	第 120 页	平栴 A 類土器実測図 23 (深鉢-23)	132
第 72 页	天道卍日式土器実測図 14 (深鉢-14)	82	第 121 页	平栴 A 類土器実測図 24 (深鉢-24)	133
第 73 页	天道卍日式土器実測図 15 (深鉢-15)	83	第 122 页	平栴 A 類土器実測図 25 (深鉢-25)	134
第 74 页	天道卍日式土器実測図 16 (深鉢-16)	84	第 123 页	平栴 A 類土器実測図 26 (深鉢-26)	135
第 75 页	天道卍日式土器実測図 17 (深鉢-17)	85	第 124 页	平栴 A 類土器実測図 27 (深鉢-27)	136
第 76 页	天道卍日式土器実測図 18 (深鉢-18)	86	第 125 页	平栴 A 類土器実測図 28 (深鉢-28)	137
第 77 页	天道卍日式土器実測図 19 (深鉢-19)	87	第 126 页	平栴 A 類土器実測図 29 (深鉢-29)	138
第 78 页	天道卍日式土器実測図 20 (深鉢-20)	88	第 127 页	平栴 A 類土器実測図 30 (深鉢-30)	139
第 79 页	天道卍日式土器実測図 21 (深鉢-21)	89	第 128 页	平栴 A 類土器実測図 31 (深鉢-31)	140
第 80 页	天道卍日式土器実測図 22 (壺-1)	90	第 129 页	平栴 A 類土器実測図 32 (深鉢-32)	141
第 81 页	天道卍日式土器実測図 23 (壺-2)	91	第 130 页	平栴 A 類土器実測図 33 (深鉢-33)	142
第 82 页	天道卍日式土器実測図 24 (壺-3)	92	第 131 页	平栴 A 類土器実測図 34 (深鉢-34)	143
第 83 页	天道卍日式土器実測図 25 (壺-4)	93	第 132 页	平栴 A 類土器実測図 35 (深鉢-35)	144
第 84 页	天道卍日式土器実測図 26 (壺-5)	94	第 133 页	平栴 A 類土器実測図 36 (深鉢-36)	145
第 85 页	天道卍日式土器実測図 27 (壺-6)	95	第 134 页	平栴 A 類土器実測図 37 (深鉢-37)	146
第 86 页	天道卍日式土器実測図 28 (壺-7)	96	第 135 页	平栴 A 類土器実測図 38 (深鉢-38)	147
第 87 页	天道卍日式土器実測図 29 (壺-8)	97	第 136 页	平栴 A 類土器実測図 39 (深鉢-39)	148
第 88 页	妙見土器実測図 1 (深鉢-1)	98	第 137 页	平栴 A 類土器実測図 40 (深鉢-40)	149
第 89 页	妙見土器実測図 2 (深鉢-2)	99	第 138 页	平栴 A 類土器実測図 41 (深鉢-41)	150
第 90 页	妙見土器実測図 3 (壺-1)	100	第 139 页	平栴 A 類土器実測図 42 (深鉢-42)	151
第 91 页	平栴 A・B 類土器出土状況全体図	103	第 140 页	平栴 A 類土器実測図 43 (深鉢-43)	152
第 92 页	平栴 A・B 類土器出土状況図 (1)	104	第 141 页	平栴 A 類土器実測図 44 (深鉢-44)	153
第 93 页	平栴 A・B 類土器出土状況図 (2)	105	第 142 页	平栴 A 類土器実測図 45 (壺-1)	154
第 94 页	平栴 A・B 類土器出土状況図 (3)	106	第 143 页	平栴 A 類土器実測図 46 (壺-2)	155
第 95 页	平栴 A・B 類土器出土状況図 (4)	107	第 144 页	平栴 A 類土器実測図 47 (壺-3)	156
第 96 页	平栴 A・B 類土器出土状況図 (5)	108	第 145 页	平栴 A 類土器実測図 48 (壺-4)	157
第 97 页	平栴 A・B 類土器出土状況図 (6)	109	第 146 页	平栴 A 類土器実測図 49 (壺-5)	158
第 98 页	平栴 A 類土器実測図 1 (深鉢-1)	110	第 147 页	平栴 A 類土器実測図 50 (壺-6)	159
第 99 页	平栴 A 類土器実測図 2 (深鉢-2)	111	第 148 页	平栴 A 類土器実測図 51 (壺-7)	160
第 100 页	平栴 A 類土器実測図 3 (深鉢-3)	112	第 149 页	平栴 A 類土器実測図 52 (壺-8)	161
第 101 页	平栴 A 類土器実測図 4 (深鉢-4)	113	第 150 页	平栴 A 類土器実測図 53 (壺-9)	162
第 102 页	平栴 A 類土器実測図 5 (深鉢-5)	114	第 151 页	平栴 A 類土器実測図 54 (壺-10)	163
第 103 页	平栴 A 類土器実測図 6 (深鉢-6)	115	第 152 页	平栴 A 類土器実測図 55 (壺-11)	164
第 104 页	平栴 A 類土器実測図 7 (深鉢-7)	116	第 153 页	平栴 A 類土器実測図 56 (壺-12)	165
第 105 页	平栴 A 類土器実測図 8 (深鉢-8)	117	第 154 页	平栴 A 類土器実測図 57 (壺-13)	166
第 106 页	平栴 A 類土器実測図 9 (深鉢-9)	118	第 155 页	平栴 A 類土器実測図 58 (壺-14)	167
第 107 页	平栴 A 類土器実測図 10 (深鉢-10)	119	第 156 页	平栴 A 類土器実測図 59 (壺-15)	168
第 108 页	平栴 A 類土器実測図 11 (深鉢-11)	120	第 157 页	平栴 A 類土器実測図 60 (壺-16)	169
第 109 页	平栴 A 類土器実測図 12 (深鉢-12)	121	第 158 页	平栴 A 類土器実測図 61 (壺-17)	170
第 110 页	平栴 A 類土器実測図 13 (深鉢-13)	122	第 159 页	平栴 B 類土器実測図 1 (深鉢-1)	171
第 111 页	平栴 A 類土器実測図 14 (深鉢-14)	123	第 160 页	平栴 B 類土器実測図 2 (深鉢-2)	172
第 112 页	平栴 A 類土器実測図 15 (深鉢-15)	124	第 161 页	平栴 B 類土器実測図 3 (深鉢-3)	173
第 113 页	平栴 A 類土器実測図 16 (深鉢-16)	125	第 162 页	平栴 B 類土器実測図 4 (壺-1)	174
第 114 页	平栴 A 類土器実測図 17 (深鉢-17)	126	第 163 页	平栴 C 類土器出土状況全体図	177
第 115 页	平栴 A 類土器実測図 18 (深鉢-18)	127	第 164 页	平栴 C 類土器出土状況図 (1)	178

第165回	平布C類土器出土状況図(2)……………	179	第214回	平布C類土器実測図45(深鉢-45)……………	228
第166回	平布C類土器出土状況図(3)……………	180	第215回	平布C類土器実測図46(深鉢-46)……………	229
第167回	平布C類土器出土状況図(4)……………	181	第216回	平布C類土器実測図47(深鉢-47)……………	230
第168回	平布C類土器出土状況図(5)……………	182	第217回	平布C類土器実測図48(深鉢-48)……………	231
第169回	平布C類土器出土状況図(6)……………	183	第218回	平布C類土器実測図49(深鉢-49)……………	232
第170回	平布C類土器実測図1(深鉢-1)……………	184	第219回	平布C類土器実測図50(深鉢-50)……………	233
第171回	平布C類土器実測図2(深鉢-2)……………	185	第220回	平布C類土器実測図51(深鉢-51)……………	234
第172回	平布C類土器実測図3(深鉢-3)……………	186	第221回	平布C類土器実測図52(深鉢-52)……………	235
第173回	平布C類土器実測図4(深鉢-4)……………	187	第222回	平布C類土器実測図53(深鉢-53)……………	236
第174回	平布C類土器実測図5(深鉢-5)……………	188	第223回	平布C類土器実測図54(深鉢-54)……………	237
第175回	平布C類土器実測図6(深鉢-6)……………	189	第224回	平布C類土器実測図55(深鉢-55)……………	238
第176回	平布C類土器実測図7(深鉢-7)……………	190	第225回	平布C類土器実測図56(深鉢-56)……………	239
第177回	平布C類土器実測図8(深鉢-8)……………	191	第226回	平布C類土器実測図57(深鉢-57)……………	240
第178回	平布C類土器実測図9(深鉢-9)……………	192	第227回	平布C類土器実測図58(深鉢-58)……………	241
第179回	平布C類土器実測図10(深鉢-10)……………	193	第228回	平布C類土器実測図59(深鉢-59)……………	242
第180回	平布C類土器実測図11(深鉢-11)……………	194	第229回	平布C類土器実測図60(深鉢-60)……………	243
第181回	平布C類土器実測図12(深鉢-12)……………	195	第230回	平布C類土器実測図61(深鉢-61)……………	244
第182回	平布C類土器実測図13(深鉢-13)……………	196	第231回	平布C類土器実測図62(深鉢-62)……………	245
第183回	平布C類土器実測図14(深鉢-14)……………	197	第232回	平布C類土器実測図63(深鉢-63)……………	246
第184回	平布C類土器実測図15(深鉢-15)……………	198	第233回	平布C類土器実測図64(深鉢-64)……………	247
第185回	平布C類土器実測図16(深鉢-16)……………	199	第234回	平布C類土器実測図65(深鉢-65)……………	248
第186回	平布C類土器実測図17(深鉢-17)……………	200	第235回	平布C類土器実測図66(深鉢-66)……………	249
第187回	平布C類土器実測図18(深鉢-18)……………	201	第236回	平布C類土器実測図67(深鉢-67)……………	250
第188回	平布C類土器実測図19(深鉢-19)……………	202	第237回	平布C類土器実測図68(深鉢-68)……………	251
第189回	平布C類土器実測図20(深鉢-20)……………	203	第238回	平布C類土器実測図69(壺-1)……………	252
第190回	平布C類土器実測図21(深鉢-21)……………	204	第239回	平布C類土器実測図70(壺-2)……………	253
第191回	平布C類土器実測図22(深鉢-22)……………	205	第240回	平布C類土器実測図71(壺-3)……………	254
第192回	平布C類土器実測図23(深鉢-23)……………	206	第241回	平布土器実測図1(深鉢-1)……………	255
第193回	平布C類土器実測図24(深鉢-24)……………	207	第242回	平布土器実測図2(深鉢-2)……………	256
第194回	平布C類土器実測図25(深鉢-25)……………	208	第243回	平布土器実測図3(深鉢-3)……………	257
第195回	平布C類土器実測図26(深鉢-26)……………	209	第244回	平布土器実測図4(深鉢-4)……………	258
第196回	平布C類土器実測図27(深鉢-27)……………	210	第245回	平布土器実測図5(深鉢-5)……………	259
第197回	平布C類土器実測図28(深鉢-28)……………	211	第246回	平布土器実測図6(深鉢-6)……………	260
第198回	平布C類土器実測図29(深鉢-29)……………	212	第247回	平布土器実測図7(壺-1)……………	261
第199回	平布C類土器実測図30(深鉢-30)……………	213	第248回	平布土器実測図8(壺-2)……………	262
第200回	平布C類土器実測図31(深鉢-31)……………	214	第249回	平布土器実測図9(壺-3)……………	263
第201回	平布C類土器実測図32(深鉢-32)……………	215	第250回	平布土器実測図10(壺-4)……………	264
第202回	平布C類土器実測図33(深鉢-33)……………	216	第251回	特殊小型土器実測図1……………	265
第203回	平布C類土器実測図34(深鉢-34)……………	217	第252回	特殊小型土器実測図2……………	266
第204回	平布C類土器実測図35(深鉢-35)……………	218	第253回	上野原遺跡第10地点縄文早期後葉前半期編年表……………	271
第205回	平布C類土器実測図36(深鉢-36)……………	219	図版1	上野原遺跡の赤彩遺物(1)……………	277
第206回	平布C類土器実測図37(深鉢-37)……………	220	図版2	上野原遺跡の赤彩遺物(2)……………	278
第207回	平布C類土器実測図38(深鉢-38)……………	221	図版3	上野原遺跡の赤彩遺物(3)……………	279
第208回	平布C類土器実測図39(深鉢-39)……………	222	図版4	ベンガラの顕微鏡写真(4)……………	280
第209回	平布C類土器実測図40(深鉢-40)……………	223			
第210回	平布C類土器実測図41(深鉢-41)……………	224			
第211回	平布C類土器実測図42(深鉢-42)……………	225			
第212回	平布C類土器実測図43(深鉢-43)……………	226			
第213回	平布C類土器実測図44(深鉢-44)……………	227			

上野原遺跡周辺の環境と土層

上野原遺跡の立地する上野原台地は、始良カルデラの外輪山に相当する。外輪山は第2図のように想定されるが、天降川・別府川・檢校川等によって開析されている沖積平野部分は定かでない。カルデラから霧島山麓へかけては、入戸火砕流で形成されている、ゆるやかな傾斜の台地になっている。その台地全体が天降川や新川、檢校川などで開析され、樹枝状の谷が複雑に入り組む。これらの様相は、第2図の霧島・桜島地形断面図に示すとおりである。上野原台地の標高は海側の最高所が263m、霧島に面する所およそ240mであり、北側に向かってゆるやかな傾斜をもっている。台地の基盤は安山岩の岩盤であり、海側でカルデラ壁の断崖を形成している。その直上には危削角礫層が堆積し、さらに始良カルデラ噴出物やサツマ火山灰などの桜島噴出物が堆積して台地を形成している。

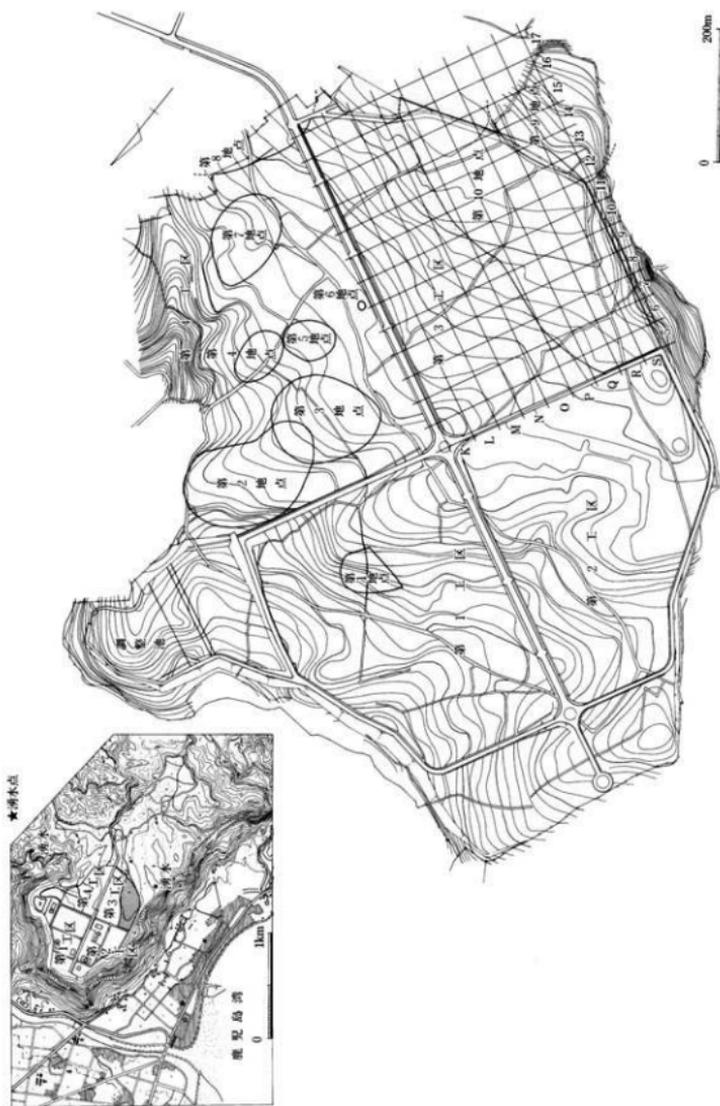
台地の東側はカルデラ壁頂部が続くが、それ以外の三方は断崖もしくは急峻な谷になっており、周辺と隔絶している。台地東側のカルデラ壁頂部には海側への浅い開析谷があり、その開口部、断崖近くには湧水がみられる。また、台地の北側にも湧水があり、台地上ではあるものの、現在も一定の水量は確保されるようである。

この始良カルデラ周辺には南九州の主要な縄文遺跡が数多い。中でも、上野原台地と檢校川を挟んで向き合う位置にある平塚貝塚は、本遺跡第10地点の主體的な土器の一つである平格式土器の標識遺跡である。また、カルデラ南西部外側を流れる稲荷川流域に立地する加葉山遺跡は、本遺跡第2地点と同じく早期前葉平格式土器様式期の集落が検出された。同じ立地条件の加治屋園遺跡では草創期の微隆起突帯文土器が出土した。別府川の沖積地には、縄文後期中葉から後葉にかけての南九州のほとんどすべての型式の土器が膨大な量出土した干迫遺跡がある。檢校川の上流に位置する城ヶ尾遺跡では、埋納された壺ノ神式土器様式の壺が3個体出土している。この遺跡は、縄文時代早期後葉の埋納された壺形土器という共通項もあるため本遺跡との関連が注目される。

上野原台地内の遺跡分布を概観しておきたい。第

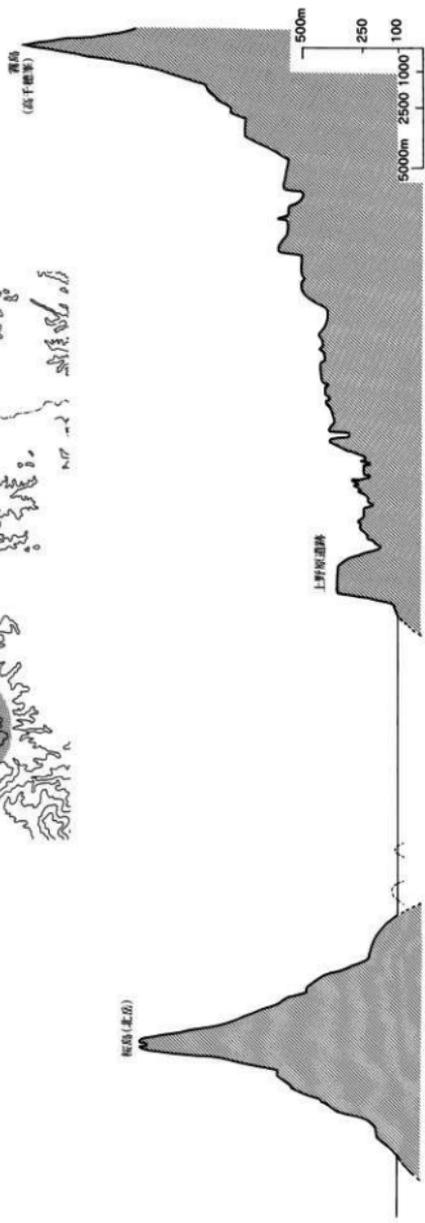
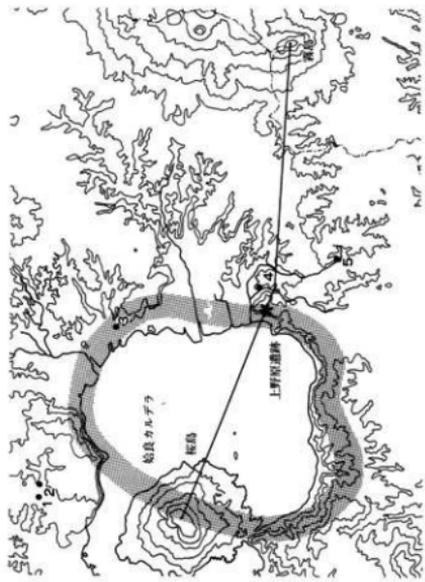
1工区と第2工区のほとんどの区域については不明であるが、第1工区内の第1地点で弥生時代中期後葉の集落が検出されている。また第1地点は、ほぼ完全に復元された壺ノ神式土器の深鉢形土器1点と石鏝1点だけからなる特異なありようを示す早期後葉の遺跡でもある。第3工区と第4工区は全域が調査されている。旧石器時代から縄文時代草創期の包含層は1ヶ所も確認されていない。縄文時代早期前葉に第2地点で前平式土器様式期の集落が出現し、同中葉になると、第2・3・4・10地点と広がりを見せ、同後葉になると、第7・9・10地点に分布を変える。第7地点の出土状況は第1地点とよく似ているようであり、この二者と第9・10地点との関連は今後究明されねばならない課題となるであろう。なお、第9地点は、工業用水道タンクの建設予定地であったが、確認調査の結果遺構・遺物の出土が多量に上ることが予想されたため、全面調査を実施せず、工業用水道タンクは現在地に建設された。縄文時代前期になると、第10地点の西側にこくわずかに分布するだけで、早期後葉との較差が大きい。同中期になると台地上からほとんど姿を消し、同後期になって陥し穴が出現し、こくわずかの土器が残される。同晩期になって再びぎやかに、第4・5地点で遺構・遺物とも多量に出土している。

次に、土層について概略述べる。I層は表土。II層黒色土は、中世以降の包含層である。III層は暗茶褐色を呈するII層とIV層の漸移層で、縄文時代晩期から弥生時代の包含層である。IV層は黄褐色土と黄白色の火山灰に二分され、黄褐色土は縄文時代後期の包含層で、陥し穴の掘込み面でもある。V層は上部に縄文前期の遺物を包含するが、下部は無遺物層であるアカホヤ火山灰層である。VI層及びVII層が縄文早期の包含層であり、第10地点の主体となる層である。VI層は白色の軽石を多く含む暗茶褐色土で、VII層は軽石が少なく、黒褐色を呈する。VIII層はサツマ火山灰層で明黄褐色を呈し、第10地点でもブロック状の堆積を見せず、全面に堆積している。IX層は黒褐色ロームであり、本遺跡では遺構・遺物は出土していない。以下、入戸火砕流まで何枚かの桜島パミスを介しながらロームが堆積している。

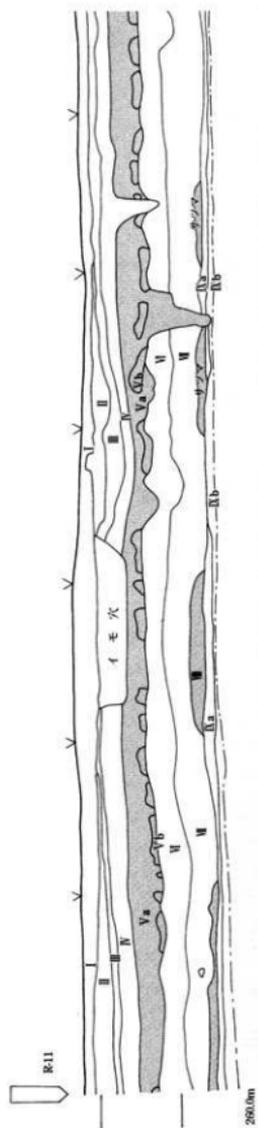


第1図 上野原台地周辺地形および上野原テクノパーク旧地形・テクノパーク内遺跡分布図

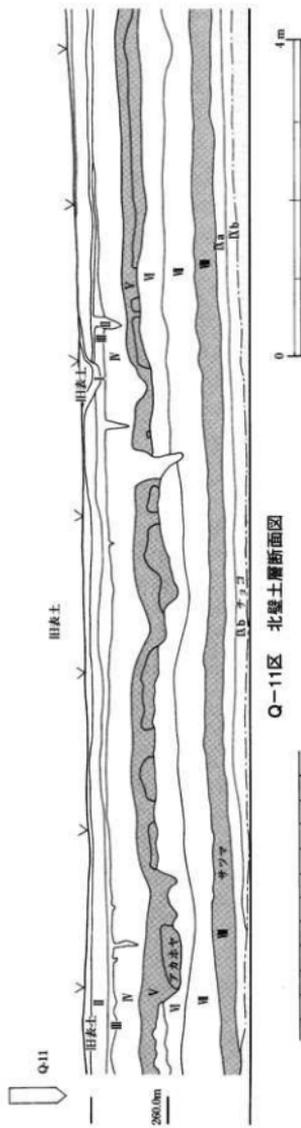
- 1 旗塚山遺跡
- 2 旗塚山周縁遺跡
- 3 下田遺跡
- 4 平野遺跡
- 5 高ノ尾遺跡



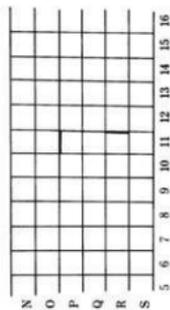
第2図 霧島・松島地形断面図



R-11区 東壁土層断面図



Q-11区 北壁土層断面図



第3図 上野原遺跡第10地点の土層

第IV章 発掘調査

第8節 縄文時代早期の調査（再掲）

Ⅵ層およびⅦ層が遺物包含層であった縄文時代早期の時期の発掘調査は、各グリッドごとに進捗状況に応じて適宜行った。

上野原遺跡第10地点の発掘調査を行った結果は、約15万点にのぼる多量で、しかも多種多様な遺物が出土したこと、多様な遺構が検出されたことであった。これらのことは、南九州では縄文時代早期の段階において、すでに全国に先駆けて多彩な縄文文化が開花していたことを示すものとして、発掘調査期間中から注目された。

その成果として、平成10年6月30日には767点の上野原遺跡出土品が重要文化財として指定された。

なお、第2分冊では縄文時代早期の時期に属する遺構として検出した、集石遺構・石核母岩集積遺構・磨石集積遺構・石斧埋納遺構・土器埋納遺構についてすでに報告を行った。

そこで、第4・5分冊と第6分冊前半部分とは出土した土器について、第6分冊後半部分では土製品について、第7・8分冊では石器・石製品についての報告を行うこととする。

したがって、遺構検出状況などに関わる部分について必要がある場合は適宜ふれるが、詳細については第2分冊を併せて参照されたい。

2. 遺物（再掲）

上野原遺跡第10地点で、縄文時代早期の時期の包含層であるⅥ層およびⅦ層からは、約15万点に達する遺物が出土した。Ⅵ層およびⅦ層から出土したこれらの遺物が属する時期は、南九州の土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下刺釜式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平格式土器・塞ノ神式土器などの土器群とが出土している。しかしながら、その出土量の比率は、早期後葉の時期の土器群が出土土器全体の9割以上を占める状況にあった。

以上の状況から上野原遺跡第10地点では、縄文時代早期中葉の時期から早期後葉の時期に人々の生活が行われ、道跡が形成されたと考えられる。

さて遺物の分類では、壺形土器などを含む土器や耳栓などの土製品、多種多様な石器そして垂飾品などの石製品に分かれることが明らかとなった。

そこで、土器・土製品・石器・石製品の順に順次報告していくこととする。

では、まず土器について報告を行う。

(1) 土器（再掲）

先に述べたように上野原遺跡第10地点で出土した土器は、現在示されている南九州の縄文土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下刺釜式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平格式土器や塞ノ神式土器などの土器群とに属することが明らかになった。本分冊では、次に縄文時代早期後葉前半の時期に属する土器群について報告を行うことにする。

B) 縄文時代早期後葉の土器

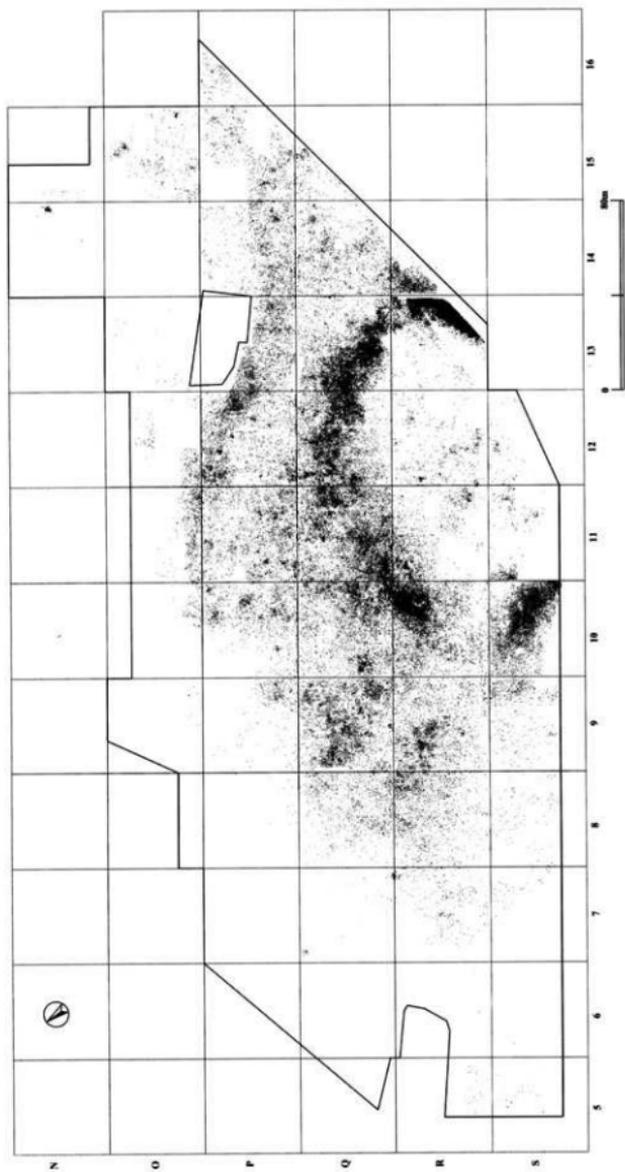
a. 早期後葉前半期の土器

さて、早期後葉前半期に属する土器群が出土した地点を示したのが、第4図から第16図である。全体的な傾向として、

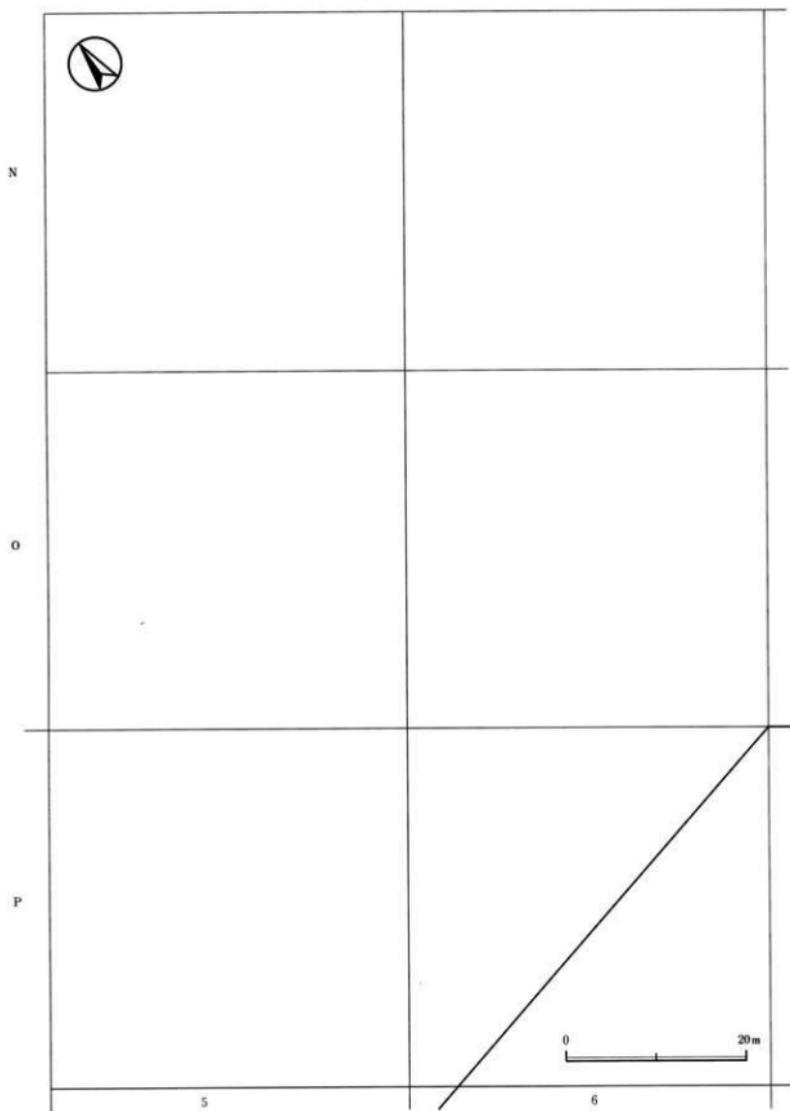
- ① R・S-11・12区およびQ-12区南側そしてR-13区東側では、土器の出土量が希薄である。
 - ② ①の区域のすぐ外側に土器が集中して出土する区域が環状（第1環状区域）に拡がる。
 - ③ ②の区域から50m～60m外側に土器が集中して出土する区域が環状（第2環状区域）に拡がる。
 - ④ ③の第2環状区域の外側では、土器の出土量は激減する。
 - ⑤ R-9・10区からQ-8・9区にかけて、12m程の幅で出土量が若干減少する区域が、直線的に拡がる。
 - ⑥ 第1環状区域および第2環状区域の中には、土器が集中して出土する地点が点在する。
- という、6点が指摘できる。

さて、上野原遺跡第10地点で出土した縄文時代早期後葉前半の時期に属する土器は、その器形的特徴と施文の特徴とから、5分類することができた。

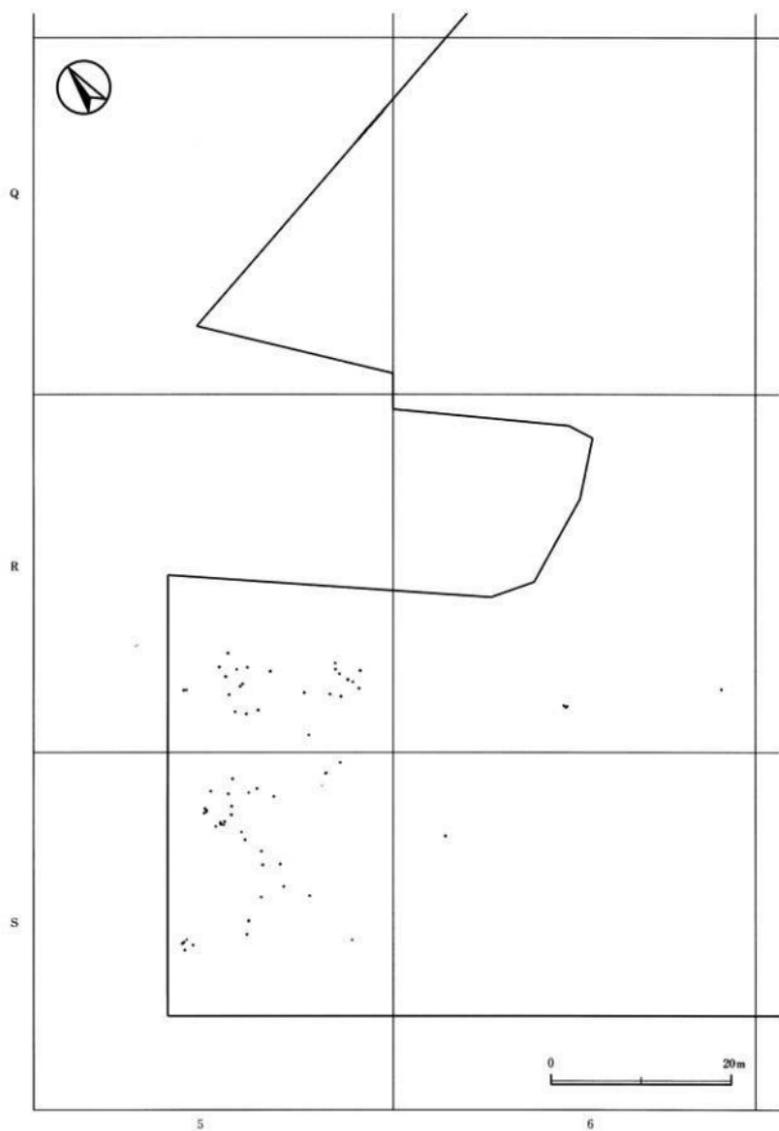
次項から分類ごとに検討を行うことにする。



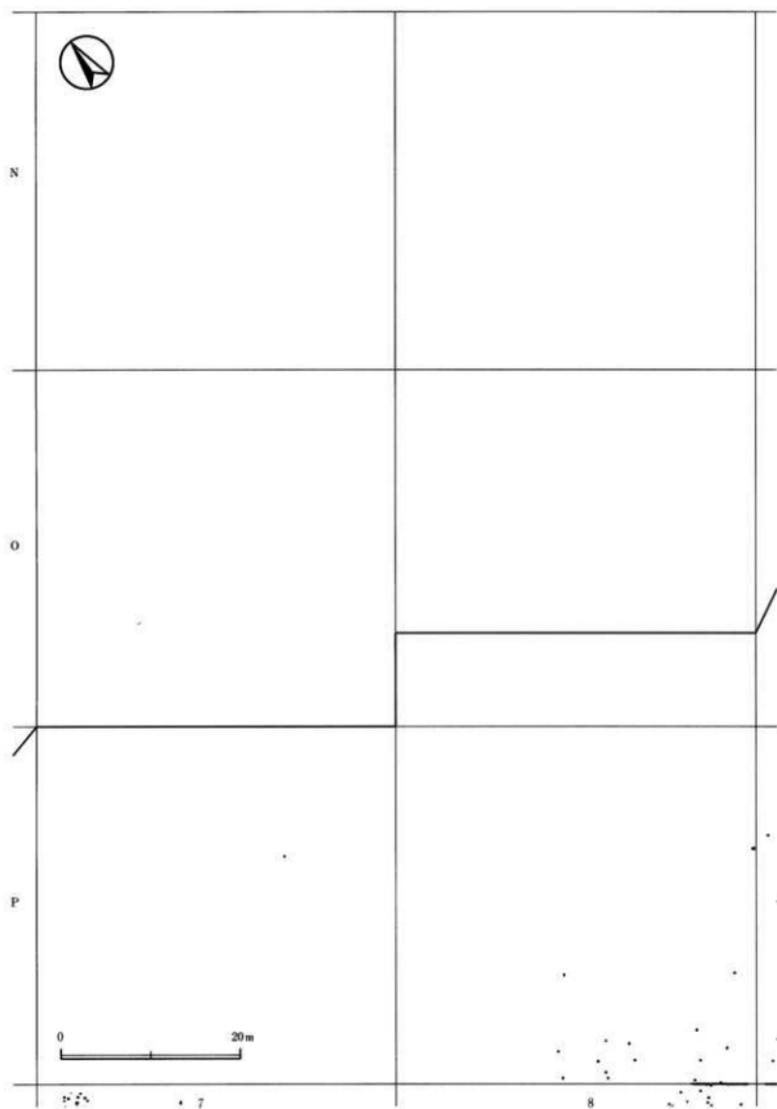
第4図 縄文前期後葉前半期土器出土状況全体図



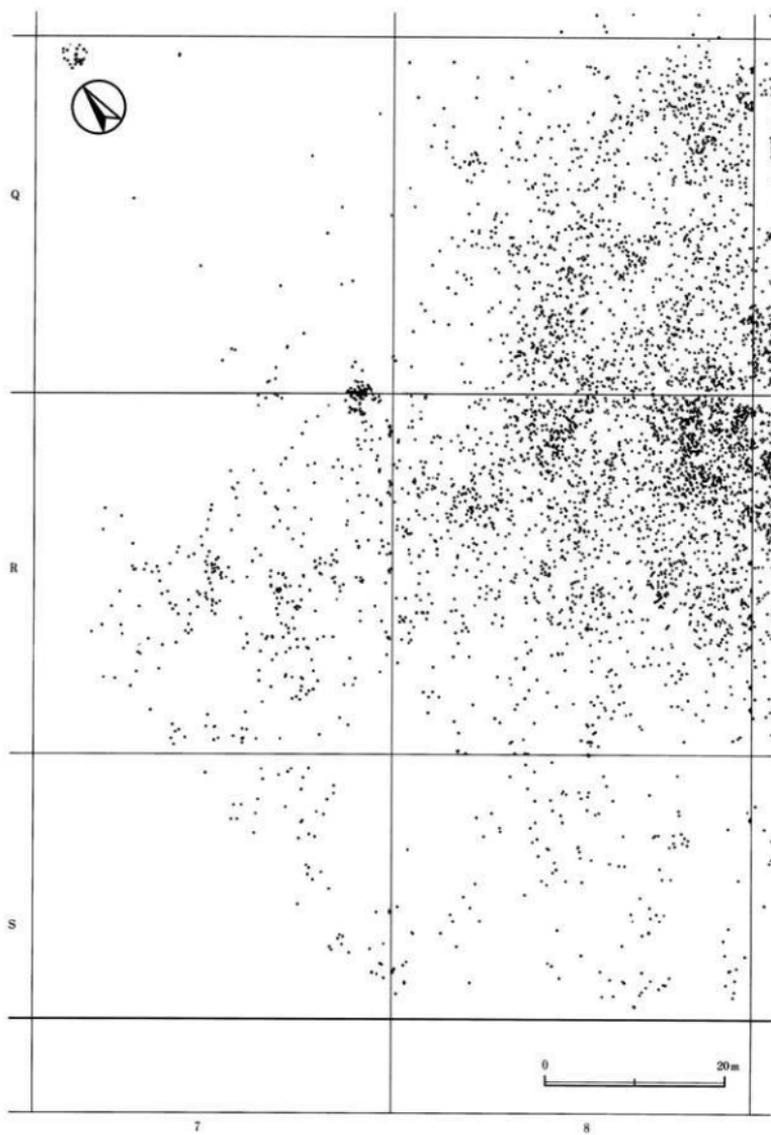
第5図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図1 (N・O・P-5・6区)



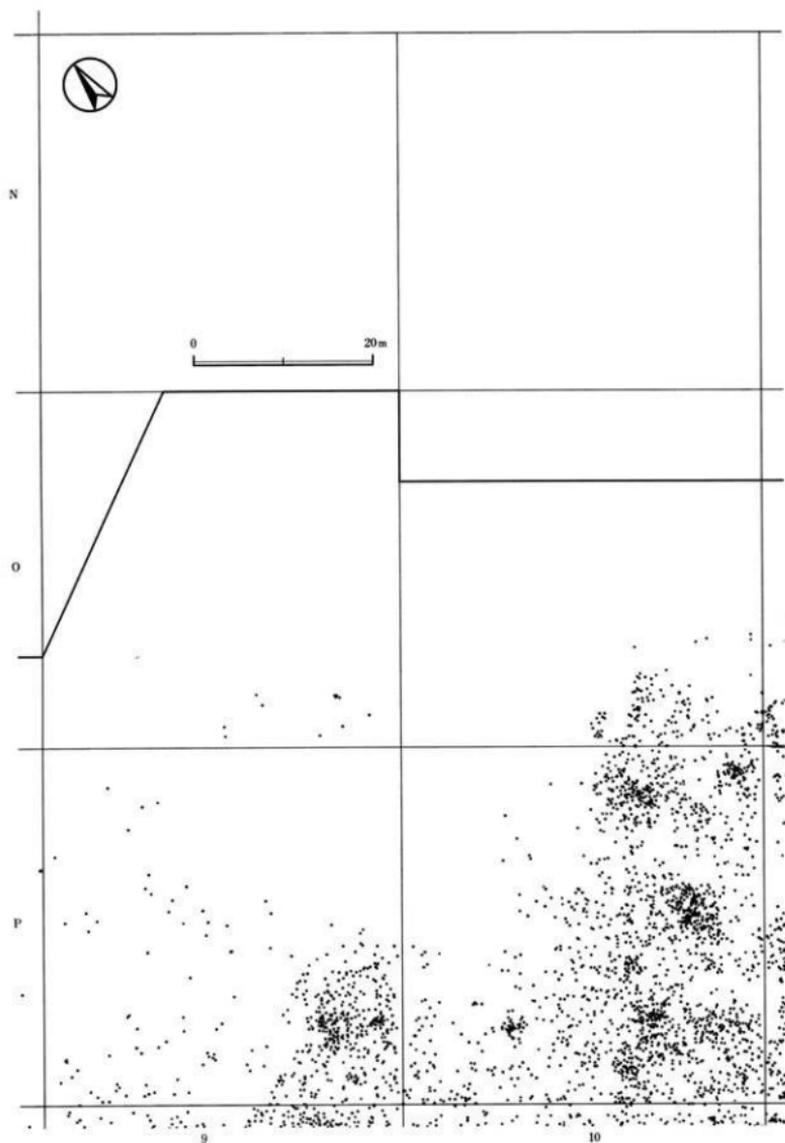
第6図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図2 (Q・R・S-5・6区)



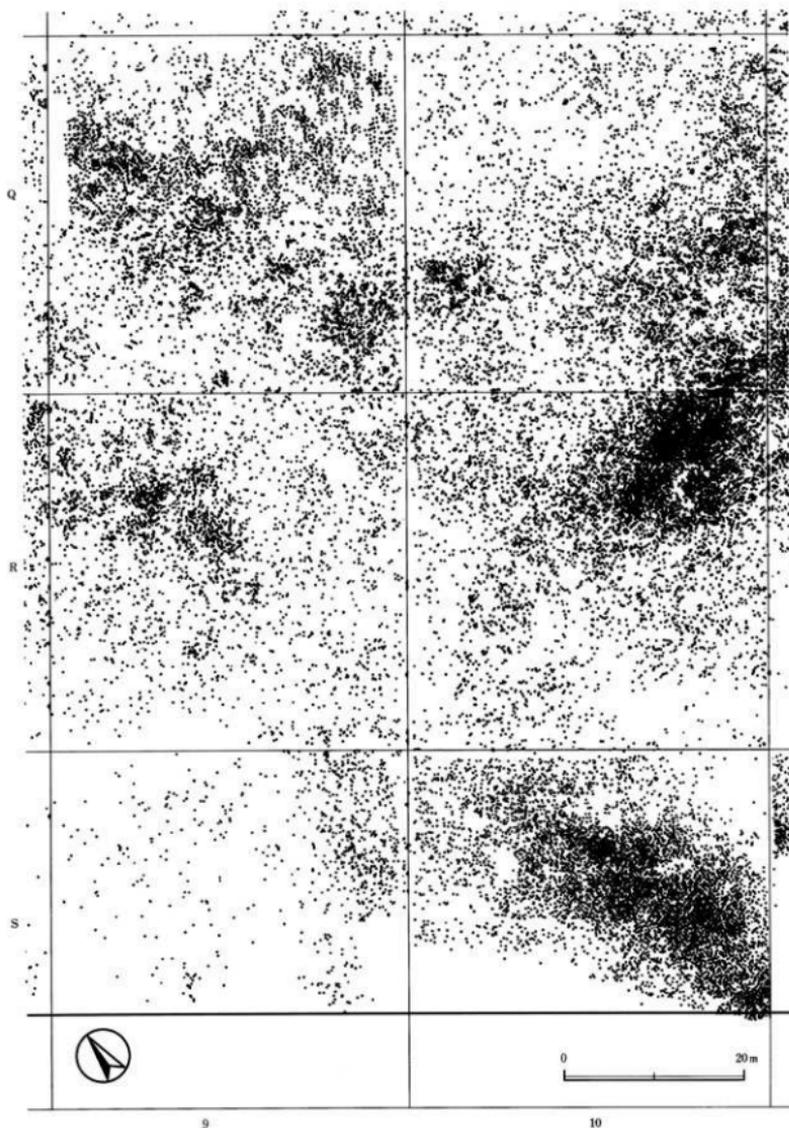
第7図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図3 (N・O・P-7・8区)



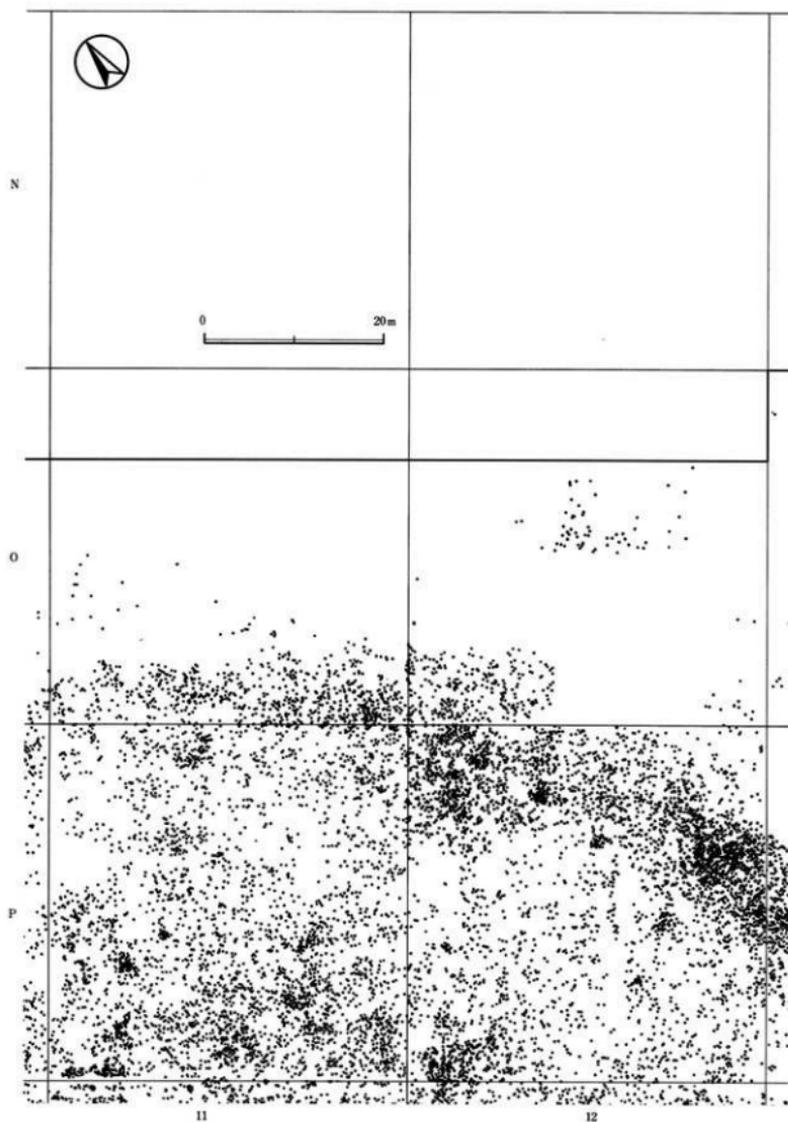
第8図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図4 (Q・R・S-7・8区)



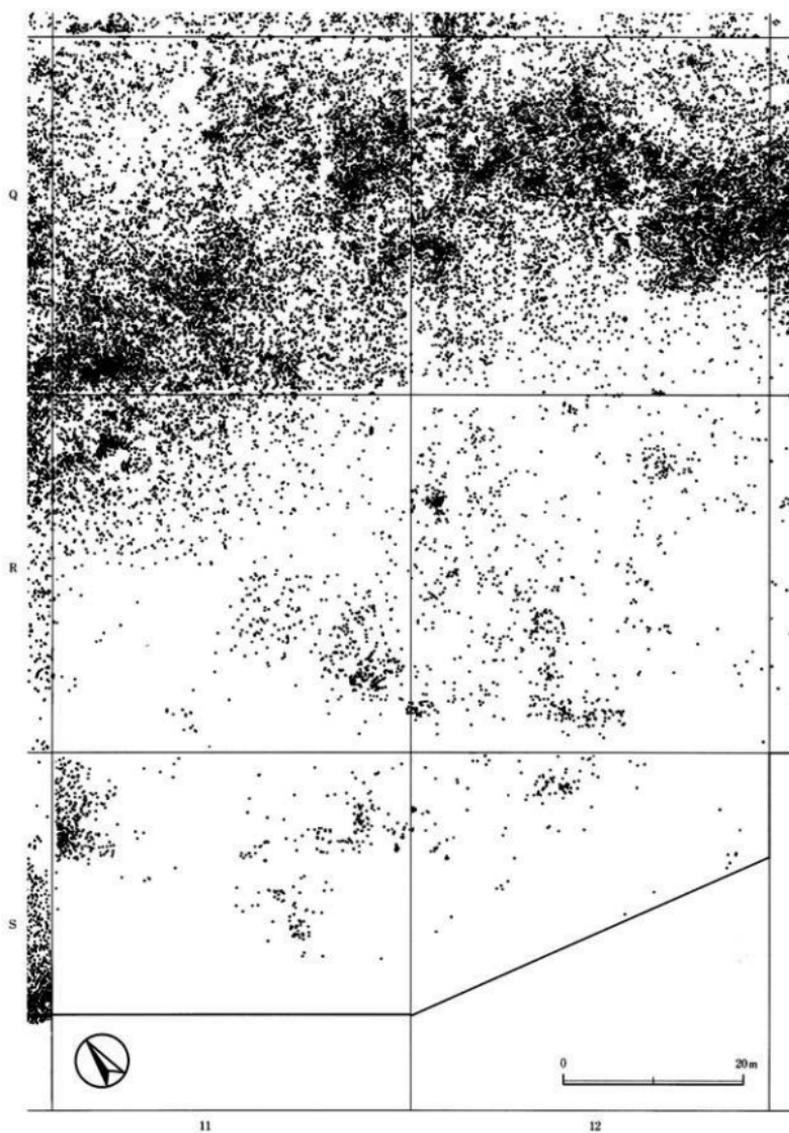
第9図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図5 (N・O・P-9・10区)



第 10 圖 縄文早期後葉前半期土器出土状況図 6 (Q・R・S-9・10区)



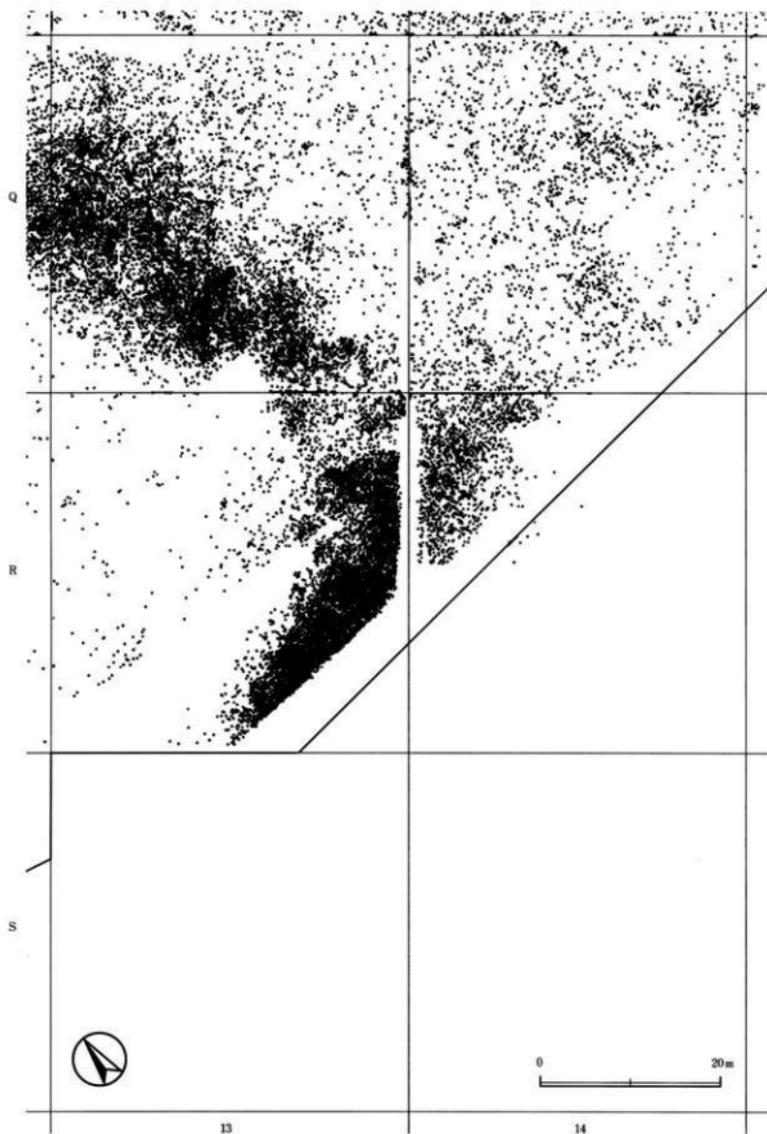
第 11 図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図 7 (N・O・P-11・12区)



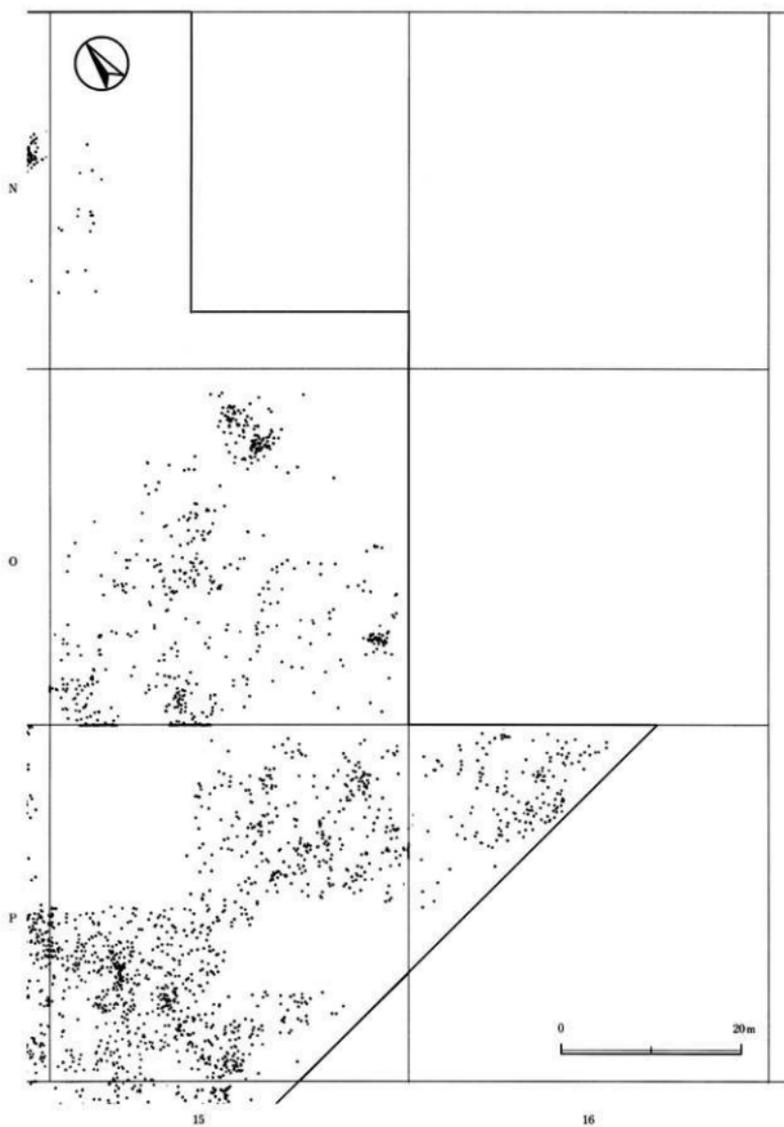
第 12 図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図 8 (Q・R・S-11・12区)



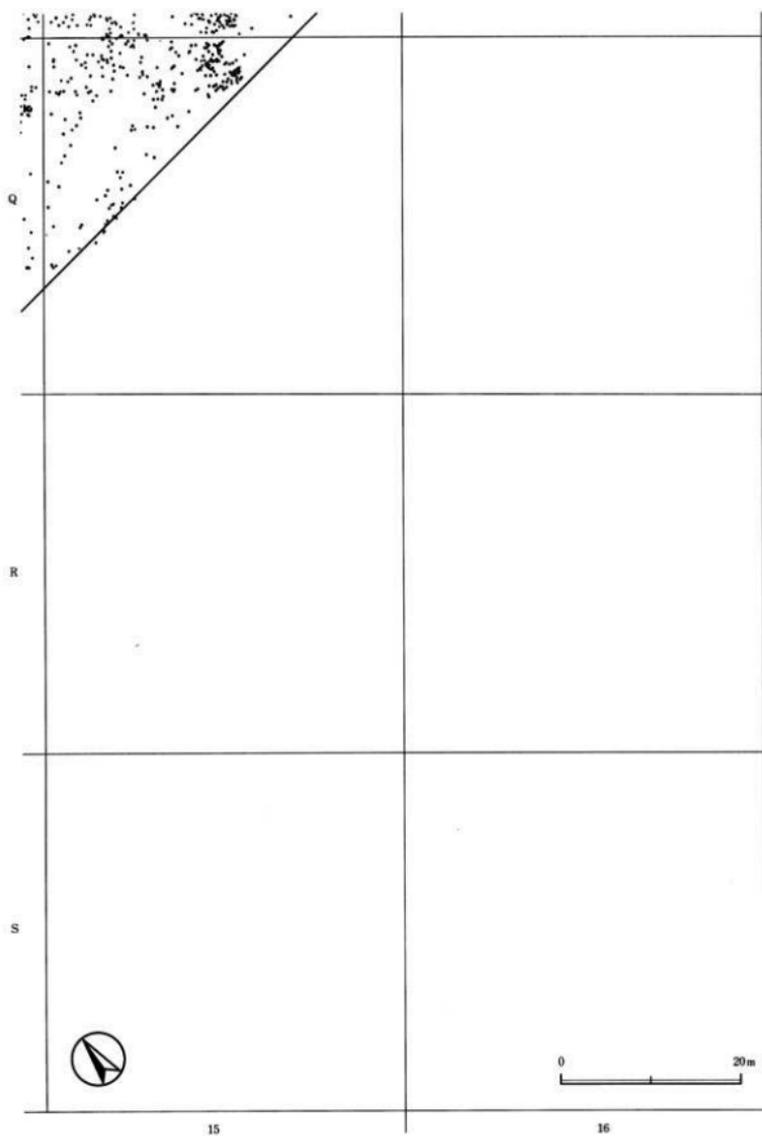
第 13 図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図 9 (N・O・P-13・14区)



第 14 図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図10 (Q・R・S-13・14区)



第 15 図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図11 (N・O・P-15・16区)



第 16 図 縄文早期後葉前半期土器出土状況図12 (Q・R・S-15・16区)

a. 1 早期後葉前半期の土器群について

i) 土器分類指標について

現在、南九州縄文早期後葉前半期に属する土器編年では、妙見式土器・天道ヶ尾式土器そして平橋式土器が設定されている。今回、上野原遺跡第10地点で出土した当該期の土器を報告するにあたり、器形的特徴および施文的特徴から、下記のように、

第1群 妙見式土器

第2群 天道ヶ尾式土器

第3群 平橋A類土器

第4群 平橋B類土器

第5群 平橋C類土器（平橋式土器）

という、5分類を行った。

土器を型式分類する指標として器形的特徴では、

1) 口縁形態：

1. 平口縁を呈する土器。
2. 波状口縁を呈する土器。

2) 口縁部形態：

3. 口縁部は肥厚せずにそのまま外反する土器。
4. 口縁下に三角形状の突帯を巡らす土器。
5. 口縁部を肥厚させる土器。

の5通りの特徴を挙げることができた。

しかし今回報告するにあたり、型式に分類する主要素には施文的特徴を採用し、器形的特徴は従要素とした。施文的特徴の分類指標は次の通りである。

1) 胴部文様帯：

- a：単節斜行縄文を施す土器。もしくは単節斜行縄文を地紋として沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器。
- b：結節縄文を施す土器。もしくは結節縄文を地紋として沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器。

2) 口縁部文様帯～頸部文様帯：

- c：貼付突帯を横位方向に巡らし、突帯上に刺突連点文を施す土器（以下、**刺目突帯**と略す）。
- d：刻目突帯を貼付することなく、沈線文と刺突連点文とで施文する土器。

3) 頸部文様帯～胴部文様帯：

- e：波頂部下（想定部）に、口縁部文様帯直下から頸部文様帯を経て、胴部文様帯に至るまで、連続して縦位方向に突帯を貼付し、突帯上に刻みを施す土器（以下、**貼付突帯**と略す）。
- f：波頂部（想定部）の口縁部文様帯部下や、頸部文

様帯と胴部文様帯との境に、瘤状突起を貼付する土器。

- g：頸部文様帯から胴部文様帯には、縦位方向の突帯文や瘤状突起は一切貼付しない土器。

4) 棒状工具を使用して沈線文を施す場合、

- h：棒状工具は先端部を尖らして、沈線文の打ち込みと止めとを流して施文する土器。

- i：棒状工具は先端部を丸くして、沈線文の打ち込みと止めとをしっかりと施文する土器。

以上、施文的特徴としてはaからiまでの9項目を分類指標にして型式分類を行った。

ii) 土器の大きさについて

深鉢形土器の大きさには、第1群から第5群まで共通して、いくつかのまとまりを観察できた。そこで、深鉢形土器の胴部最大径や口径の大ききで分類した結果、大きく

- 1) 超大型土器、2) 大型土器、3) 中型土器
- 4) 小型土器、5) 特殊小型土器

という5種類に、さらに中型土器は3種類に分けることができた。分類基準は次のとおりである。

- 1) 超大型土器は胴部最大径45cm以上、もしくは口径50cm以上の土器を指す。

- 2) 大型土器は胴部最大径40cm前後、もしくは口径45cm前後の土器を指す。

- 3) 中型土器は胴部最大径18cm前後から30cm前後の土器を指す。中型1類土器は胴部最大径30cm前後の土器を、中型2類土器は胴部最大径20cm以上の土器を、中型3類土器は胴部最大径が20cm未満の土器を指す。なお個体数のピークは、中型2類土器では胴部最大径22～23cmに、中型3類土器では胴部最大径17～18cmにくるようである。

- 4) 小型土器とは胴部最大径15cm未満の土器を指す。個体数のピークは胴部最大径12～13cmにくるようである。

- 5) 特殊小型土器は小型土器より小さい、胴部最大径が10cm未満の土器を指す。

土器の大きさについては以上の基準で記載する。

① 第1群 妙見式土器 (第17図～第51図)

i) 概要

第1群に属する土器は、150個体を資料化した。

出土状況(第17図～第23図)は、実測図に掲載した土器のみを上器片1点につき1ドットで示している。注目できるのは、土器出土希薄域が既に確認できることと、R-10・9区でも土器出土量が減少する区域があり、その両側を挟んで接合する土器が多いことである。

第1群に属する土器の特徴は以下の通りである。

i-1) 深鉢形土器 (第24図～第45図)

深鉢形土器の器形的特徴としては、口縁形態には、1・15・59のように波状口縁を呈する土器と、2・3のように平口縁を呈する土器とがある。また、口唇部は丸く収め、口縁部は肥厚せずそのまま外反する土器(第24図～第38図)と、口唇外面に小さな三角形の突帯を巡らす土器(第39図～第45図)とがある。

施文の特徴としては、口唇外面に小さな三角形の突帯を巡らす土器では、突帯部に刻みを横位方向で羽状に施す。口縁部文様帯から頸部文様帯にかけては、口縁部の形態の如何に関わらず刻目突帯を巡らす。また、頸部文様帯から胴部文様帯では、波頂部下に瘤状突起と縦位方向に連続した突帯とを貼付する。

さて、胴部文様帯に単節斜行縄文を施す土器では、全て原体を縦位方向に回転させて施文している。燃りの種類には、1や103のように2段左撻(LR)の原体で施文する土器や、9や59のように2段右撻(RL)の原体で施文する土器や、11・12のように2段左撻(LR)の原体と2段右撻(RL)の原体とを交互に施文して羽状縄文の効果を狙った土器がある。なお、上野原遺跡第10地点で出土した早期後葉前半期に属する土器の中で、「羽状縄文」を施した土器は、すべて燃りの向きが異なる2本の原体を交互に施文した「見かけ羽状縄文」であった。

さて、胴部文様帯に単節斜行縄文を施さずに、沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器としては、15・80・113などを挙げることができる。

ところで棒状工具を使用して沈線文を施す場合、先端部を尖らし沈線文の打ち込みや止めを施して施文する。

さて代表的土器に挙げられる1では、口縁形態は緩やかな波状口縁を呈し、口縁部は外反する土器である。胴部はわずかな張りをもちながら底部へ移行する。さらに、口縁部文様帯から頸部文様帯にかけて多条の刻目突帯を巡らし、胴部文様帯には縦位方向や斜位方向に貼付突帯

を施す。地文は2段左撻(LR)の単節斜行縄文を施した上に、斜位方向の沈線文や刻目突帯を施す土器である。

さて、土器の大きさに注目すると、超大型土器は1・75・76を、大型土器は2・6・77・113を、中型1類土器は7・14・101・102を、中型2類土器は15・71～83・103を、中型3類土器は16～27・86～88・105・106を、小型土器は28～31を、指摘できる。

i-2) 壺形土器 (第50図135～第51図149)

壺形土器の器形的特徴としては、頸部から口縁部にかけて外反する器形(144・145)と、頸部から口縁部にかけて直行する「長頸壺」の器形(135～143、147～148)を呈する土器とがある。

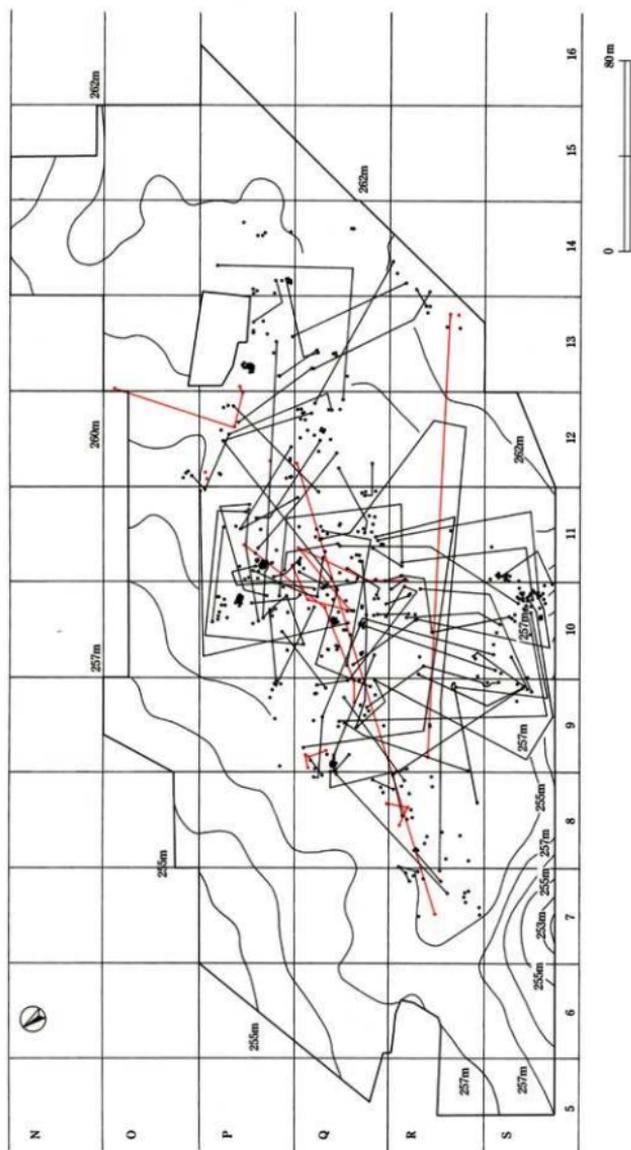
まず外反器形の土器について、明瞭にこの項に属するといえるのは、同一個体と考えられる144と145の土器だけであった。まず器形的特徴としては、口縁形態は波状口縁を呈し、頸部から口縁部にかけては直線的に外反する。頸部と肩部との境は強い屈曲を呈する特徴が挙げられる。さて施文の特徴としては、まず地紋として2段左撻(LR)の単節斜行縄文を全面に施した後に、波頂部下の頸部と肩部との境と、口縁部とはに瘤状突起を貼付し、突起状には大きな刺突を施す。それぞれの突起を中心に刻目突帯を8方向に貼付する特徴を挙げられる。また、136には口縁部外面直下に横状把手を貼付している。

次に長頸壺の器形的特徴としては、口縁形態は緩やかな波状口縁、あるいは平口縁を呈する特徴や、口縁部から頸部・肩部へと大きな屈曲を呈することなく、緩やかに移行する器形を呈する特徴を挙げることができる。

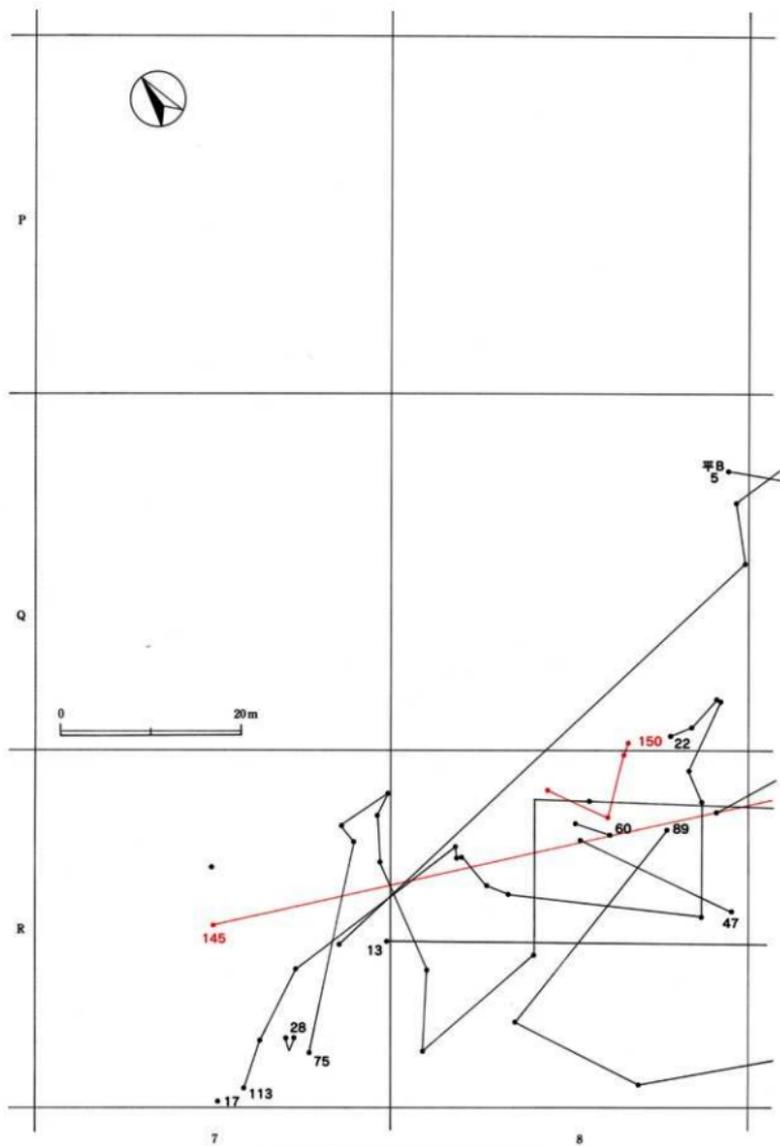
さて施文の特徴としては、地紋として2段左撻(LR)の単節斜行縄文を全面に施す。その後、波頂部(想定部)下の口縁部文様帯から頸部文様帯にかけては縦位方向に刻目突帯を貼付する。そのうえで、口縁部文様帯から頸部文様帯にかけては横位方向に刻目突帯を数条巡らす。中にはさらに斜位方向の沈線文と刺突連点文とで文様を構成する特徴を挙げられる。胴部文様帯には2段左撻(LR)の単節斜行縄文を全面に施す特徴が挙げられる。

ii) 小結

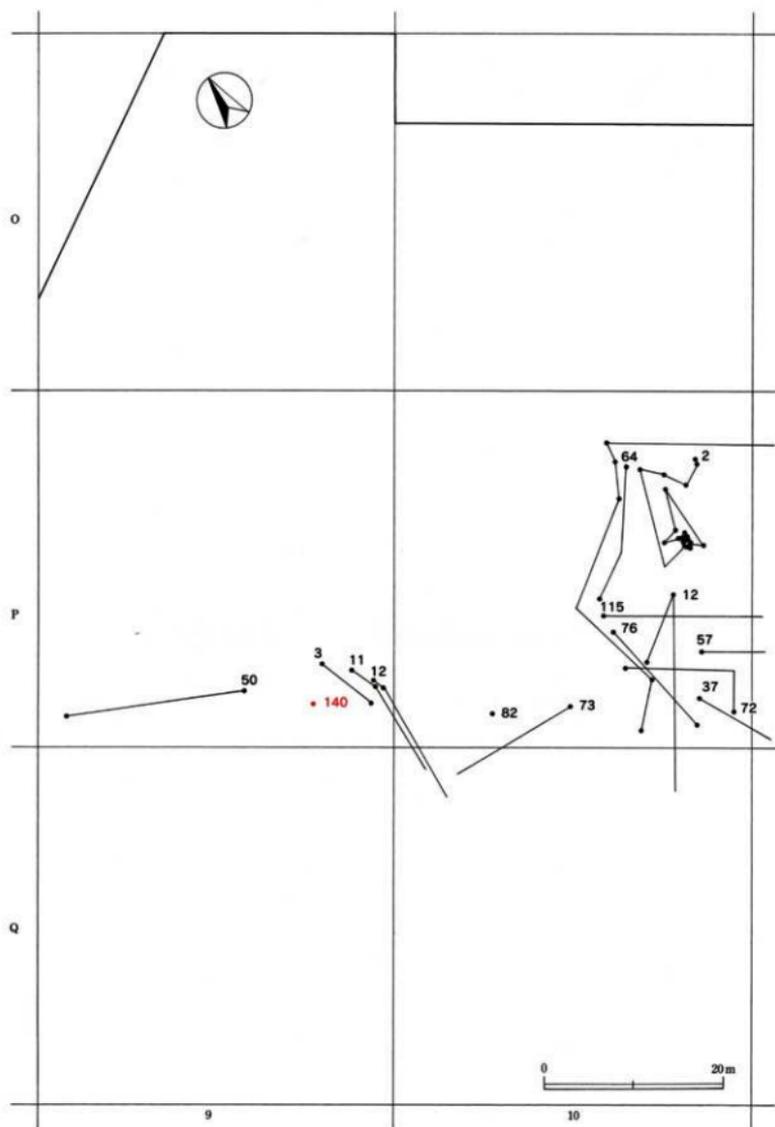
以上の深鉢形土器と壺形土器の特徴を、南九州縄文早期土器編年に照らすと、第1群は妙見式土器に該当する。妙見式土器は、宮崎県えびの市大字東川北に所在する妙見遺跡で単独に出土した土器を標識とする土器で、吉本正典氏により型式設定された土器である。



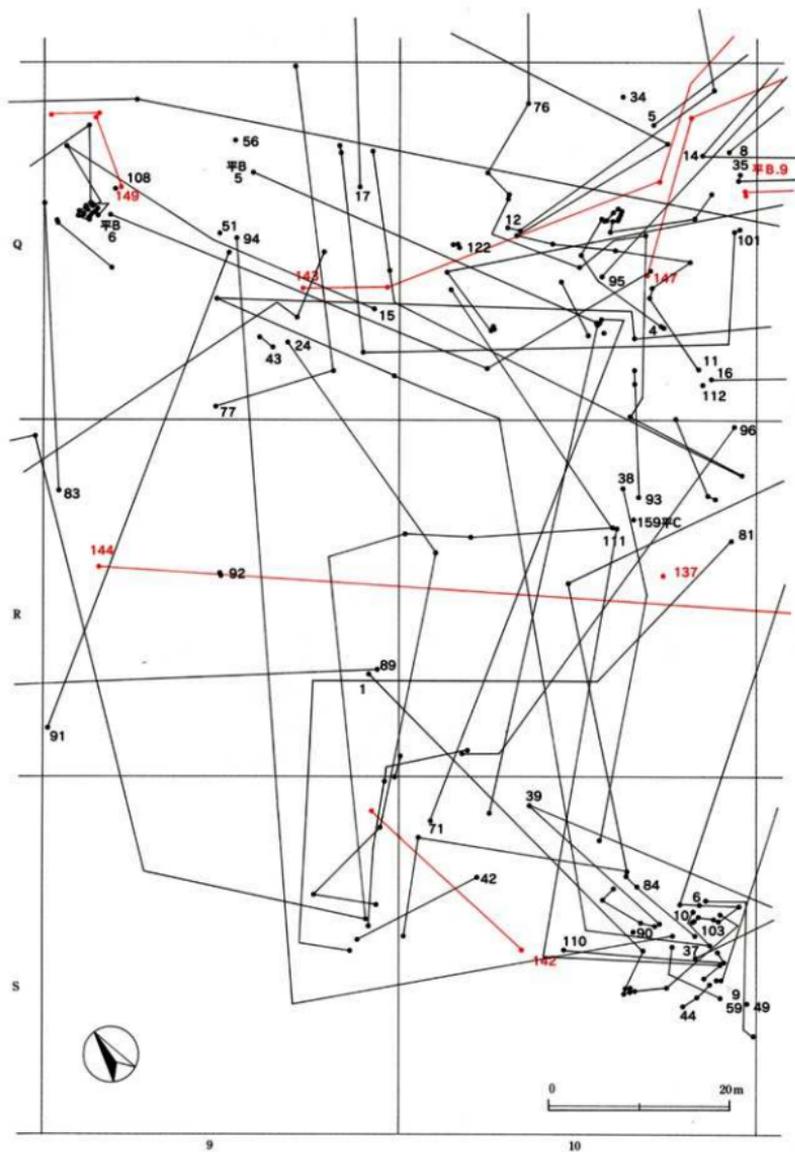
第 17 图 纱见式土器出土状況全体图



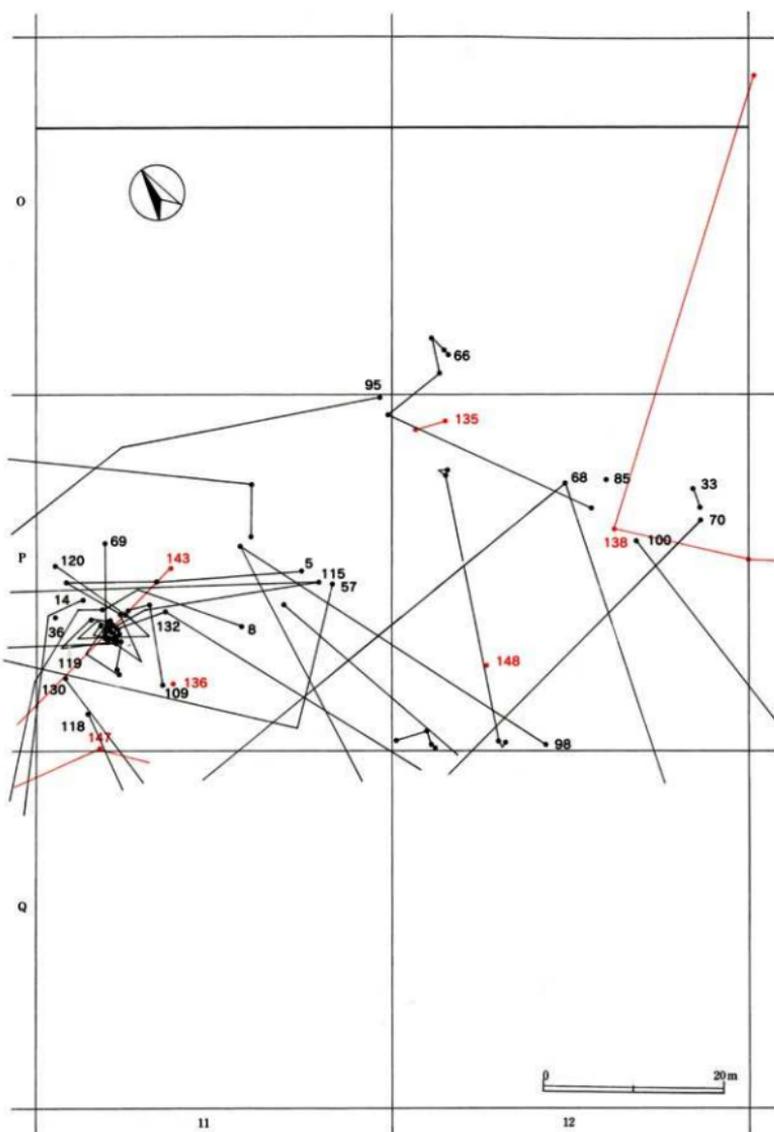
第 18 图 妙見式土器出土状況図 (1)



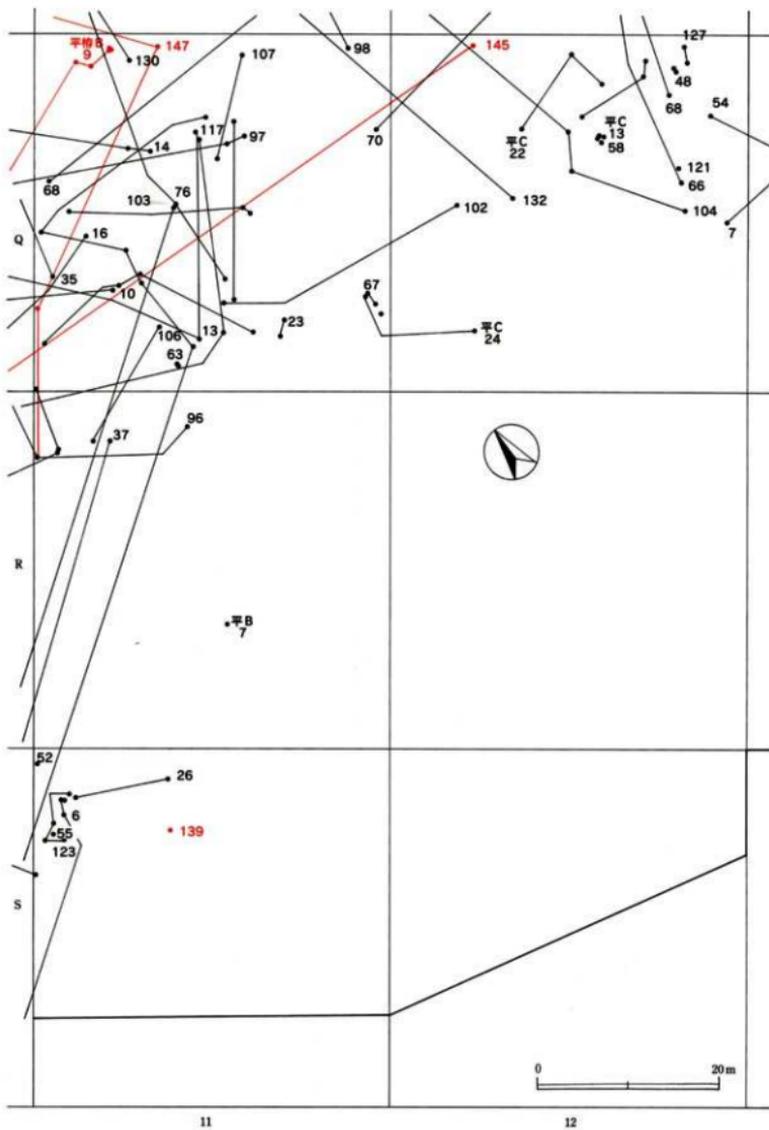
第 19 図 妙見式土器出土状況図 (2)



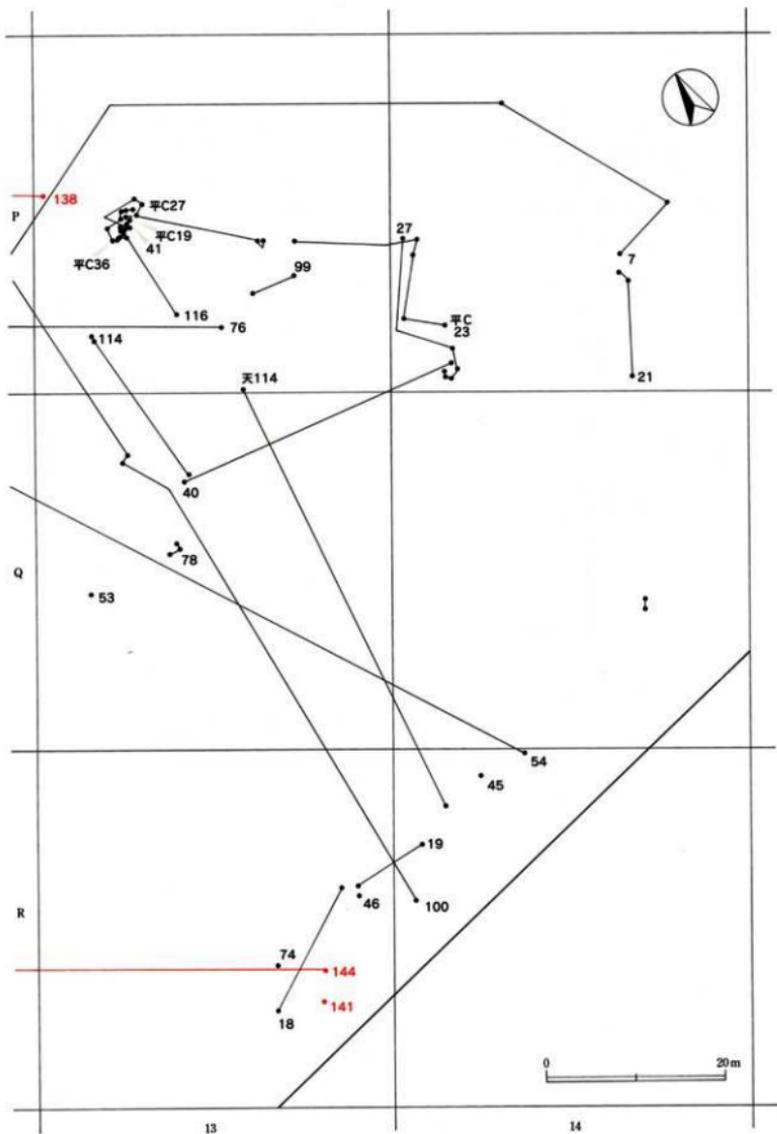
第 20 図 妙見式土器出土状況図 (3)



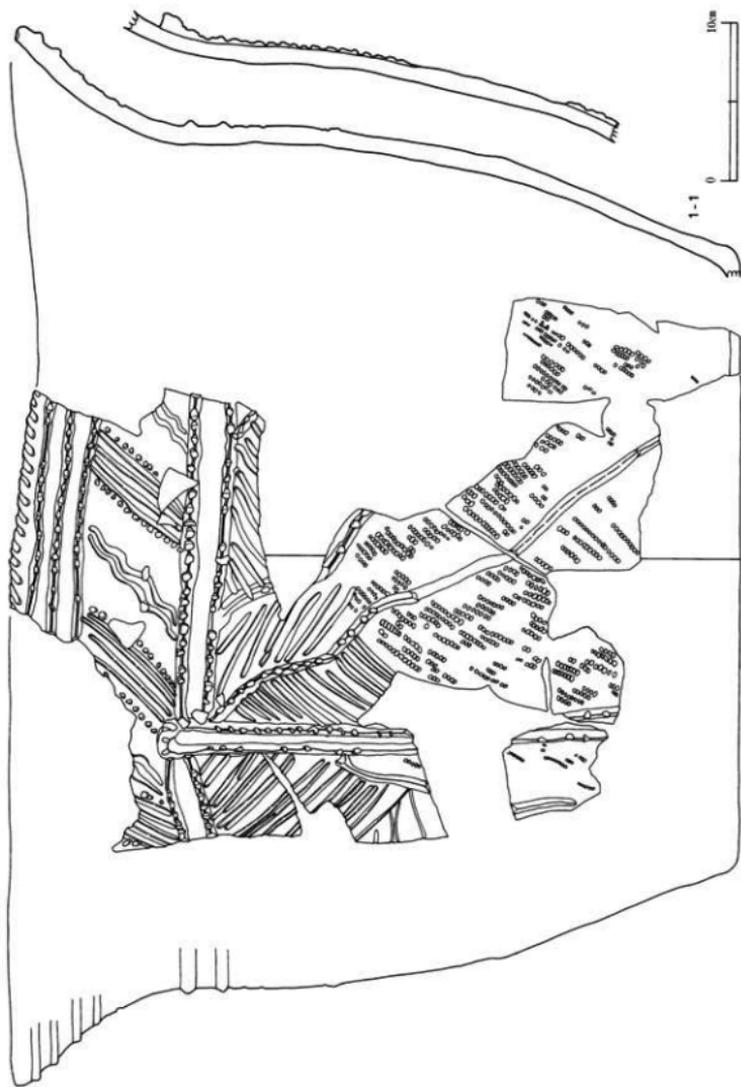
第21圖 妙見式土器出土状況圖(4)



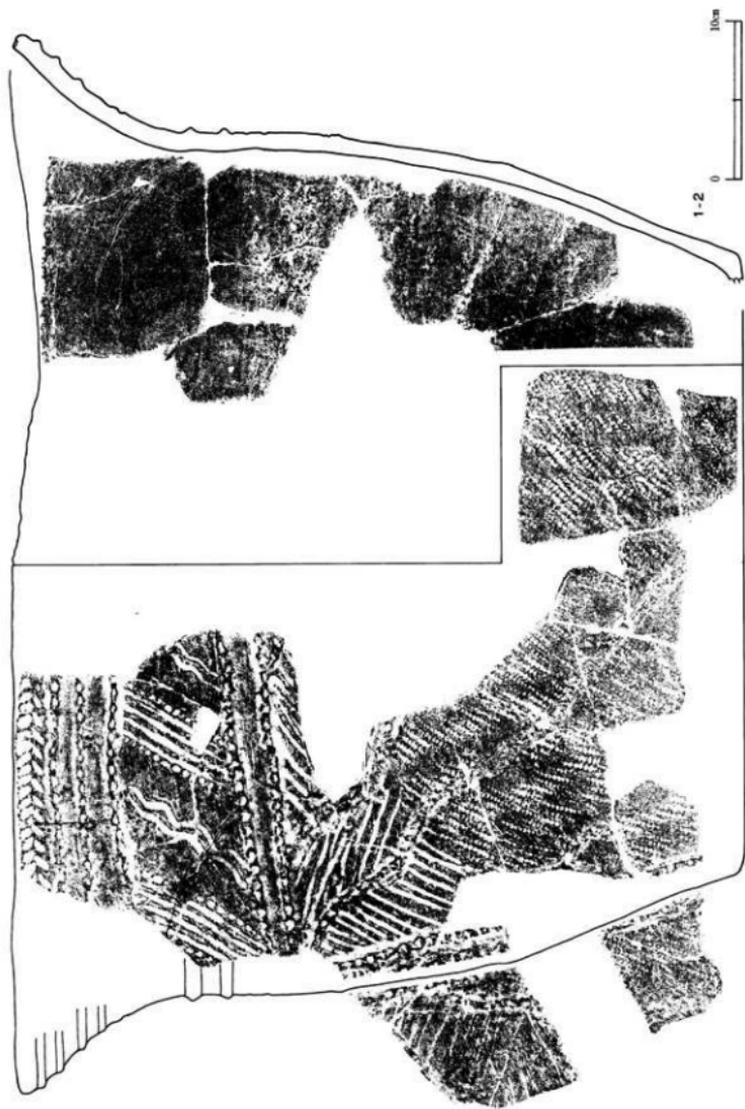
第 22 図 妙見式土器出土状況図 (5)



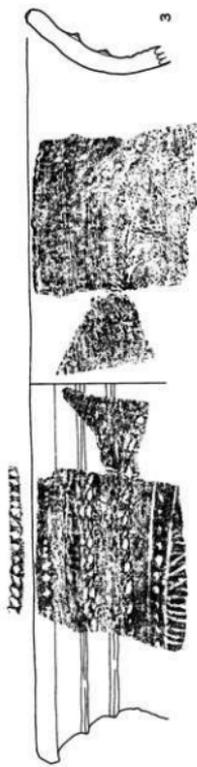
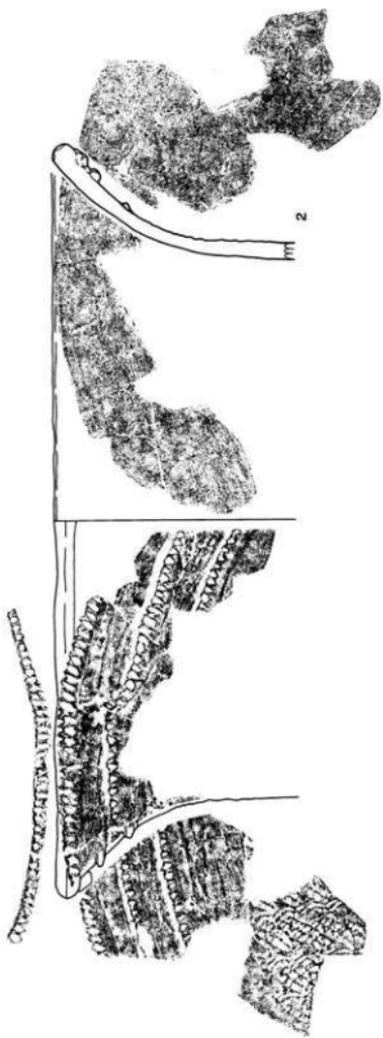
第 23 图 妙見式土器出土状況图 (6)



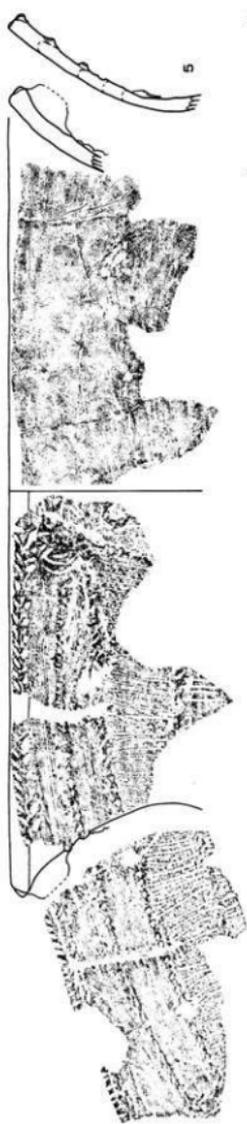
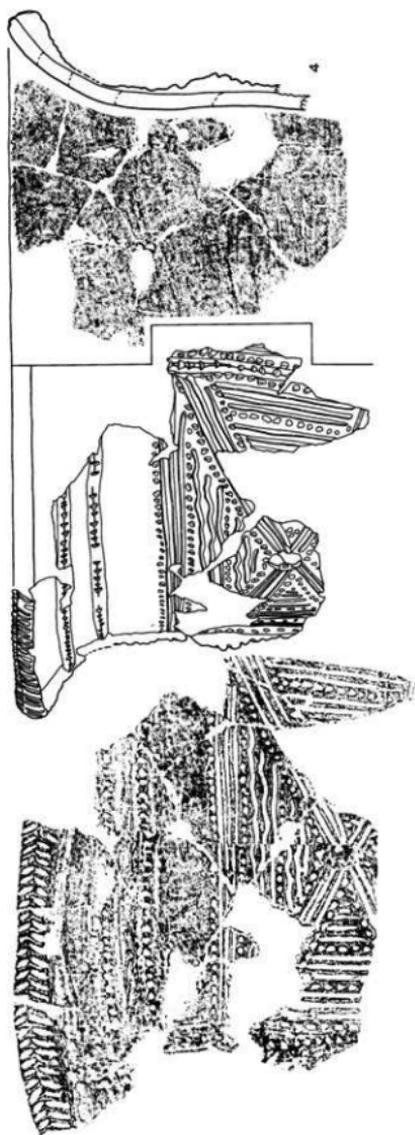
第24图 妙显式土器家陶图1 (深林一1)



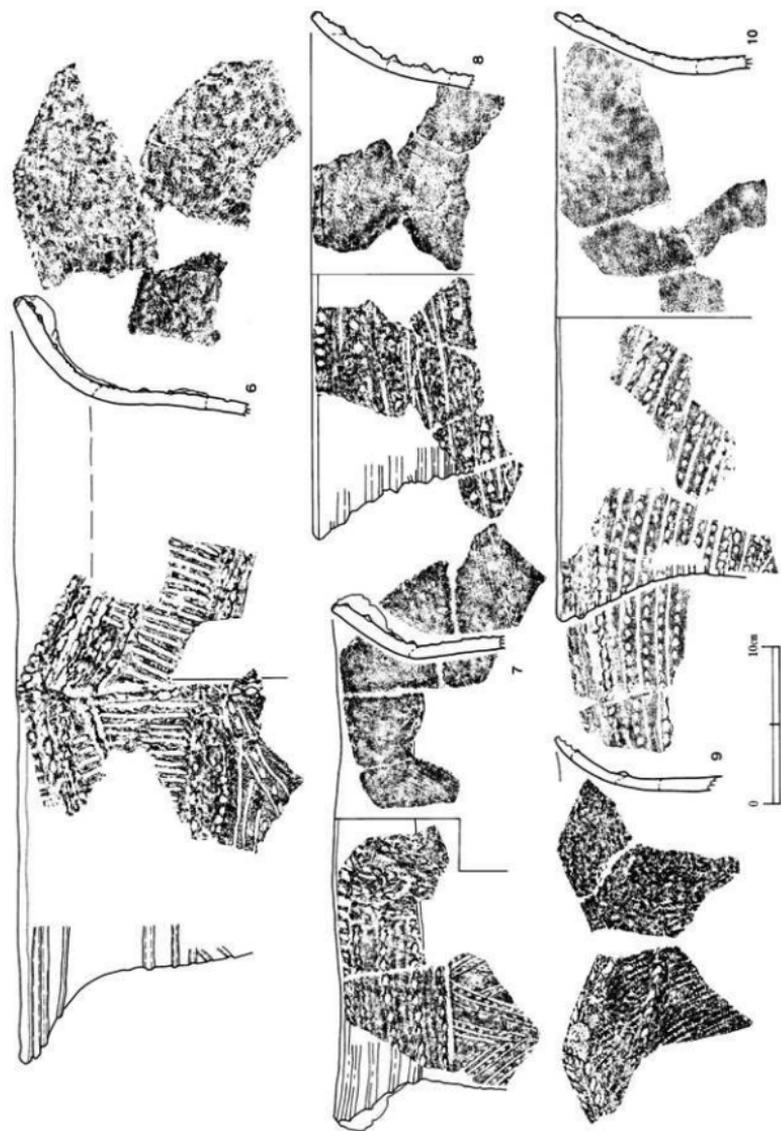
第25圖 妙見式土器実測図2 (添録一2)



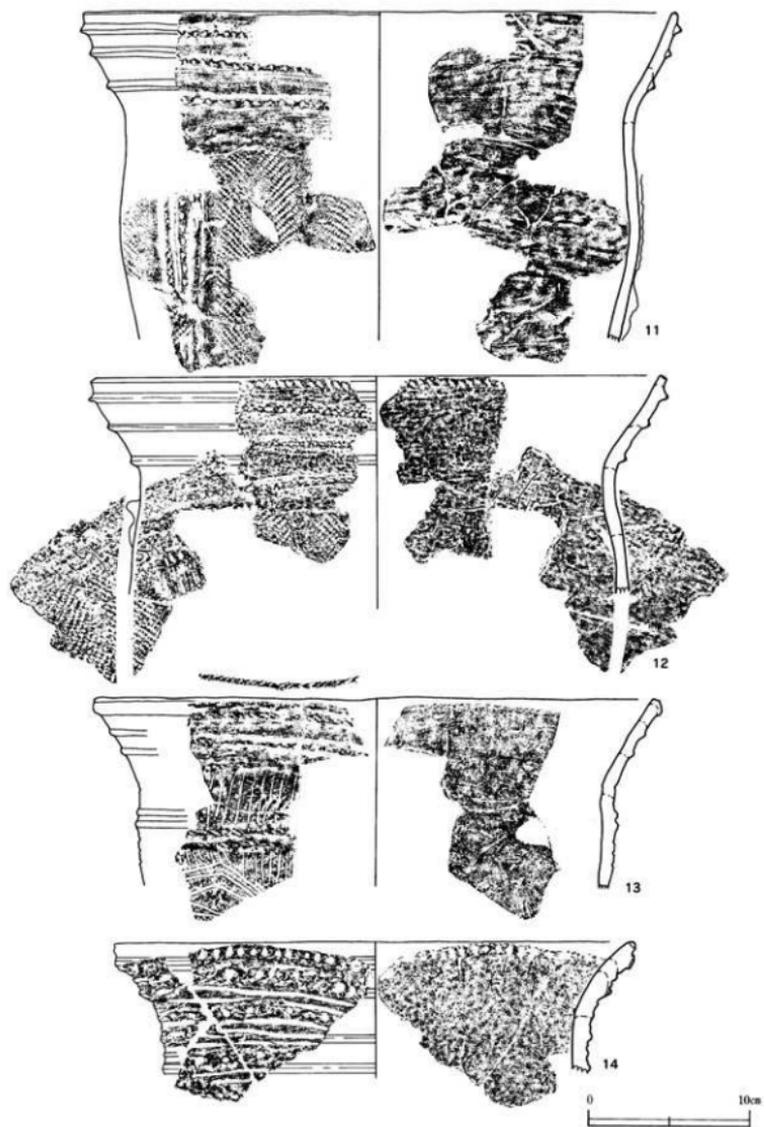
第 26 图 妙見式土器実測图 3 (深鉢-3)



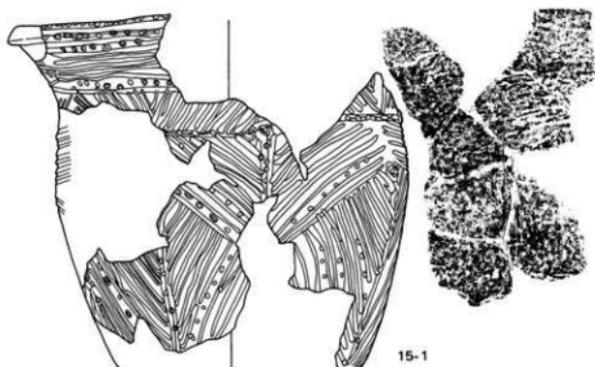
第 27 图 妙泉式土器実測图 4 (深鉢一 4)



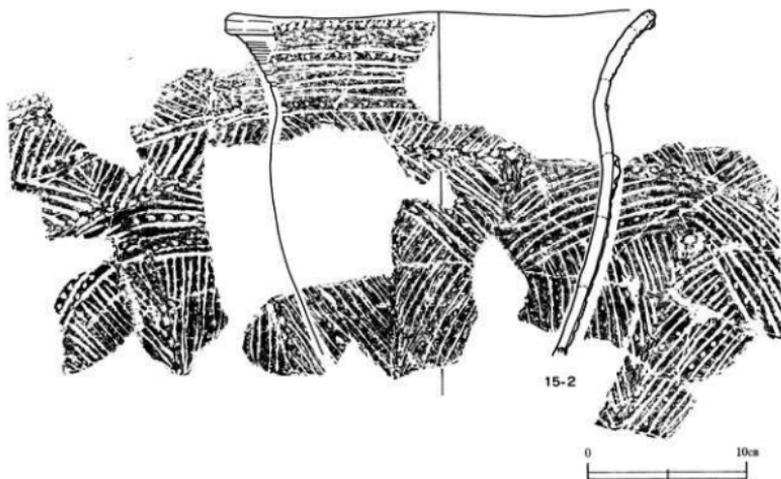
第28图 砂原式土器家瀬图5 (深林一5)



第 29 図 妙見式土器実測図 6 (深鉢-6)



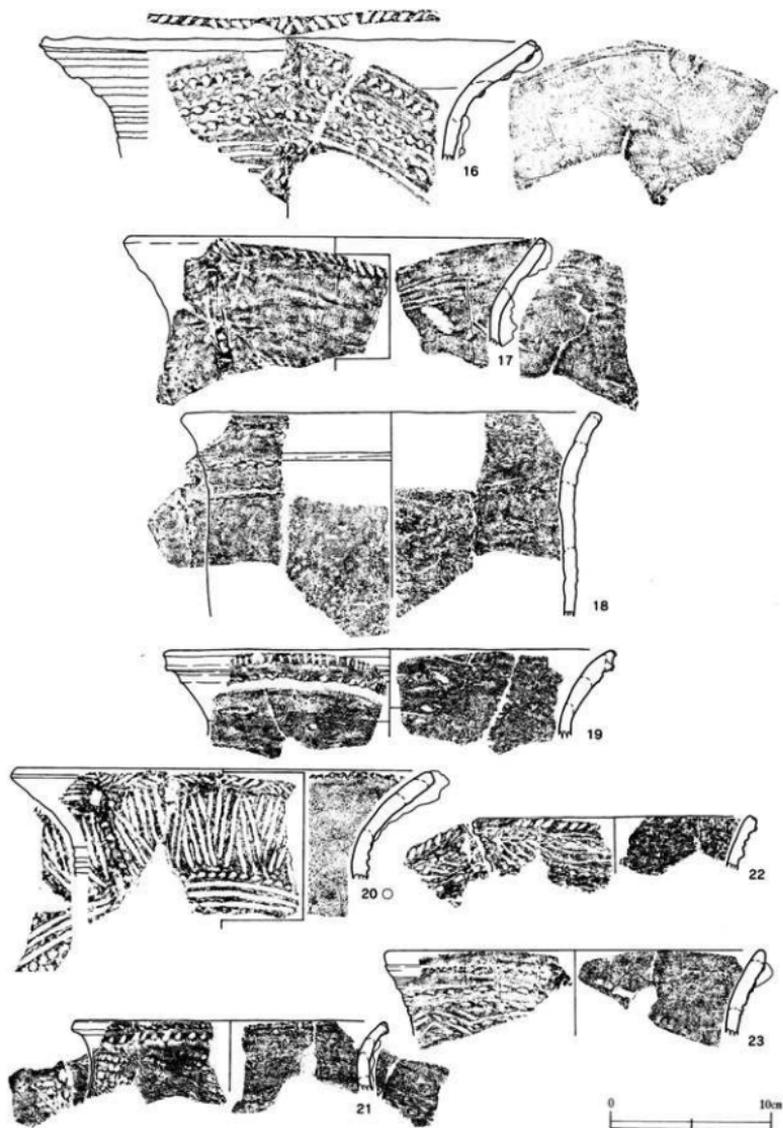
15-1



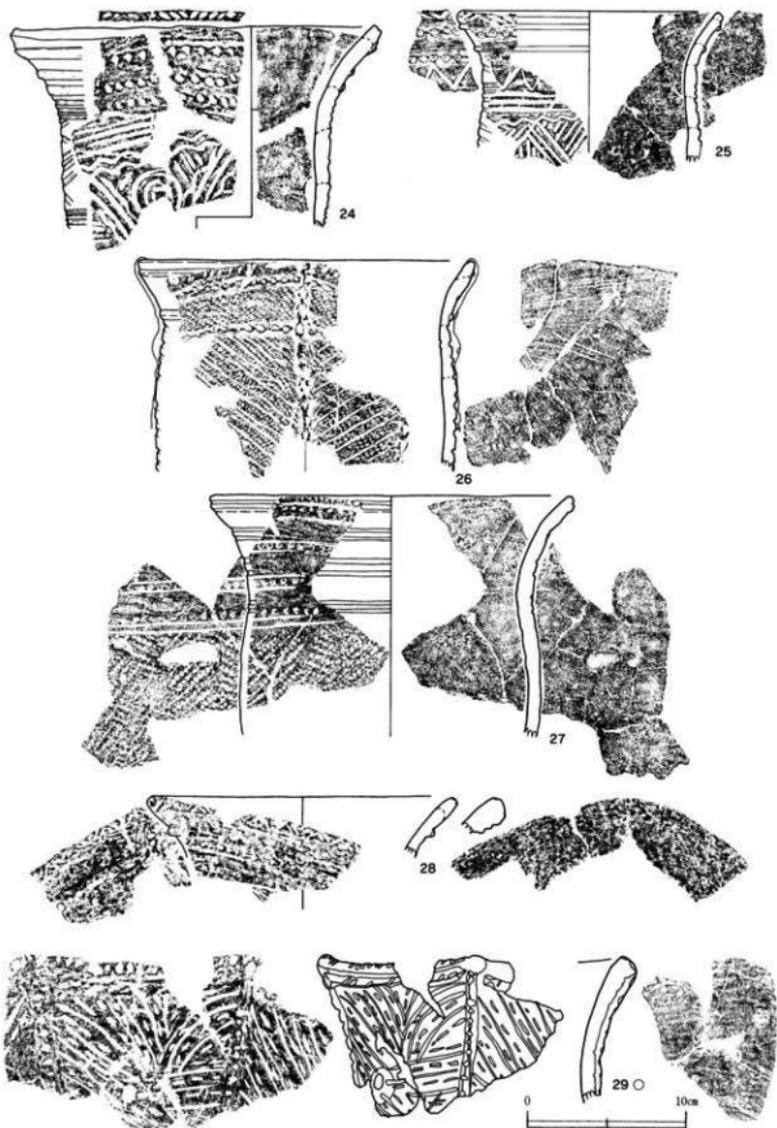
15-2

0 10cm

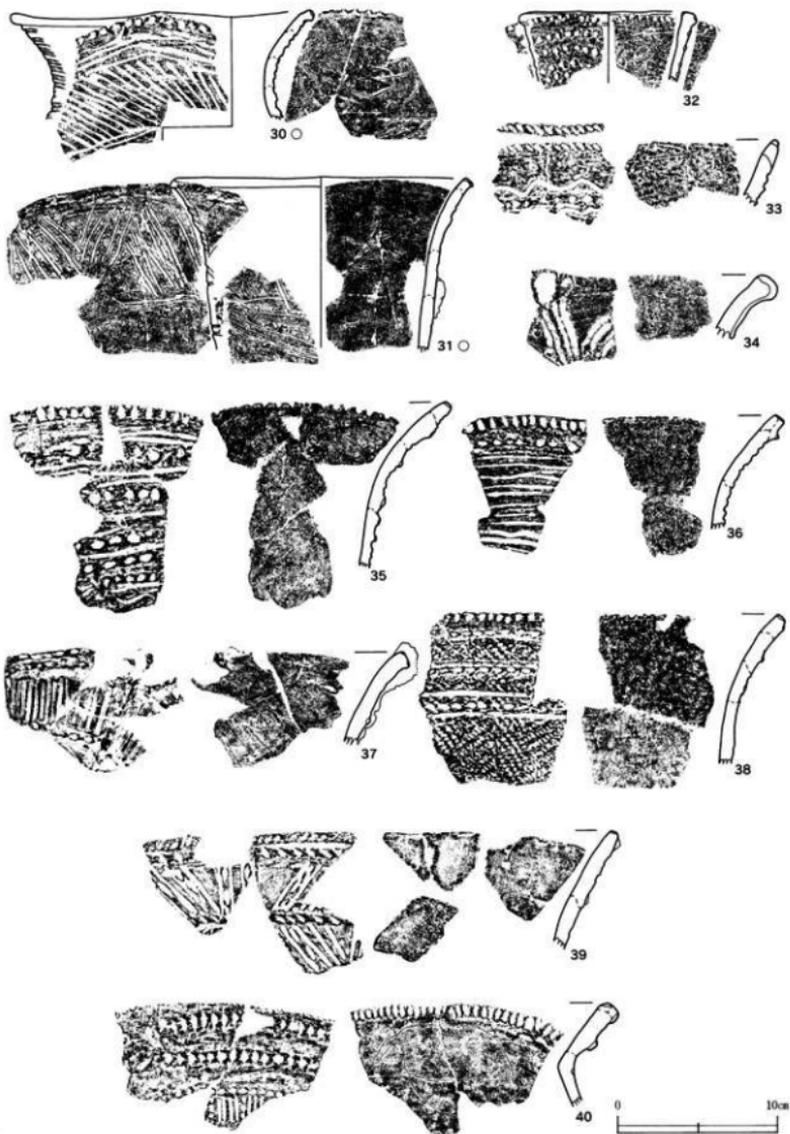
第 30 図 妙見式土器実測図 7 (深鉢-7)



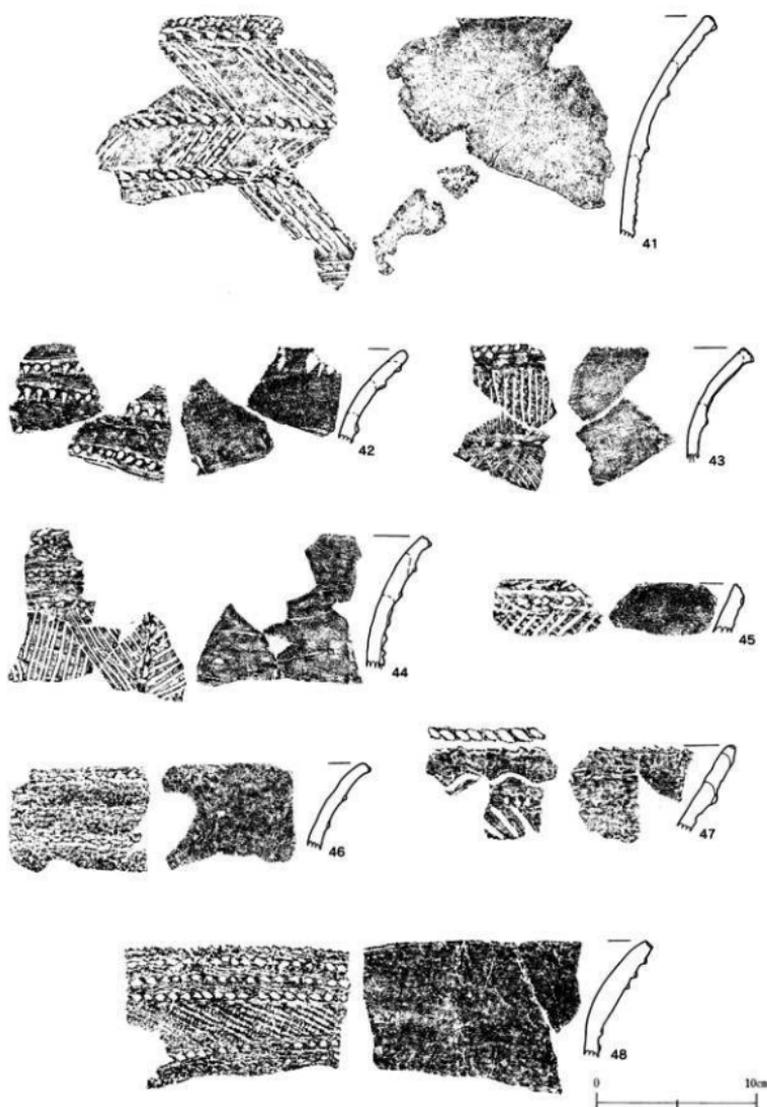
第31図 妙見式土器実測図8 (深鉢-8)



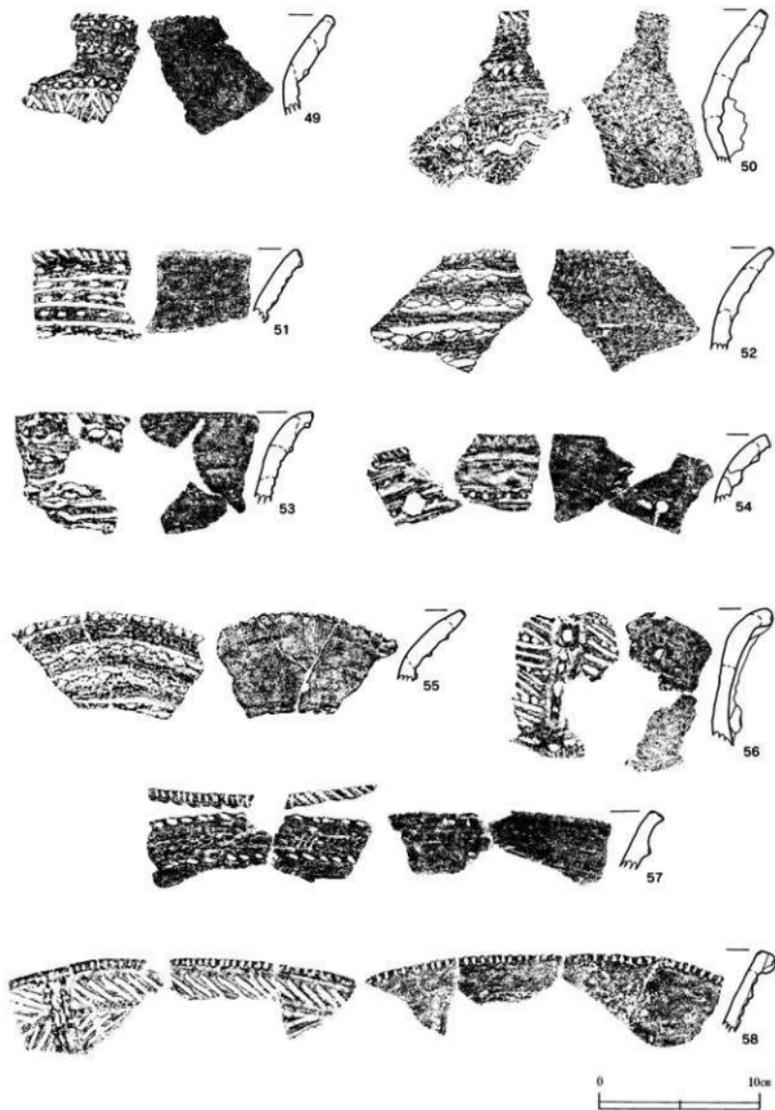
第32图 妙見式土器実測图9 (深鉢-9)



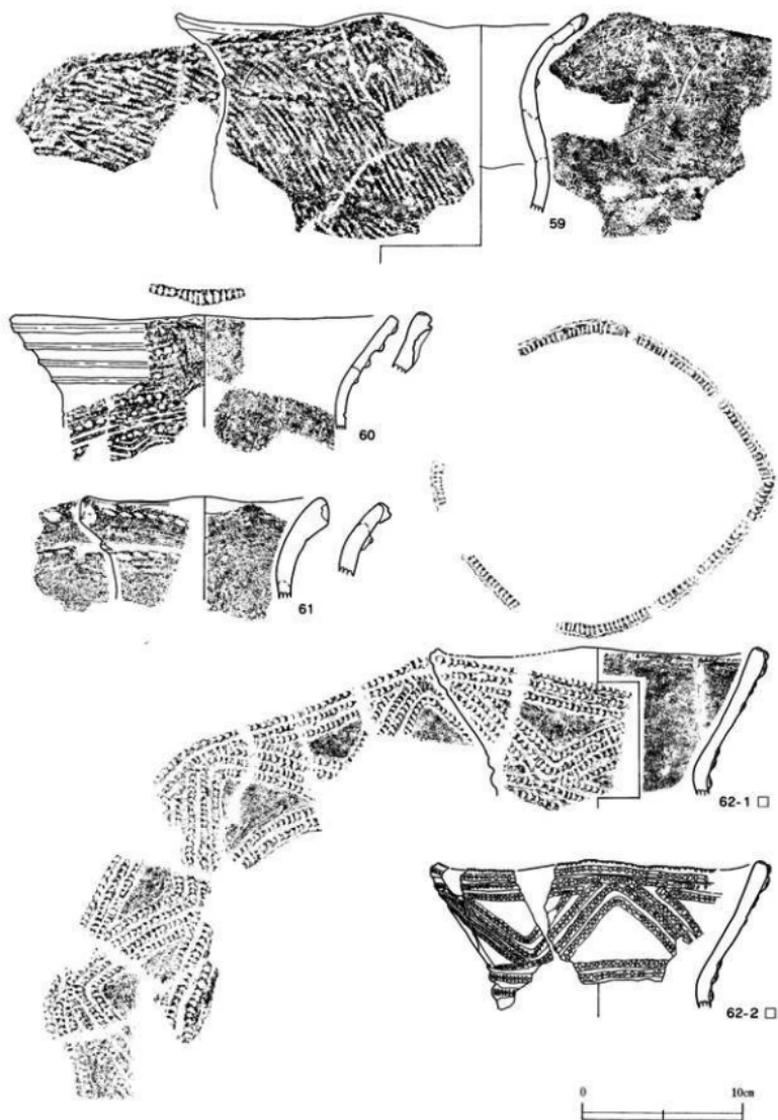
第33图 妙見式土器実測图10 (深鉢-10)



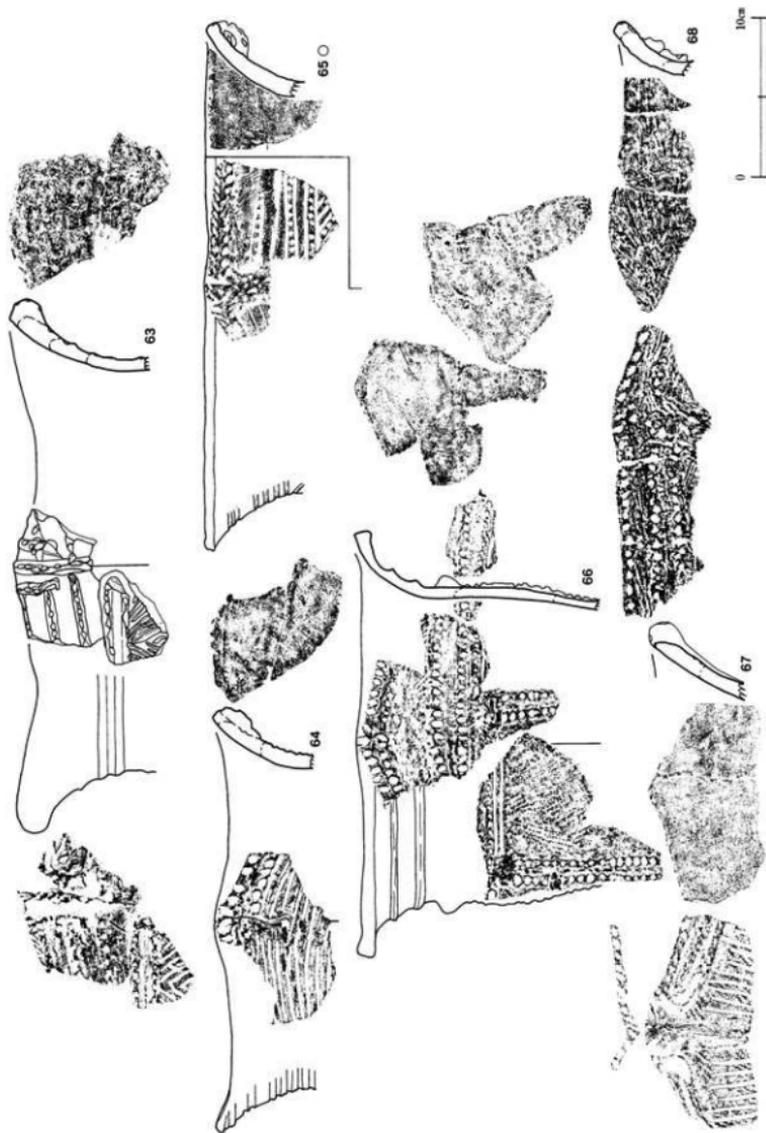
第34图 妙見式土器実測图11(深鉢-11)



第 35 图 妙見式土器実測図12 (深鉢-12)



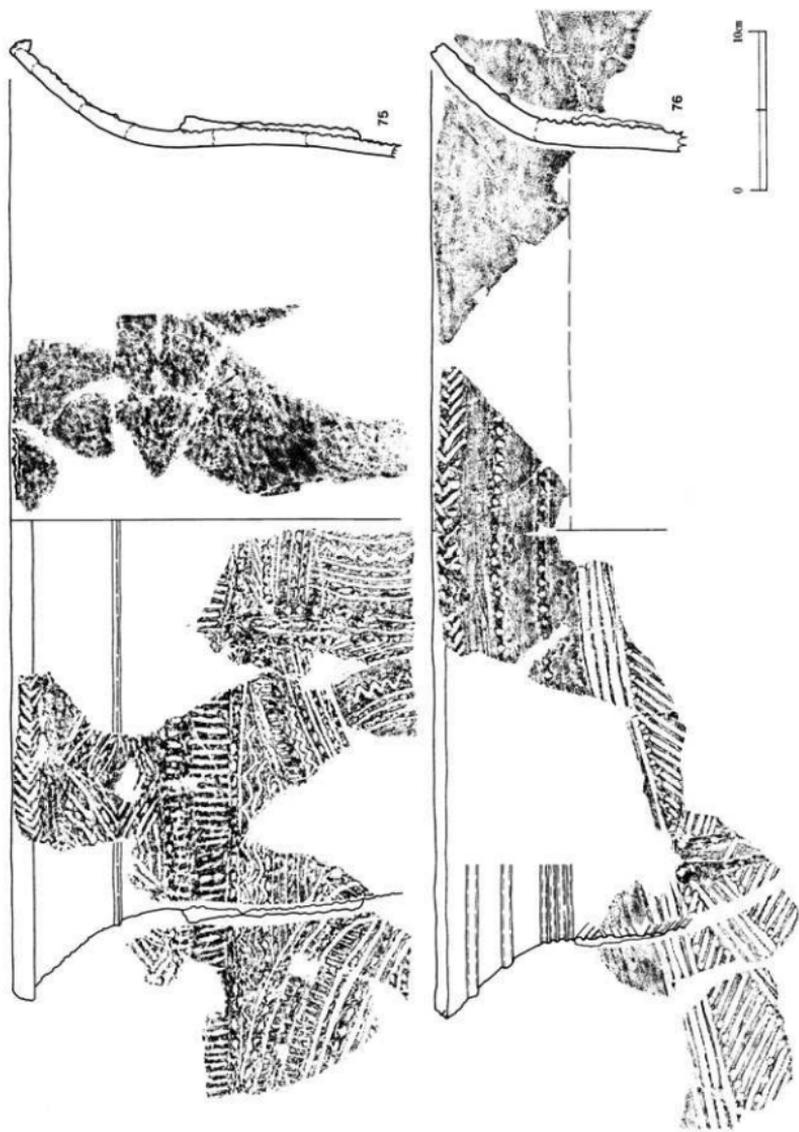
第36圖 妙見式土器実測圖13 (深鉢-13)



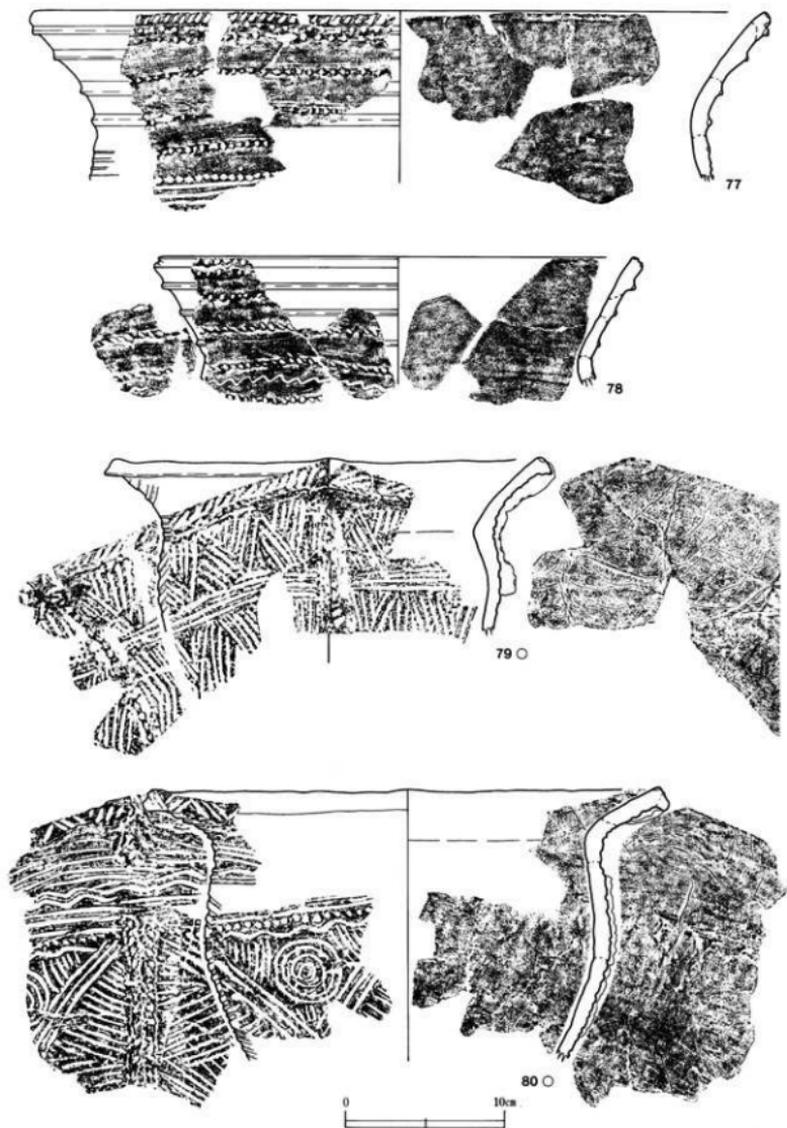
第37圖 妙見式土器実測圖14 (深鉢一14)



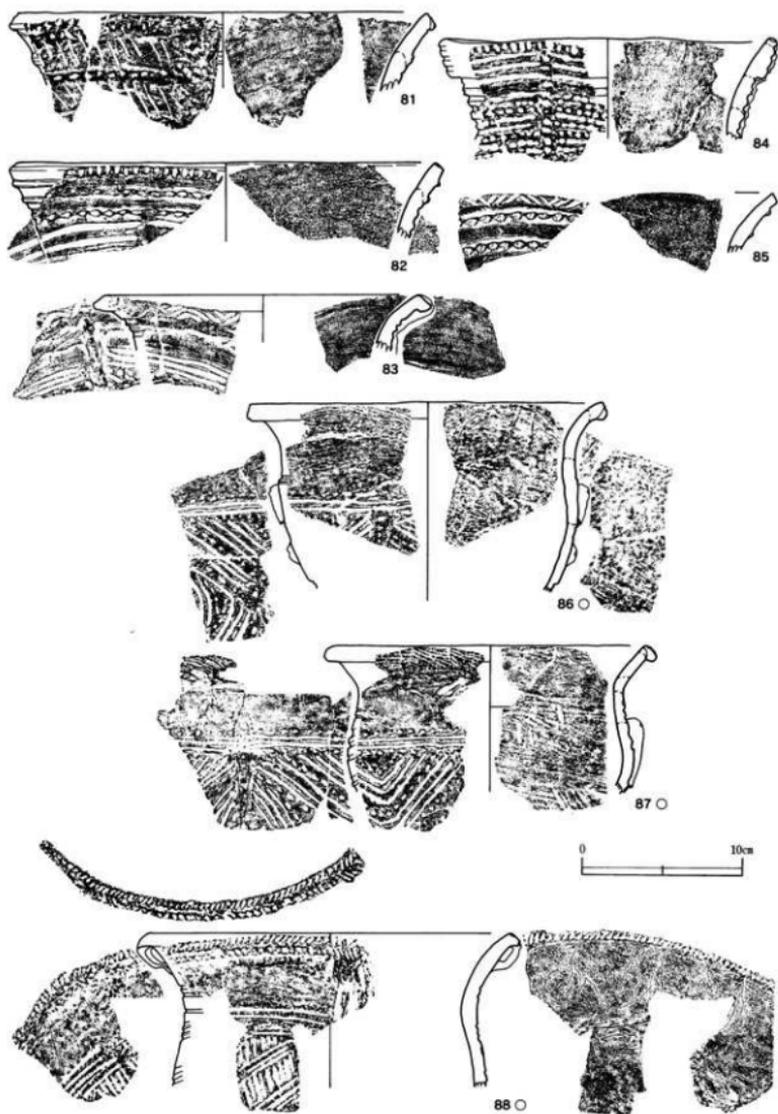
第38圖 妙見式土器実測図15 (深鉢-15)



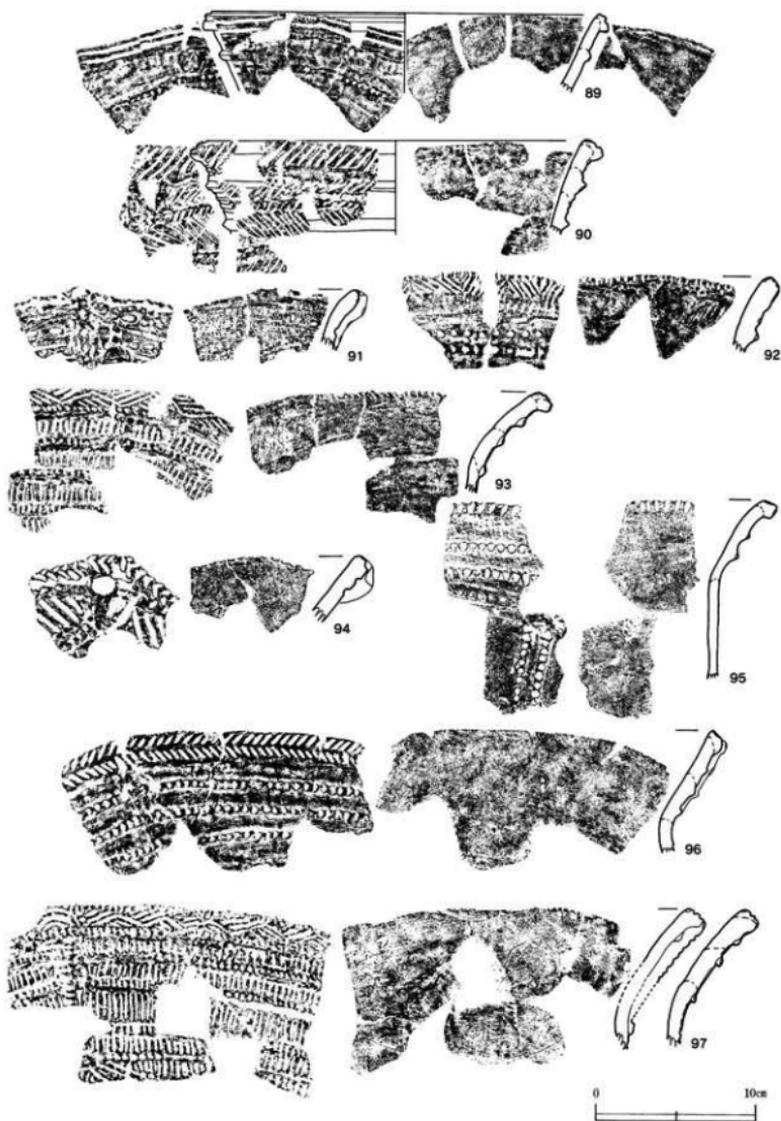
第39圖 妙見式土器要圖16 (漆林一6)



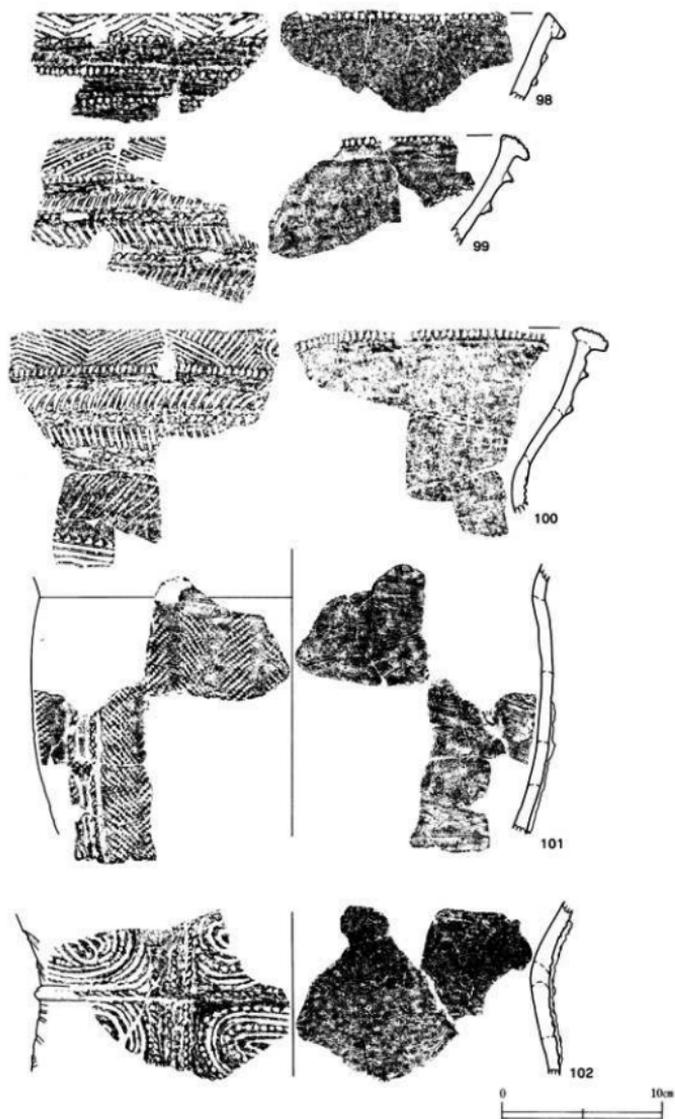
第40図 妙見式土器実測図17 (深鉢-17)



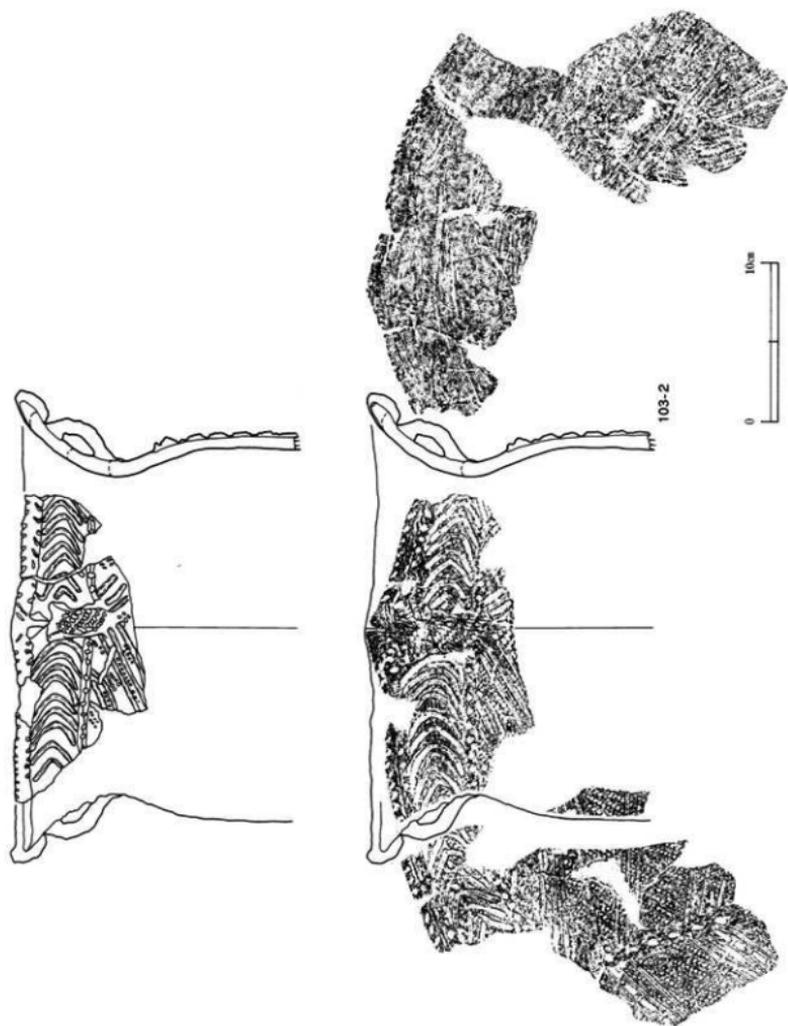
第41图 妙見式土器実測図18 (深鉢-18)



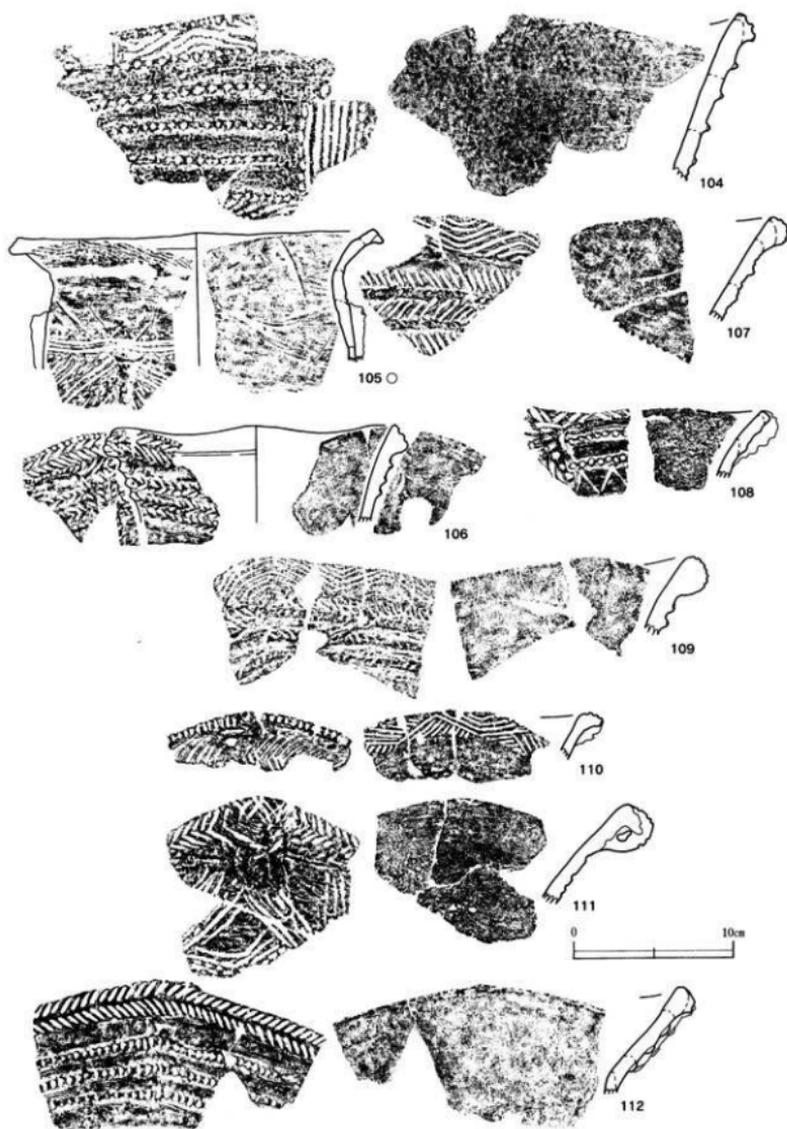
第 42 図 妙見式土器実測図19 (深鉢-19)



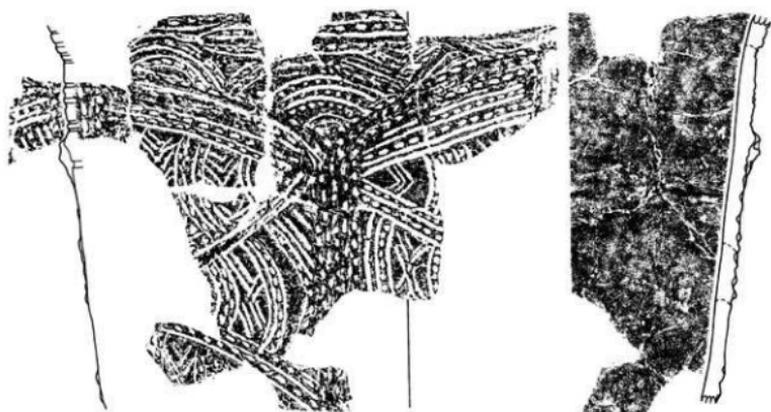
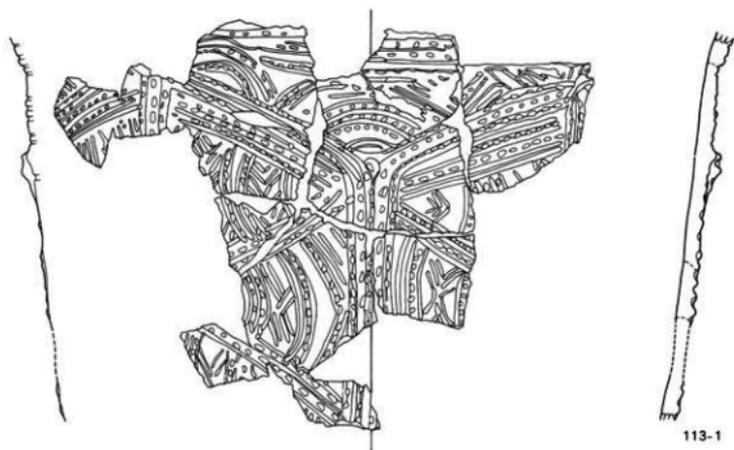
第 43 図 妙見式土器実測図20 (深鉢-20)



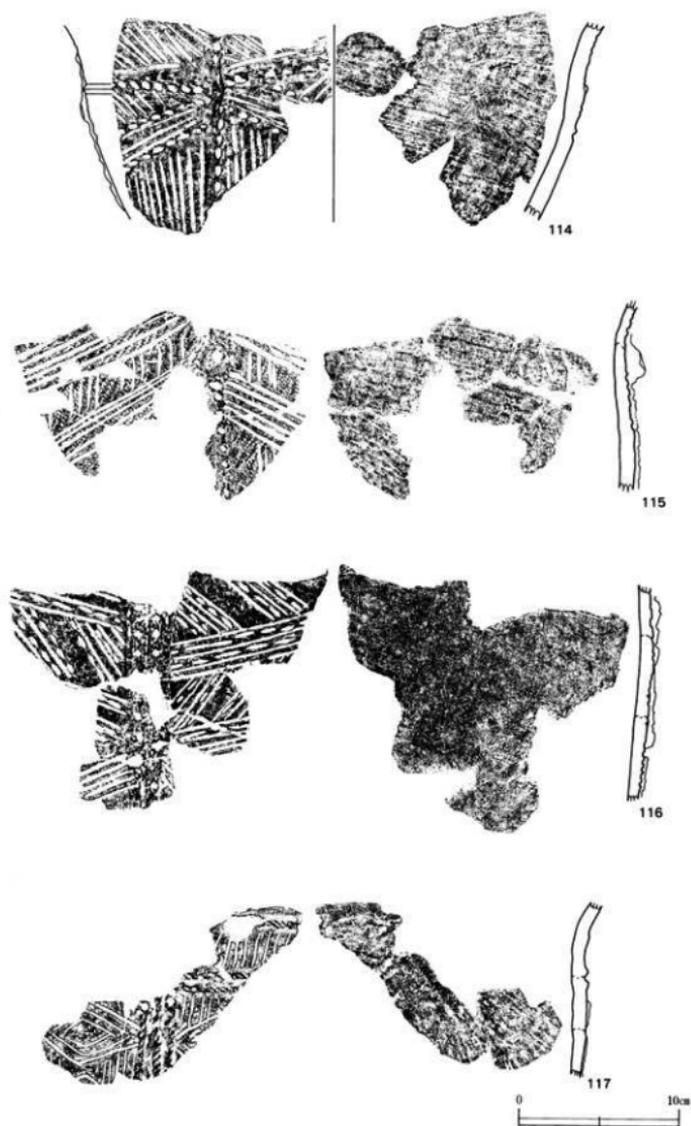
第 44 图 妙見式土器実測図21 (深鉢一21)



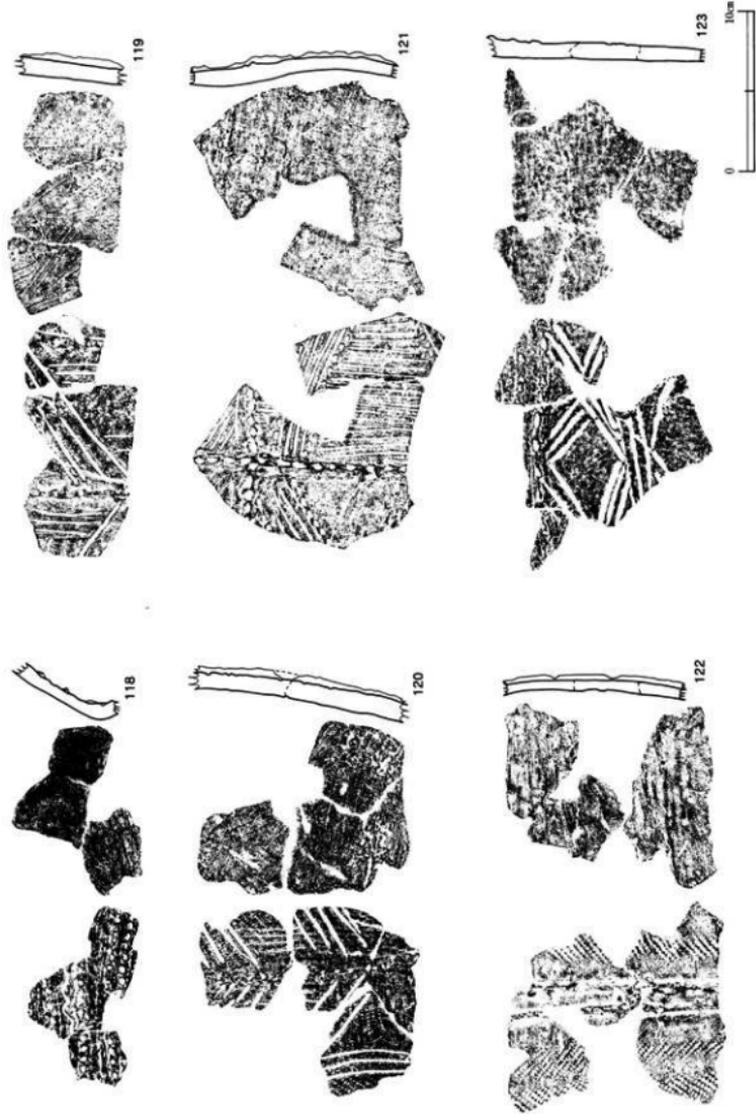
第 45 図 妙見式土器実測図22 (深鉢-22)



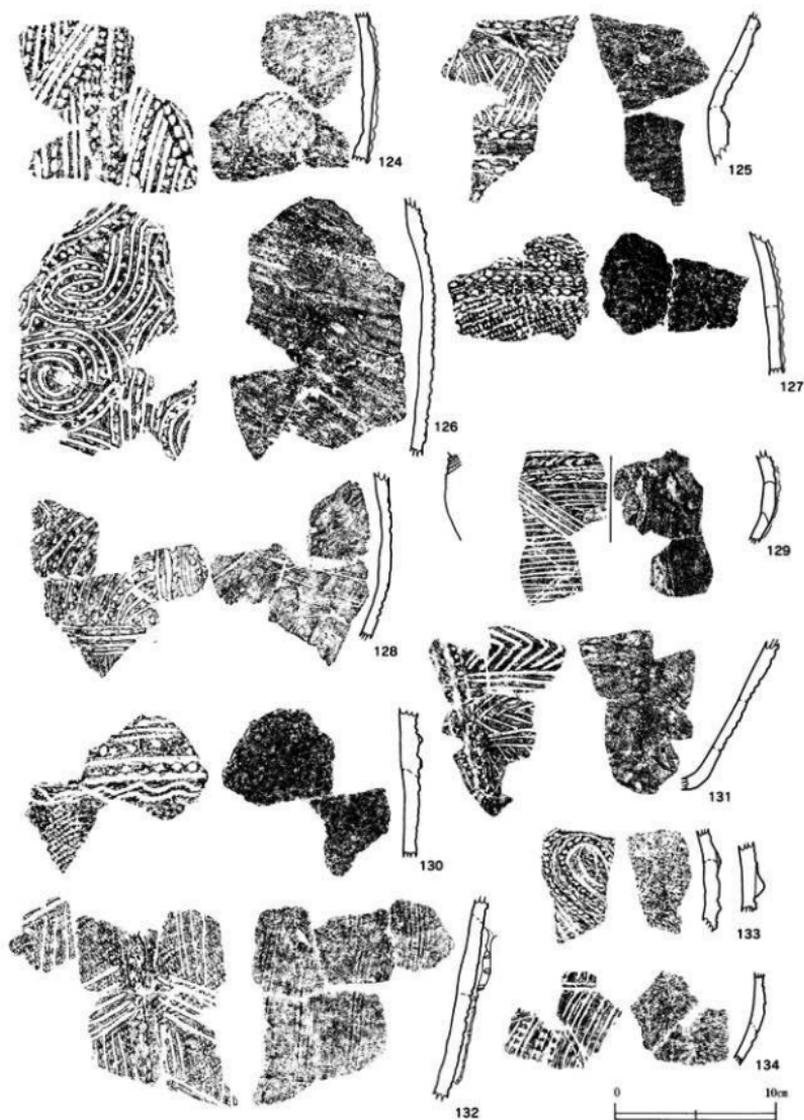
第 46 図 妙見式土器実測図23 (深鉢-23)



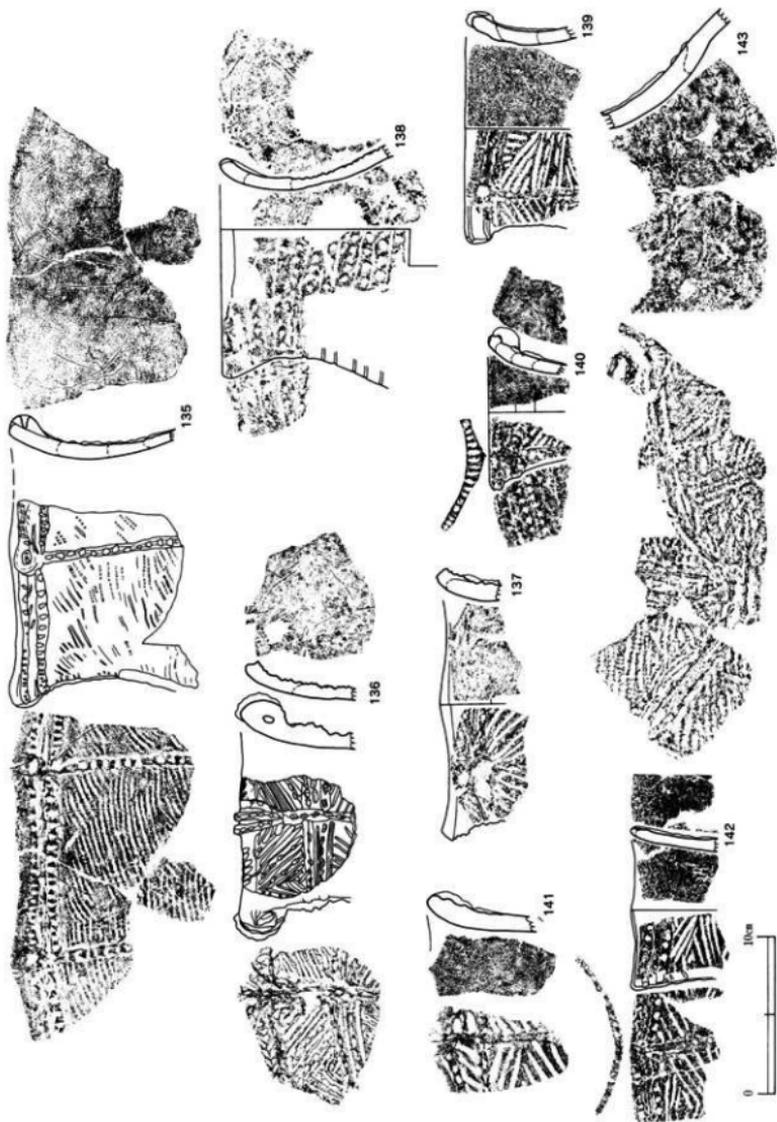
第 47 図 妙見式土器実測図24 (深鉢-24)



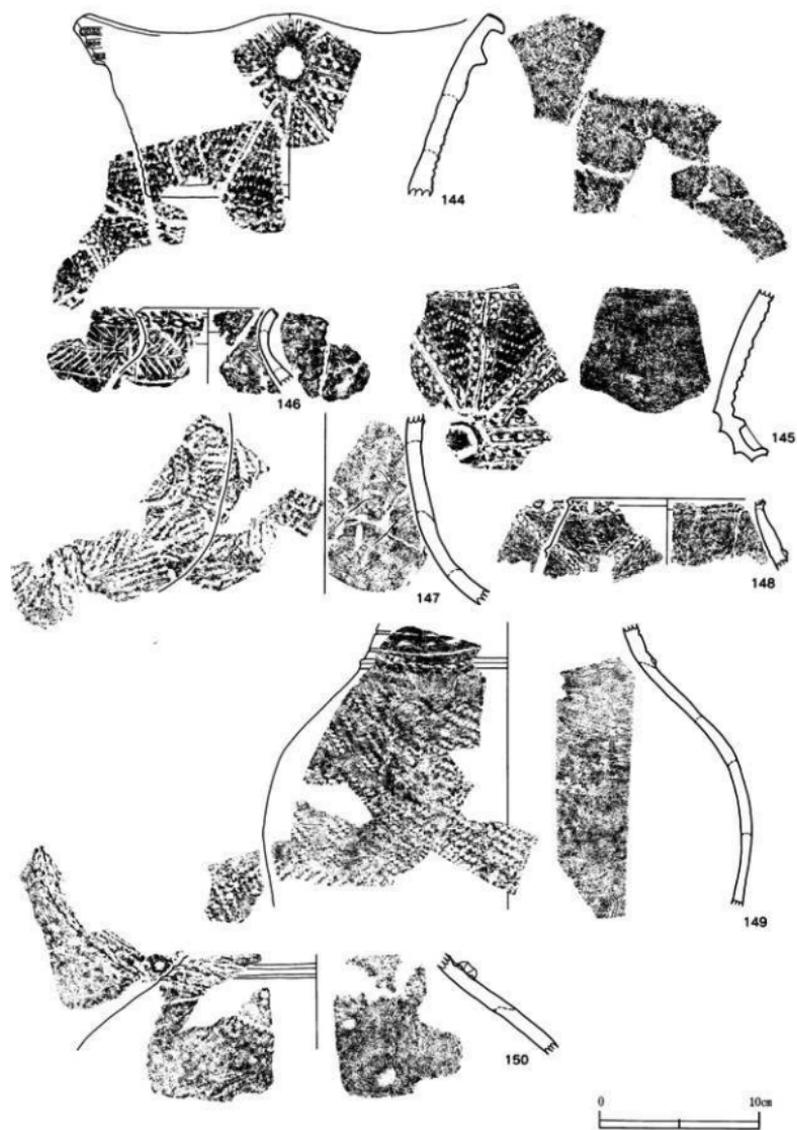
第 48 图 妙皇式土器実測图25 (漆鉢一25)



第 49 図 妙見式土器実測図26 (深鉢-26)



第 50 図 妙見式土器実測図27 (壺一1)



第51图 妙見式土器実測図28(壹-2)

② 第2群 天道ヶ尾式土器 (第52図～第87図)

(附図16・17・18・21)

i) 概要

第2群に属する土器は、180個体を資料化した。

出土状況(第52図～第58図)で注目できるのは、土器出土希薄域が確認できること、数グリッド離れた地点で出土した土器片が数多く接合したこと、Q・R-8・9区とP-10・11区に集中して出土したことである。

第2群に属する土器の特徴は以下の通りである。

ii-1) 深鉢形土器 (第59図～第79図)

器形の特徴は、第1群と共通する要素が多い。まず口縁形態にこく浅い波状口縁を呈する土器(1・2・12など)と、平口縁を呈する土器(15・16・29など)がある。また口唇部が丸く取まり、口縁部が肥厚せずそのまま外反する土器(7・12など)と、小さな三角形の突帯を口唇下に巡らす土器(1・2・8・9など)とがある。

一方、施文の特徴では次の諸要素が第1群と共通する。まず、口唇外面に小さな三角形の突帯を巡らす土器では、突帯部に刻みを横位方向に羽状で施文する土器や、多重の山形文を意識して施文する土器があること。

また、頸部文様帯から胴部文様帯では、波頂部(想定部)直下に瘤状突起と縦位方向の突帯を貼付することが主な特徴として挙げることができた。

さらに胴部文様帯に単節斜行縄文を施す土器では、全て原体を縦位方向に回転させて施文している。そして燃りの種類には、2段左燃(LR)の原体で施文する土器(9・21など)と、2段右燃(RL)の原体で施文する土器(88)と、2段左燃(LR)の原体と2段右燃(RL)の原体とを交互に施文して羽状縄文の効果を狙った土器(2・76)とがあることが挙げられる。

また、胴部文様帯に単節斜行縄文を施さず、沈線文と刺突速点文とで文様を構成する土器があること。さらに、棒状工具を使用して沈線文を施す場合、先端部を尖らして沈線文の打ち込みや止めを流して施文する特徴は第1群と共通した特徴で、第3群とは異なる特徴である。

しかし、口縁部文様帯に刻目突帯を施さず、沈線文と刺突速点文とで文様を構成し、横位方向に巡らす点が第1群と異なる特徴であり、本群の指標となる。

さて、土器の大きさに注目すると、大型土器は1を、中型1類土器は2～6・8～11を、中型2類土器は7・12～34を、中型3類土器は35～54を、小型土器は55～61を、指摘できる。

ii-2) 壺形土器 (第80図125～第87図180)

壺形土器の器形の特徴として、口縁部が外反する器形(125・重文壺3・重文壺6・重文壺10)と、頸部から口縁部が直行する「長頸壺」の器形(126～162・重文壺4・重文壺5)を呈する土器とがある。

まず外反器形の土器では、器形の特徴としては、第1に口縁形態はこく緩やかな波状口縁を呈し、頸部から口縁部にかけては強く外反し、頸部と肩部との境は緩やかに移行する土器(125・重文壺3・重文壺10)を挙げることができる。第2には口縁形態が平口縁を呈し、口縁部と頸部との境が無く、肩部と口縁部が強く屈曲し、口縁部が外反する土器(重文壺6)を挙げることができる。

さて施文の特徴としては、頸部文様帯には縦位方向の沈線文と刺突速点文とで文様を構成する。胴部文様帯に2段左燃(LR)の単節斜行縄文を施す土器(125)と、2段右燃(RL)の単節斜行縄文を施す土器(重文壺3・重文壺6)と、無文の土器(重文壺10)とがある。

次に長頸壺の器形の特徴としては、口縁形態が緩やかな波状口縁を呈する土器と、平口縁を呈する土器とがある。また頸部から肩部にかけて強く屈曲する土器(126～136)と、なだらかに移行する土器(137～179)とがある。なだらかに移行する土器は、口縁部が直行するが、僅かに外反する程度であった。

さて施文の特徴としては、波頂部(想定部)下の口縁部や頸部に、瘤状突起や橋状把手を貼付し、さらに口縁部文様帯から頸部文様帯にかけて貼付突帯を施す土器が多いのは第1群と同じである。

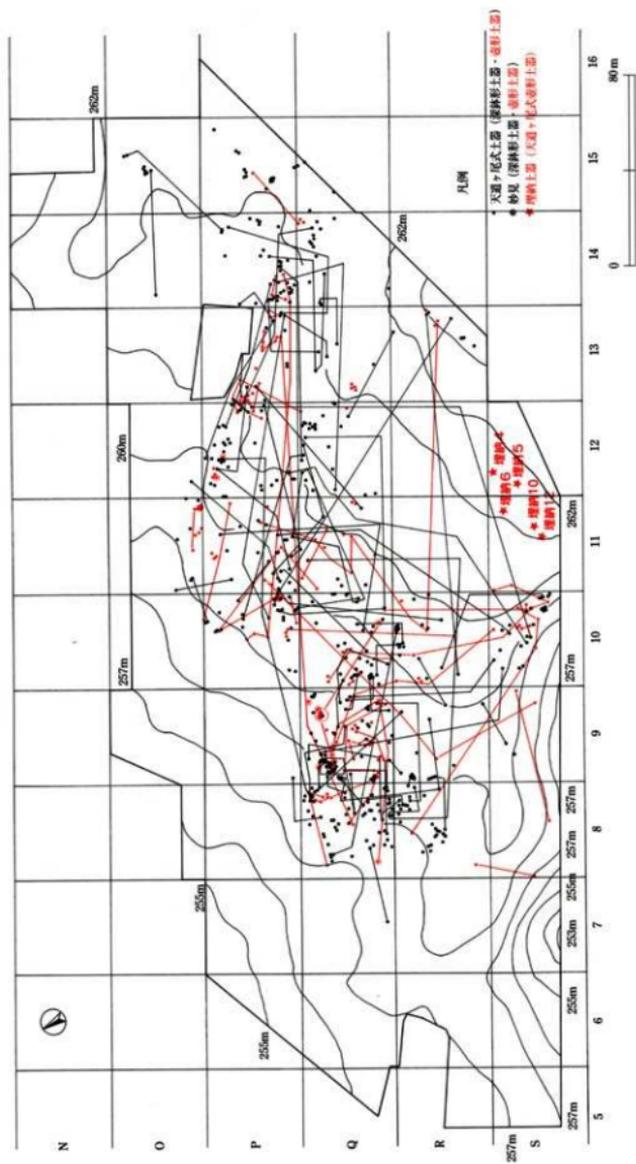
そのうえで、口縁部文様帯から頸部文様帯には刻目突帯を数条巡らす。中にはさらに斜位方向の沈線文と刺突速点文とで文様を構成する土器がある。

多くの第2群では第1群と同様に、胴部文様帯に単節斜行縄文を施す。ただし第2群では胴部文様帯に施す単節斜行縄文の燃りの種類としては、2段右燃(RL)の原体で施文する土器(177～179)が多く見られた。

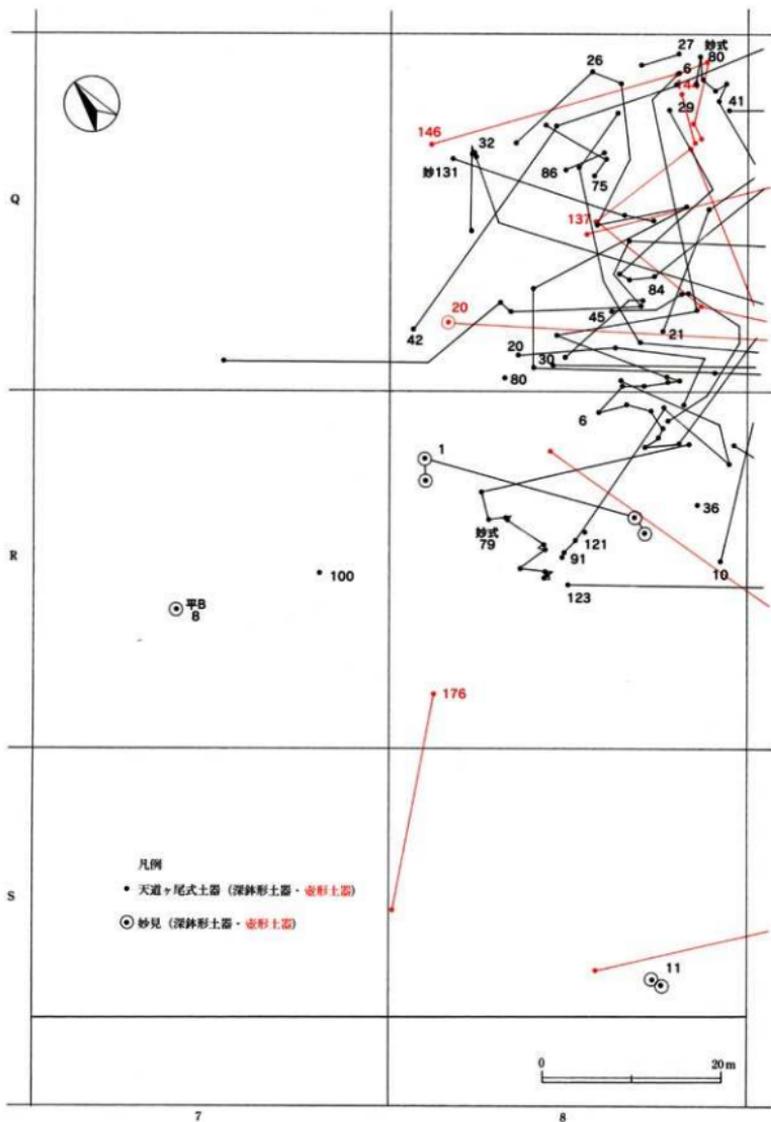
胴部文様帯に沈線文と刺突速点文とで文様を構成するのが確認できた土器は180だけであった。

ii) 小結

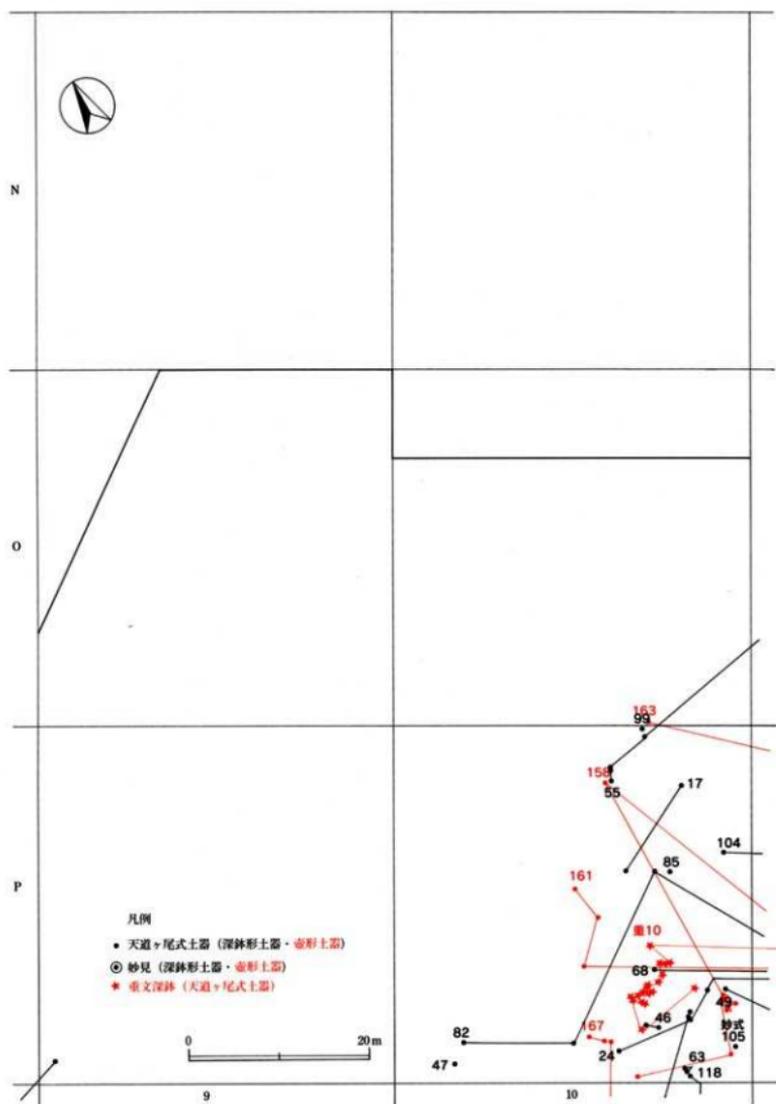
これらの特徴を南九州縄文早期土器編年に照らすと、第2群は天道ヶ尾式土器に該当する。天道ヶ尾式土器は、熊本県人吉市七地町に所在する天道ヶ尾遺跡で出土した土器を標識とする。そのうち、V-1-e 類に分類された「狭義の天道ヶ尾式土器」に該当する。



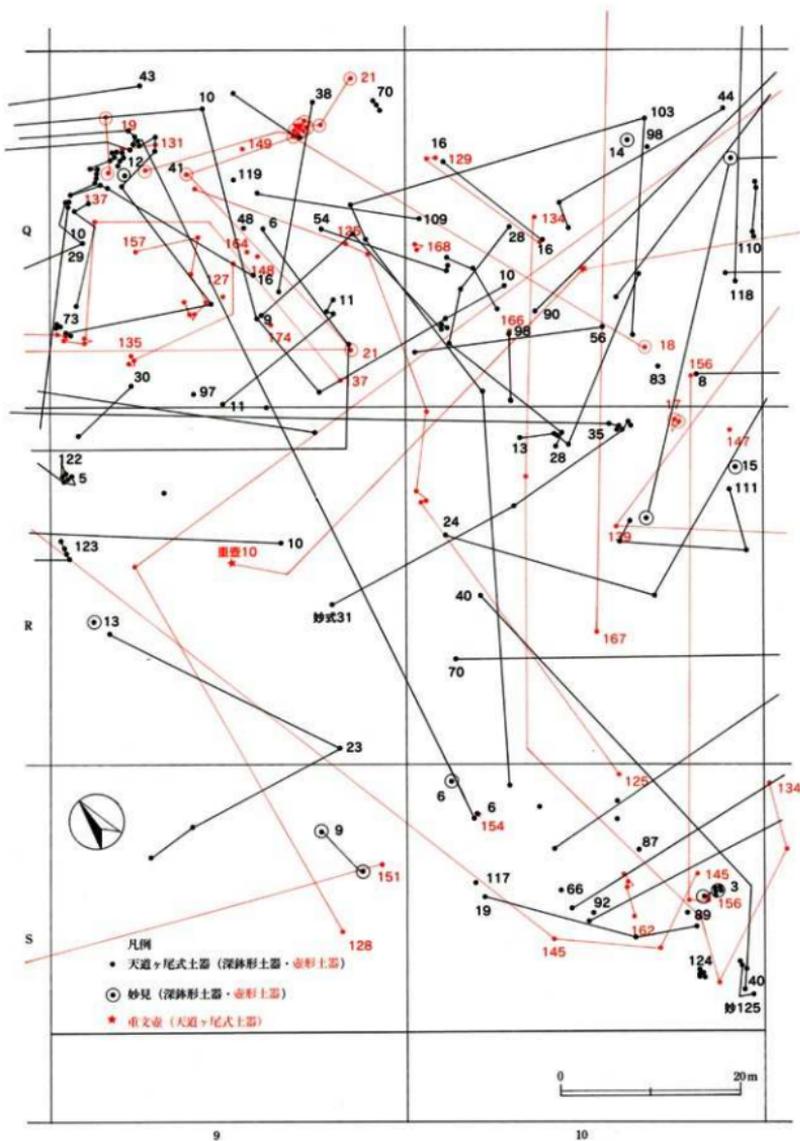
第52図 天濠ヶ尾式土器出土状況全体図



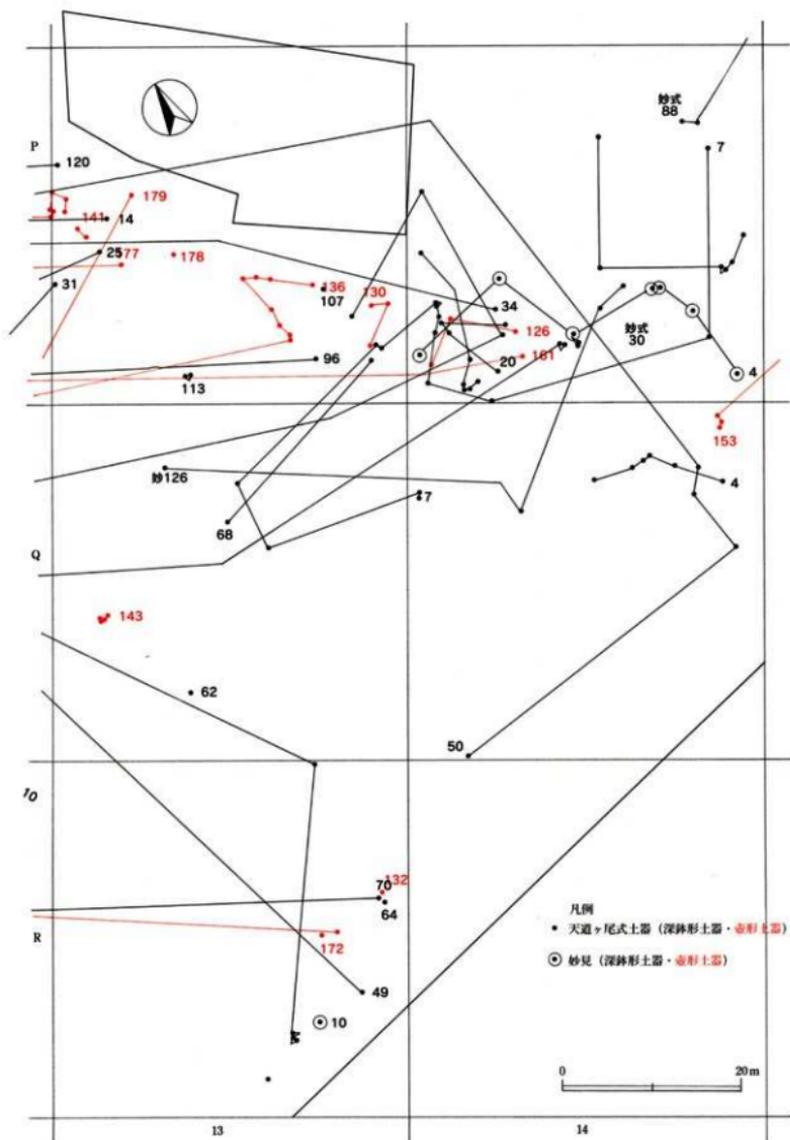
第 53 図 天道ヶ尾式土器出土状況図 (1)



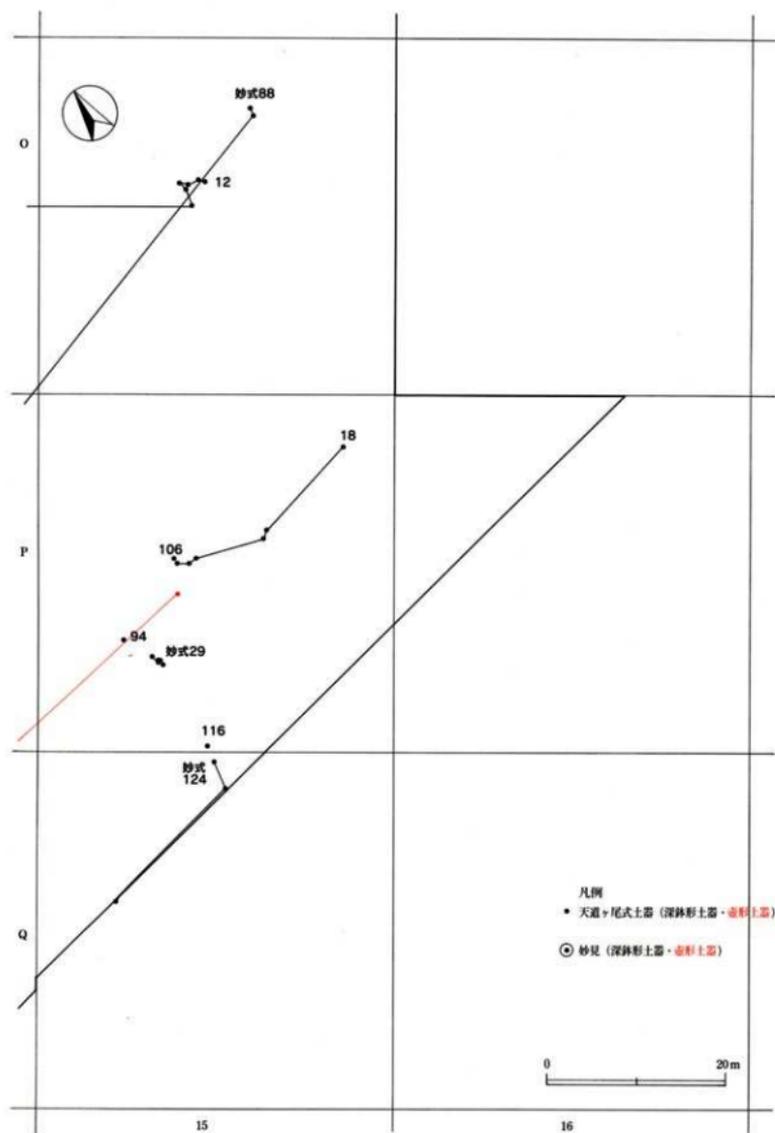
第 54 図 天道ヶ尾式土器出土状況図（2）



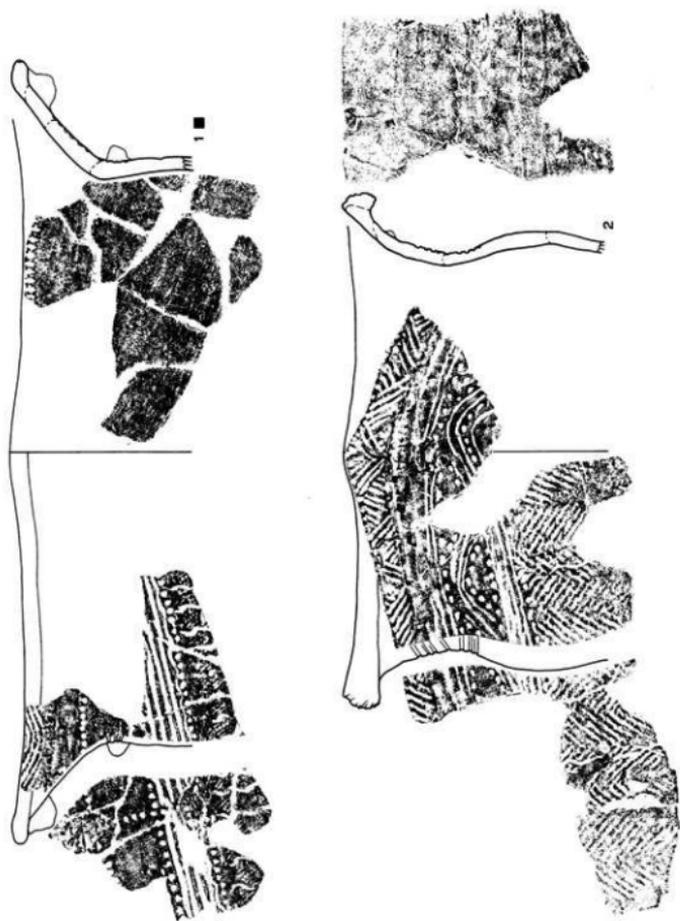
第 55 図 天道ヶ尾式土器出土状況図 (3)



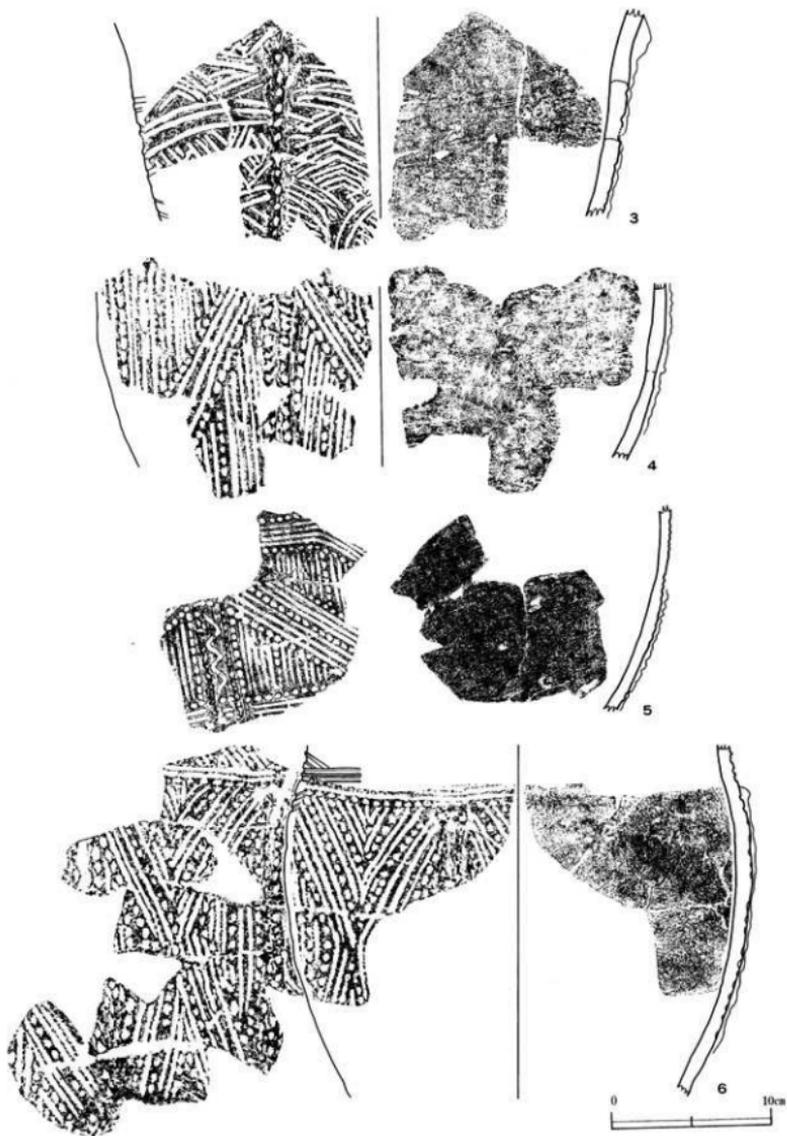
第 57 図 天道ヶ尾式土器出土状況図 (5)



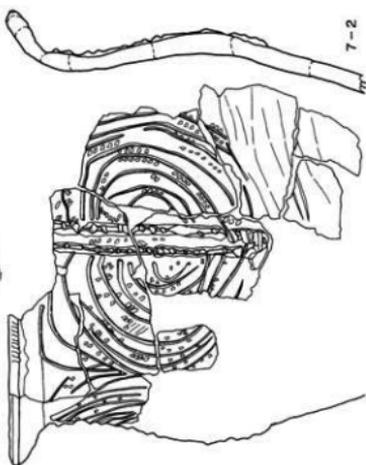
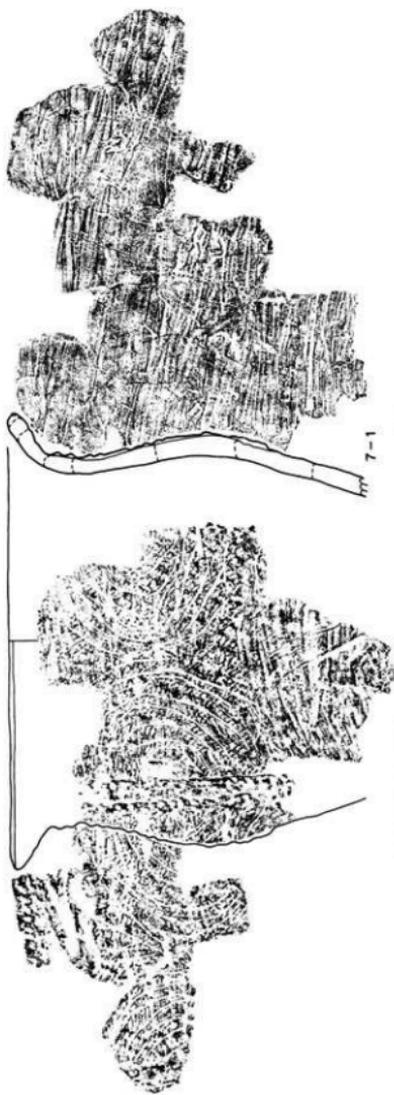
第 58 図 天通ヶ尾式土器出土状況図 (6)



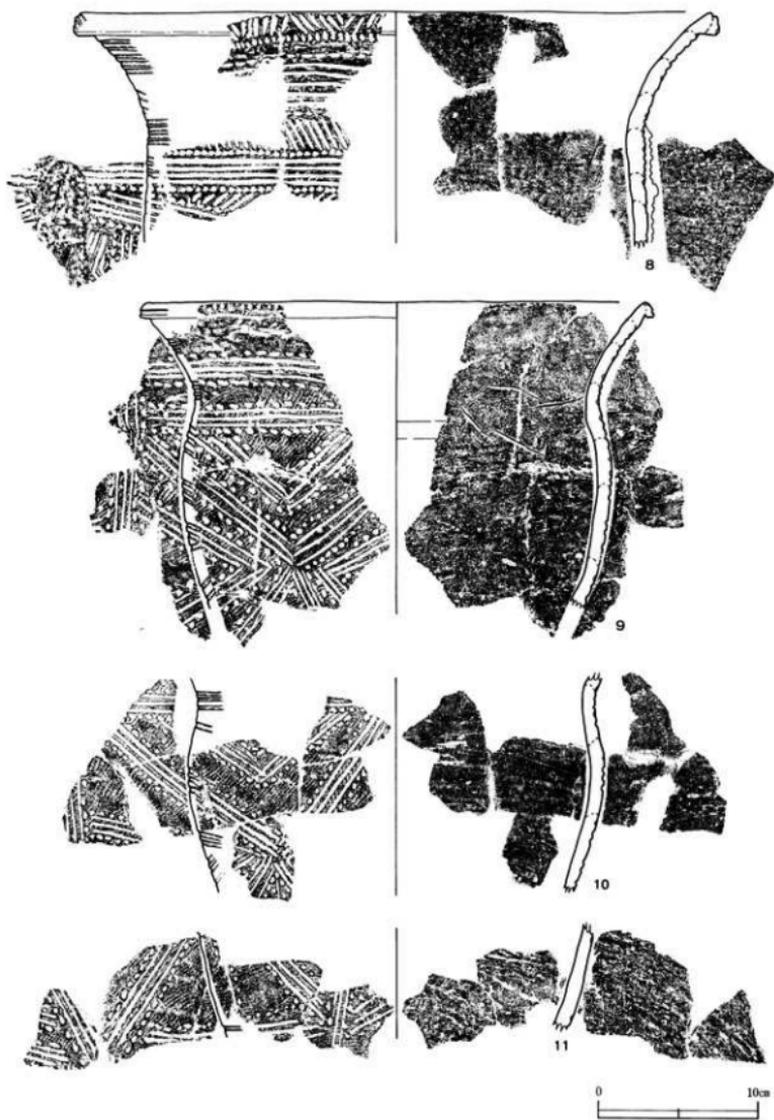
第59図 天濠ヶ尾式土器片断図1(标本一1)



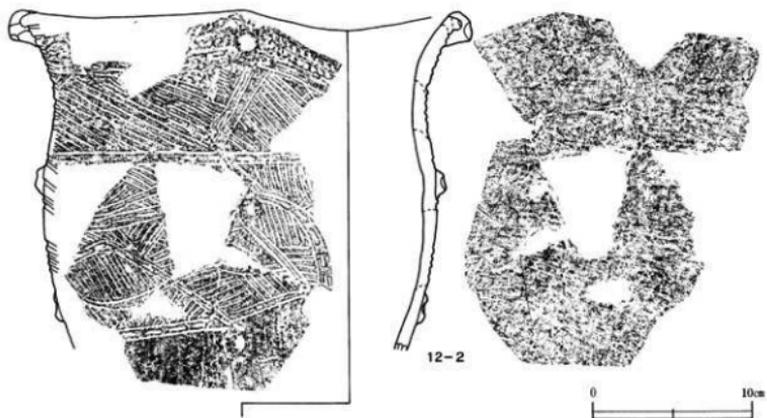
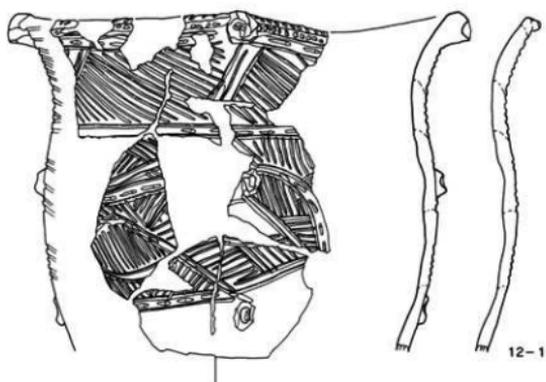
第60図 天道ヶ尾式土器実測図2 (深鉢-2)



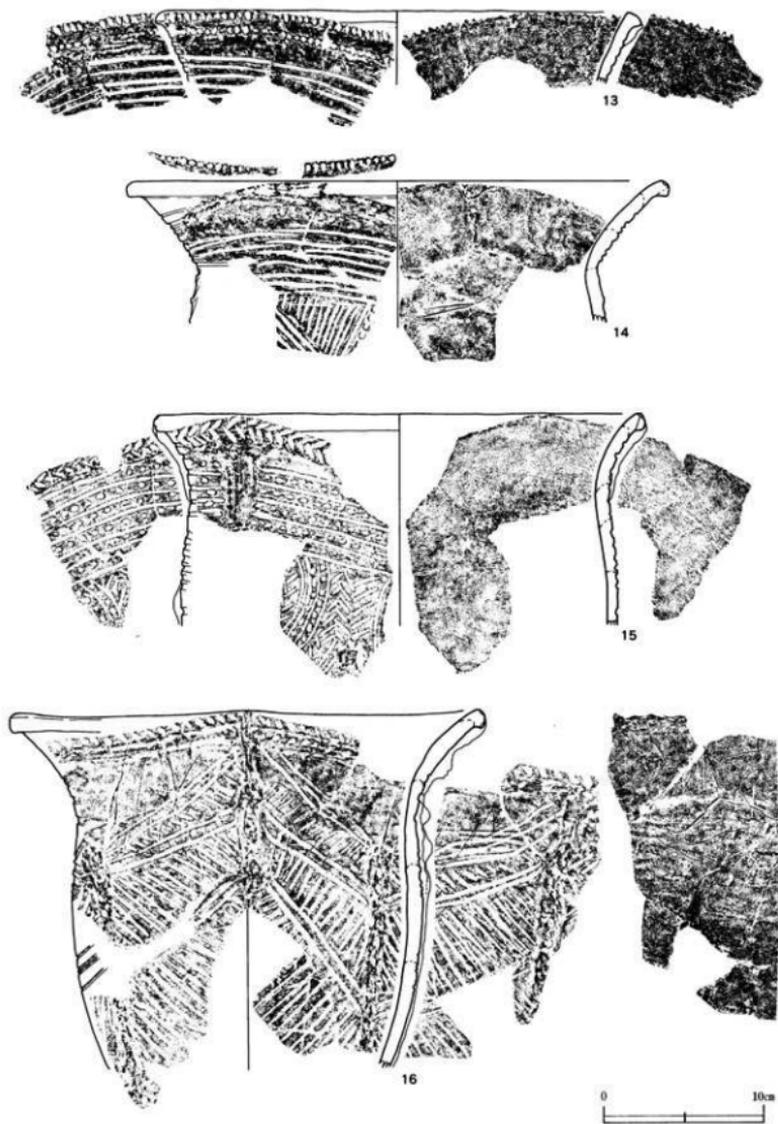
第 61 圖 天道ノ尾式土器実測圖 3 (深鉢一 3)



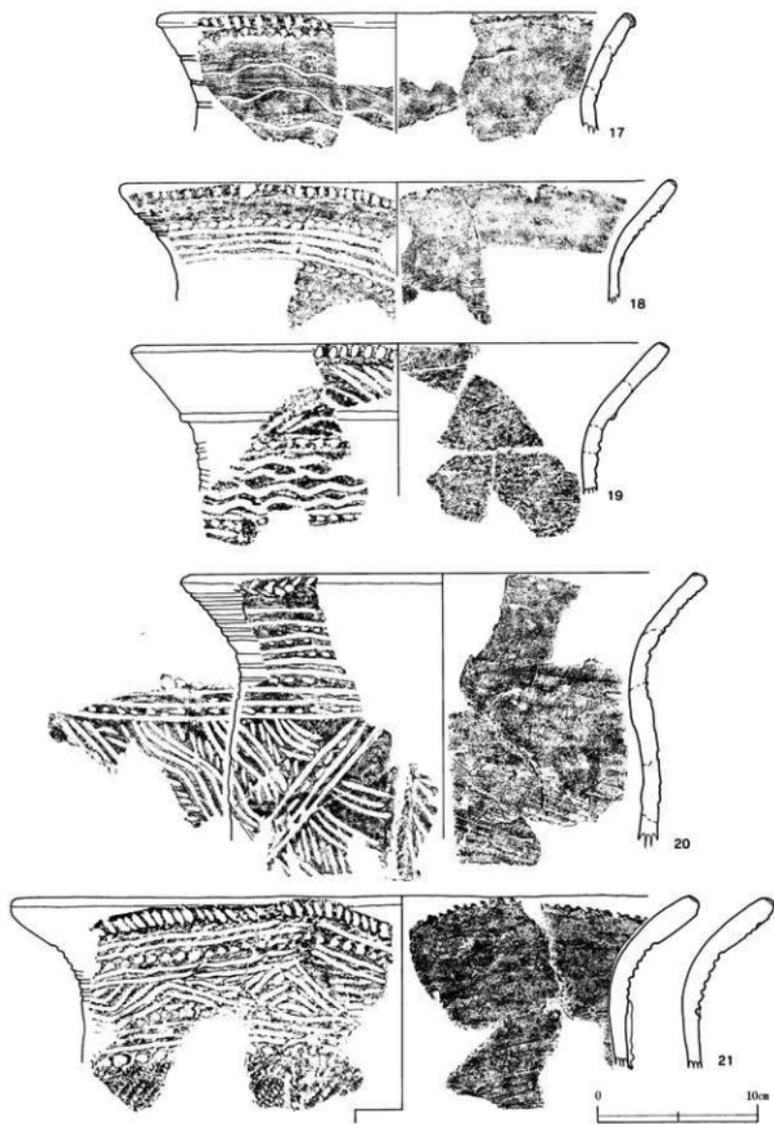
第 62 図 天道ヶ尾式土器実測図 4 (深鉢-4)



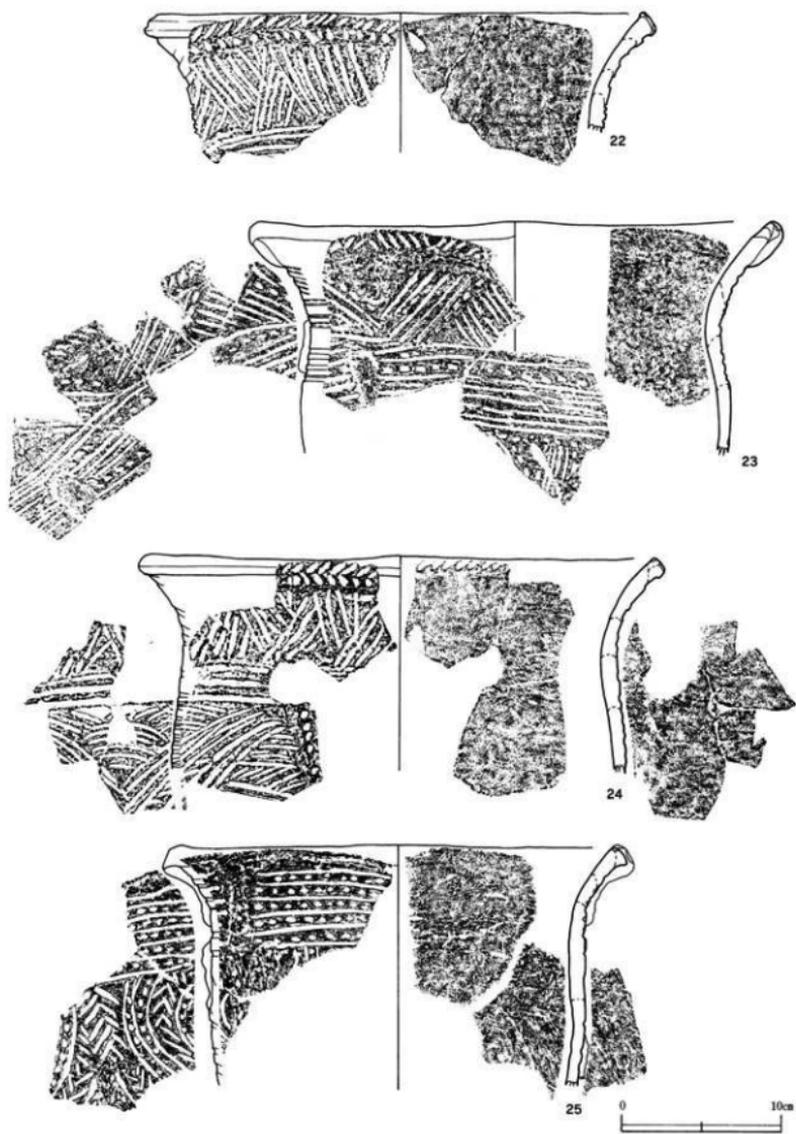
第 63 図 天道ヶ尾式土器実測図 5 (深鉢-5)



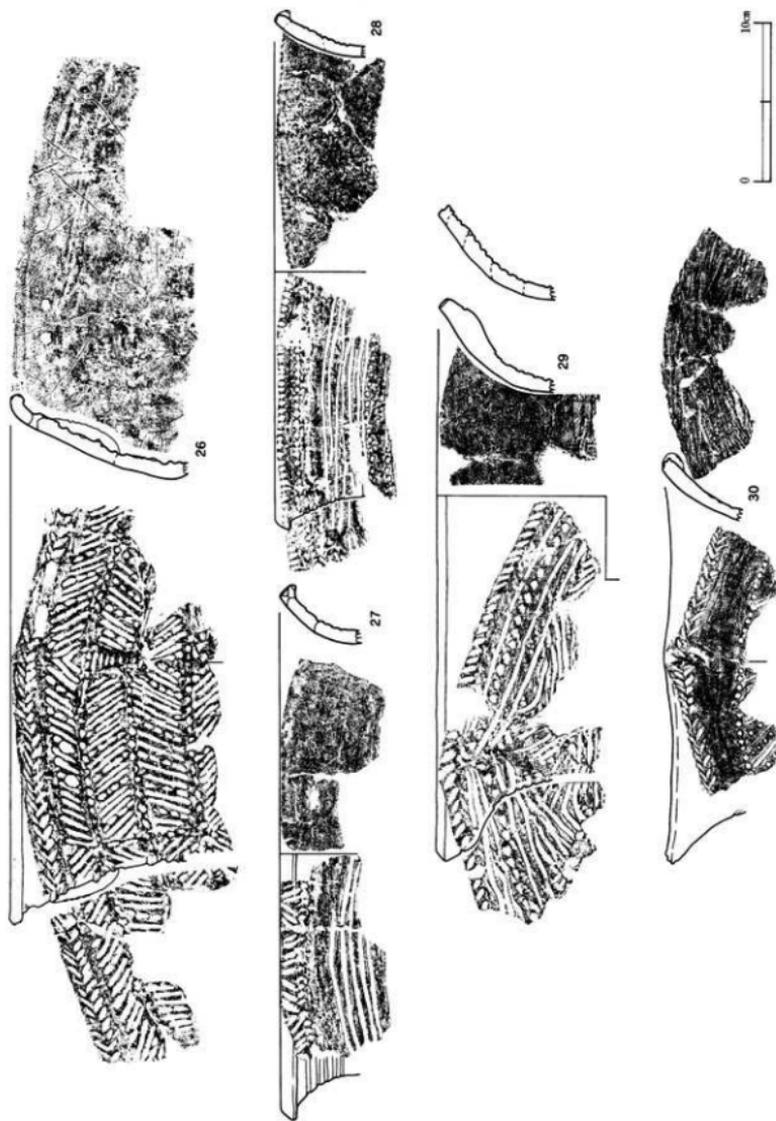
第 64 図 天道ヶ尾式土器実測図 6 (深鉢-6)



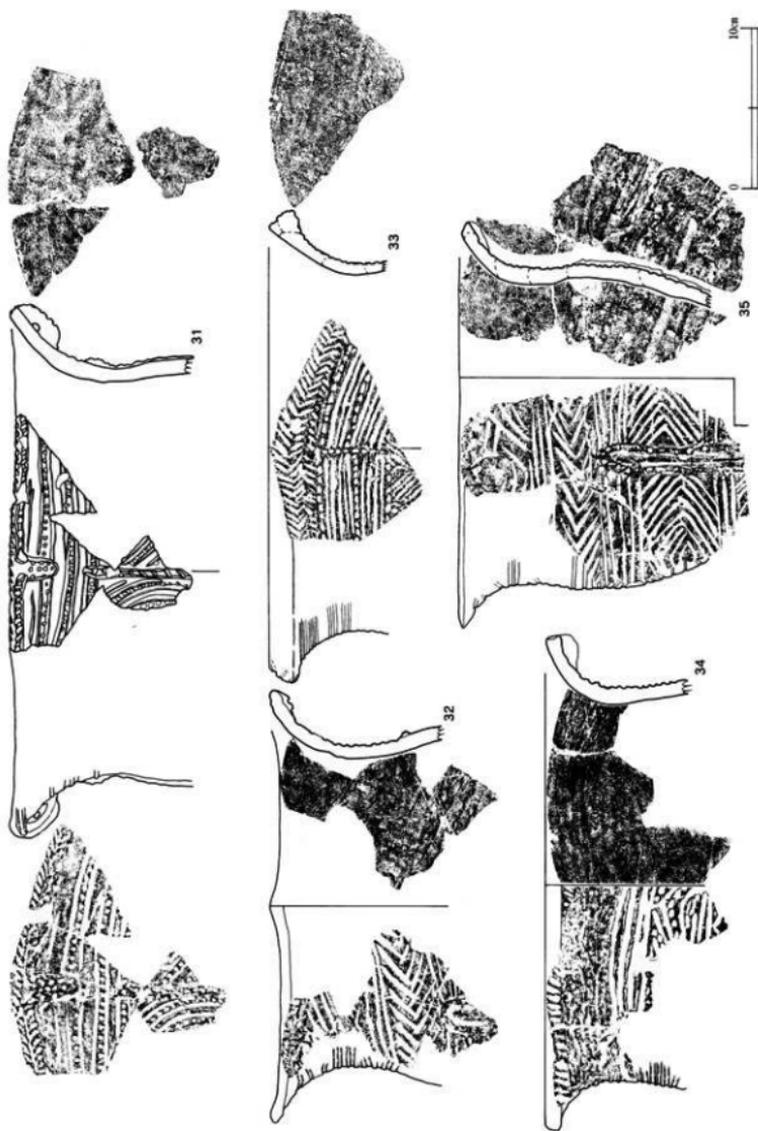
第 65 図 天道ヶ尾式土器実測図 7 (深鉢-7)



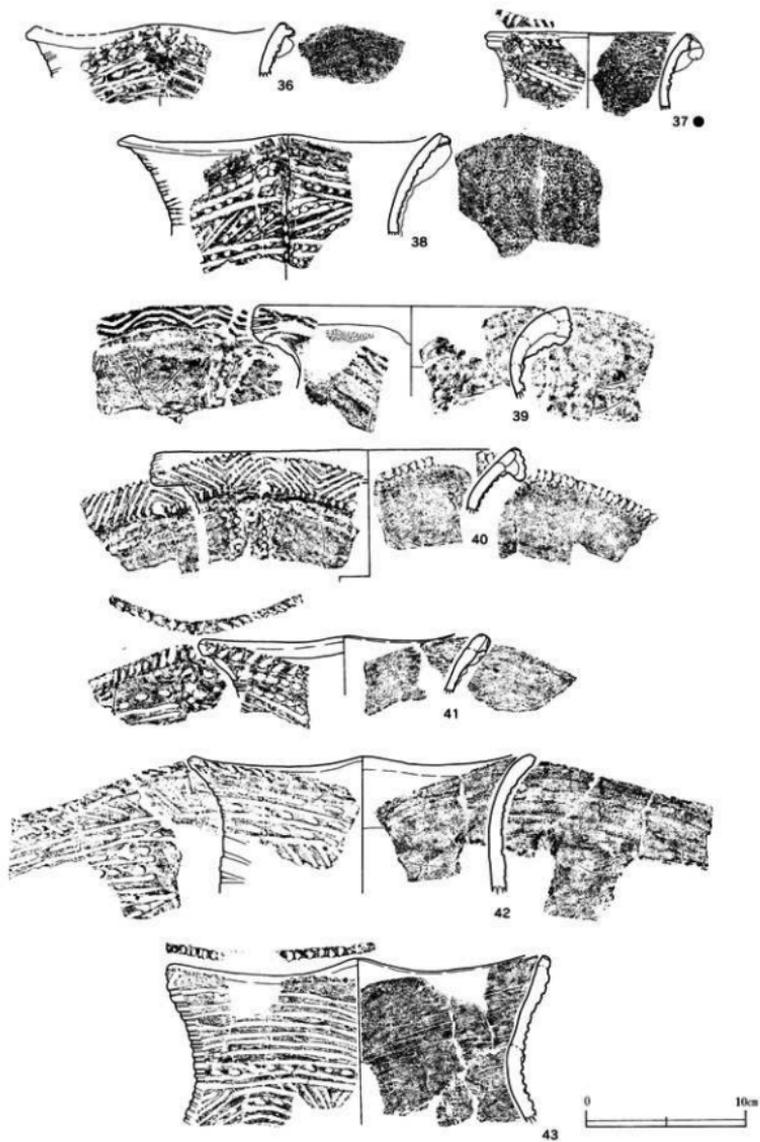
第66図 天道ヶ尾式土器実測図8 (深鉢-8)



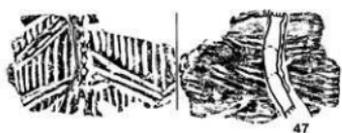
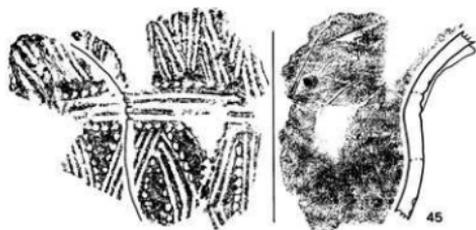
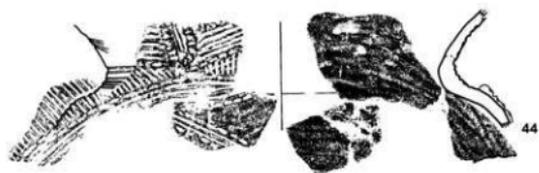
第 67 図 天道ヶ尾式土器実測図 9 (深鉢-9)



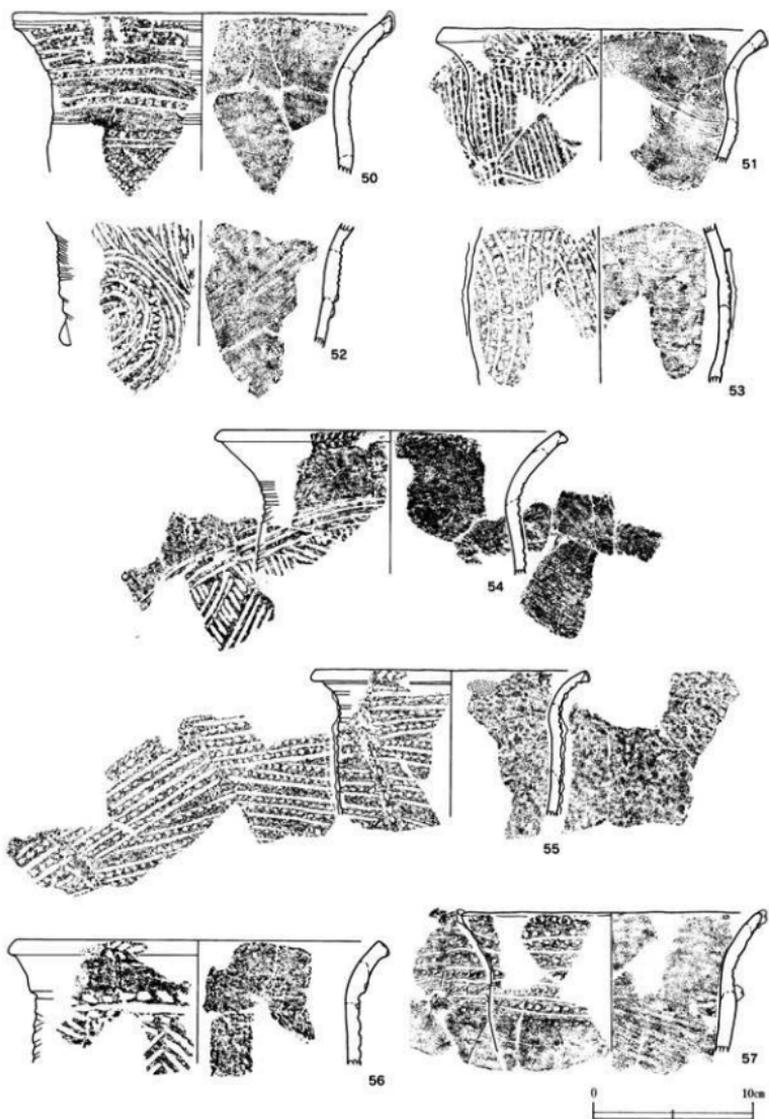
第 68 図 天道ヶ尾式土器実測図10 (深鉢一10)



第 69 図 天道ヶ尾式土器実測図11 (深鉢-11)



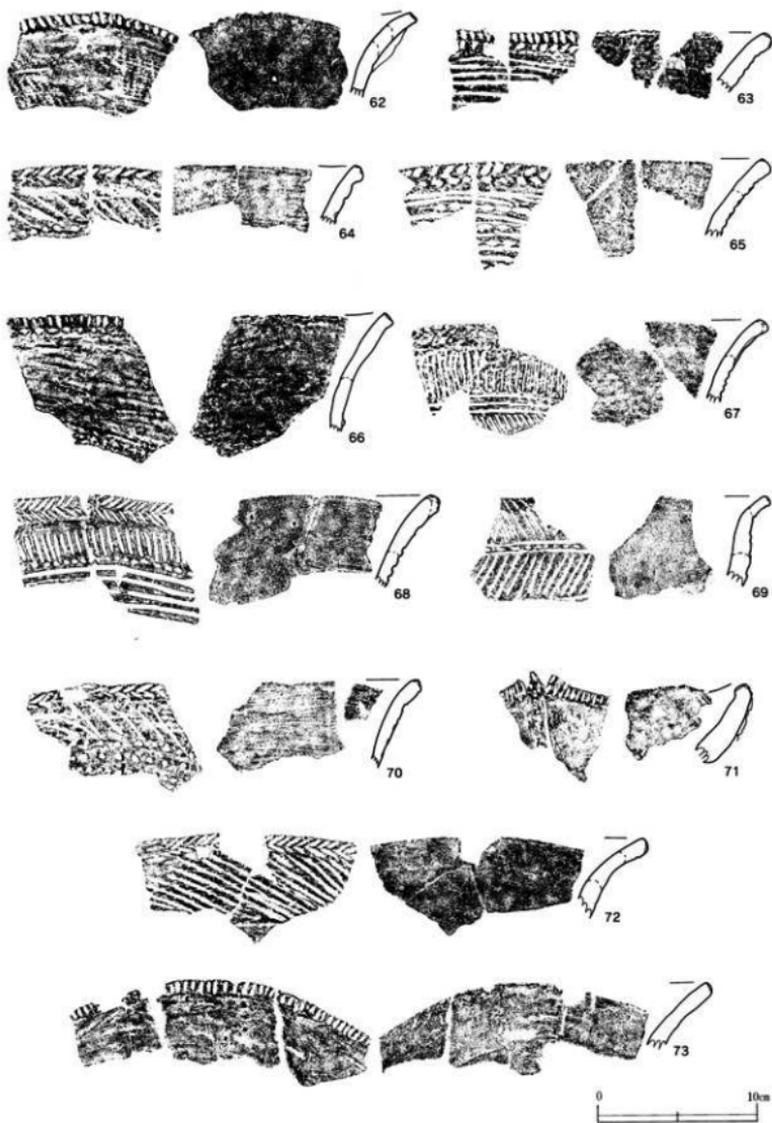
第70図 天道ヶ尾式土器実測図12 (深鉢-12)



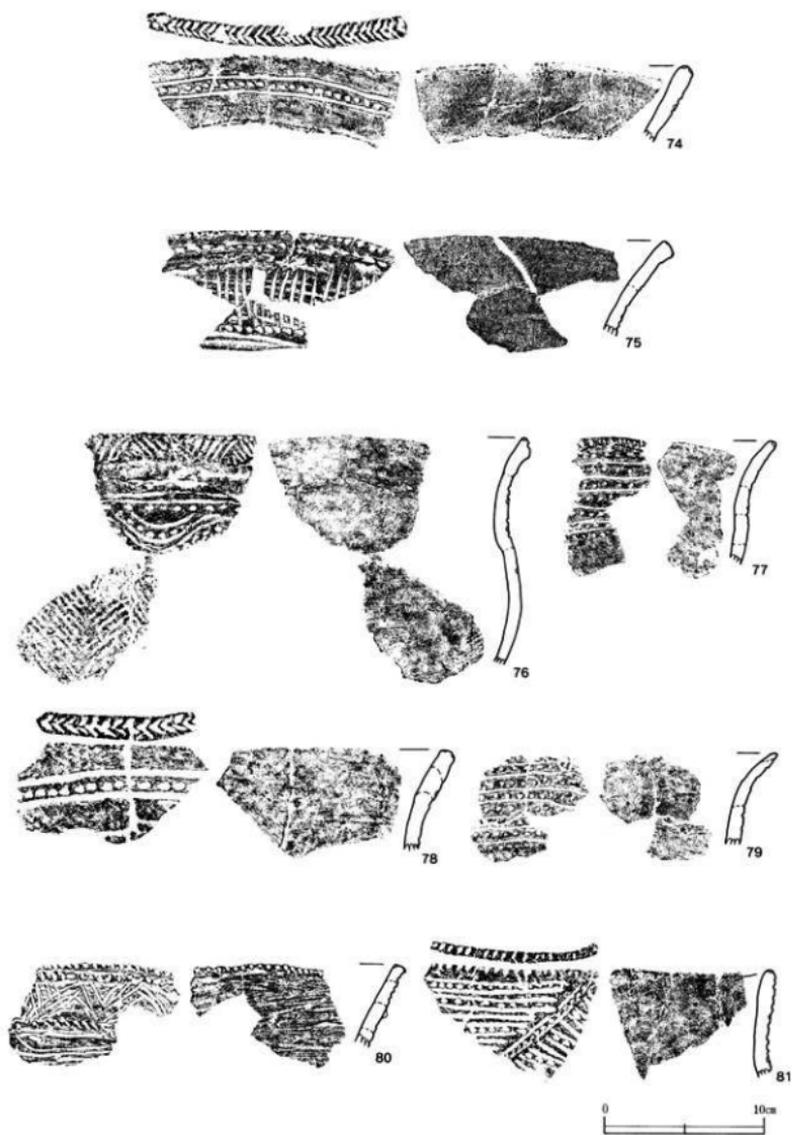
第71図 天道ヶ尾式土器実測図13 (深鉢-13)



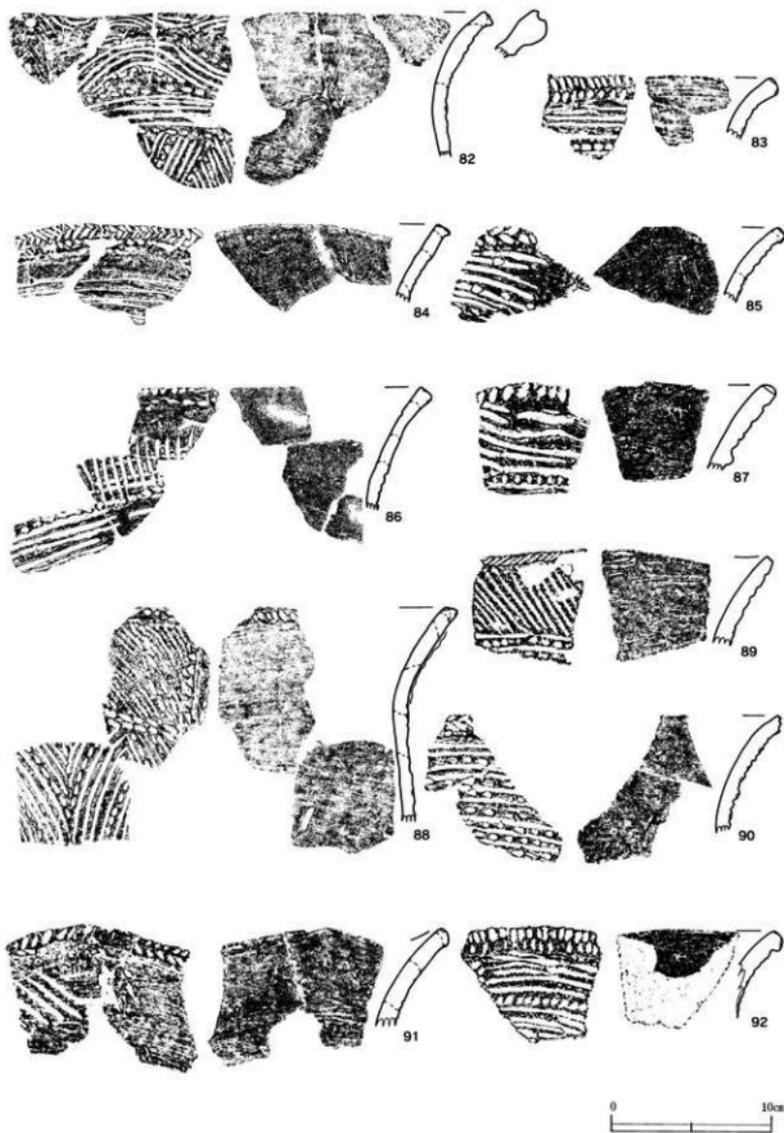
第 72 図 天道ヶ尾式土器実測図14 (深鉢-14)



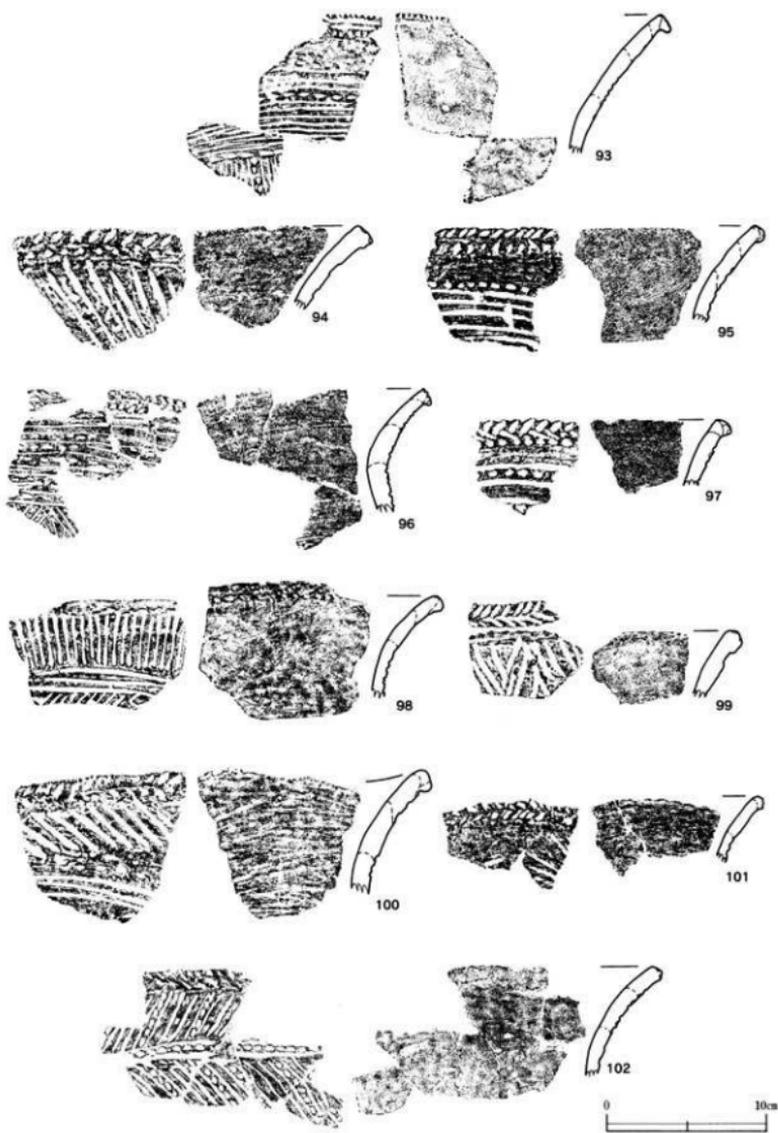
第73圖 天道ヶ尾式土器実測図15 (深鉢-15)



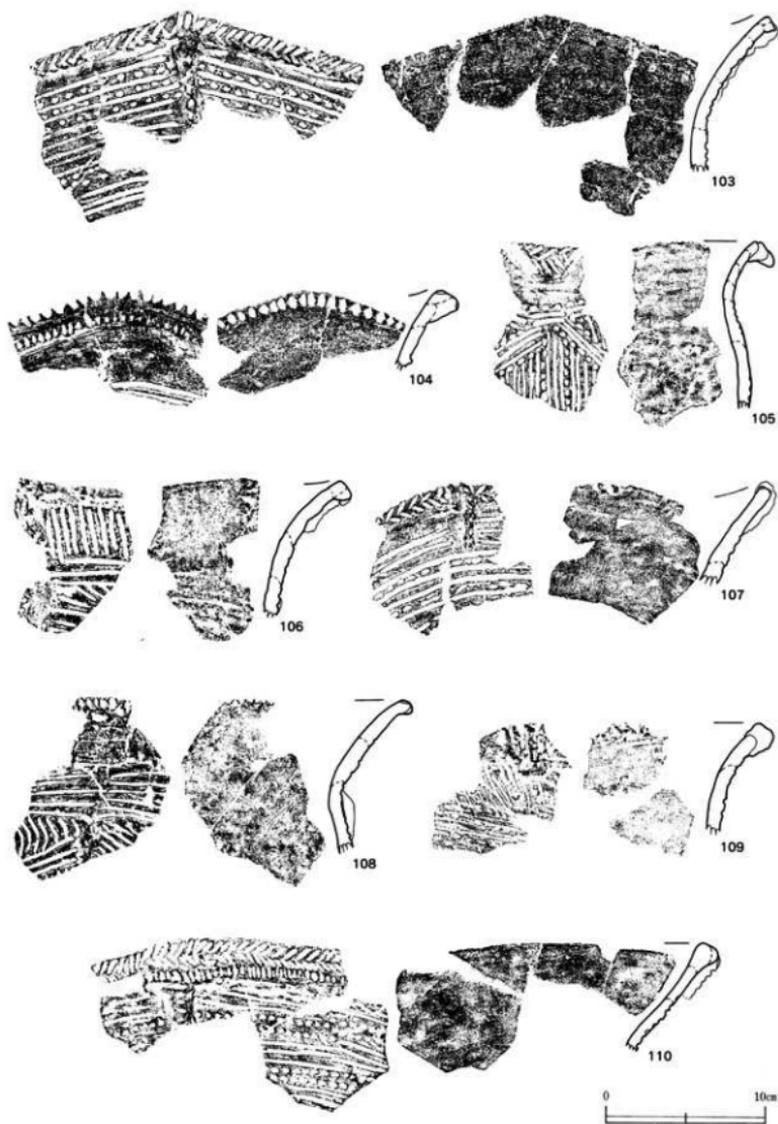
第74図 天道ヶ尾式土器実測図16(深鉢-16)



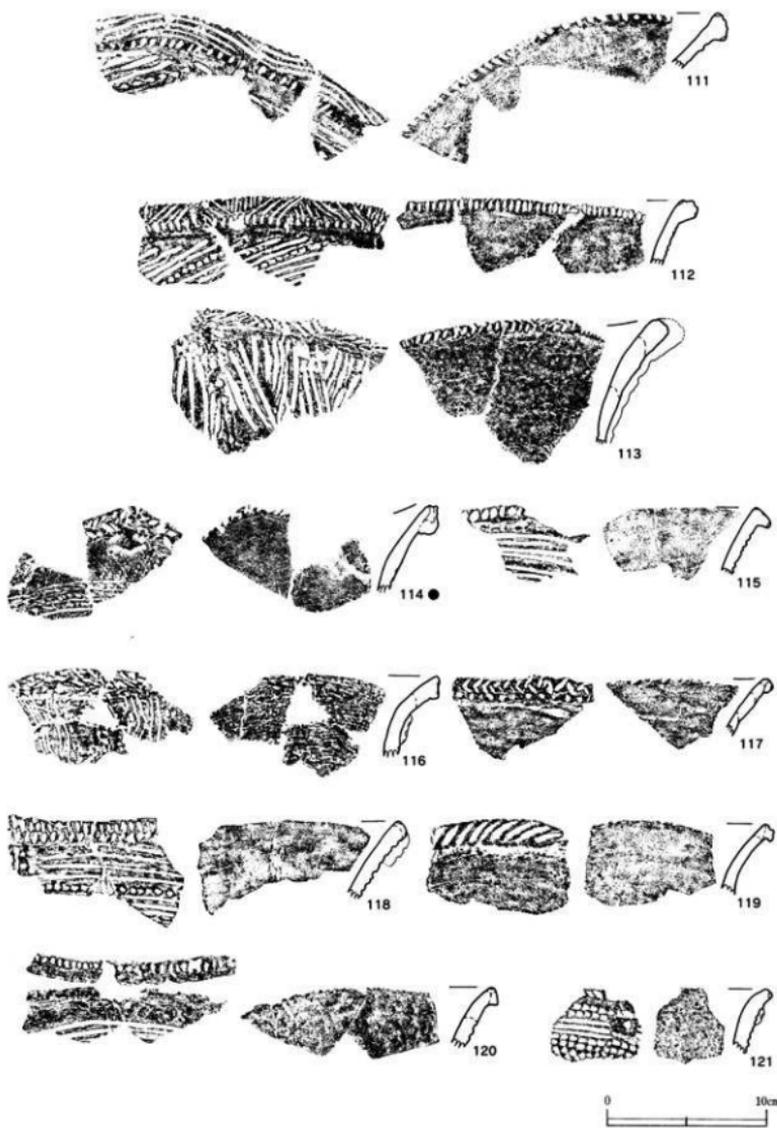
第75圖 天道ヶ尾式土器実測図17 (深鉢-17)



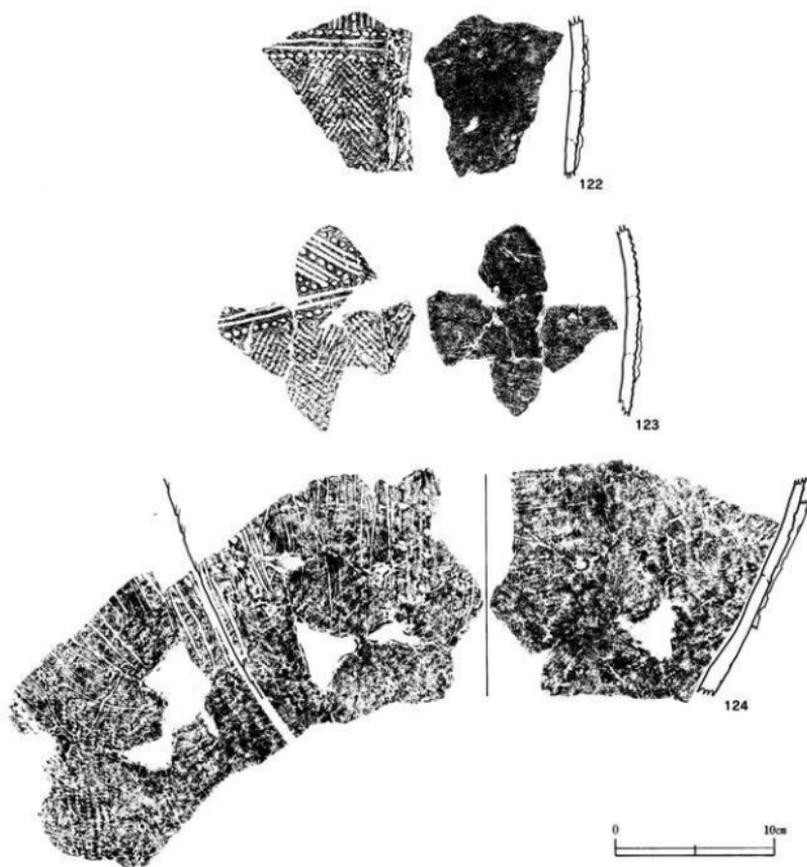
第 76 図 天道ヶ尾式土器実測図18 (深鉢-18)



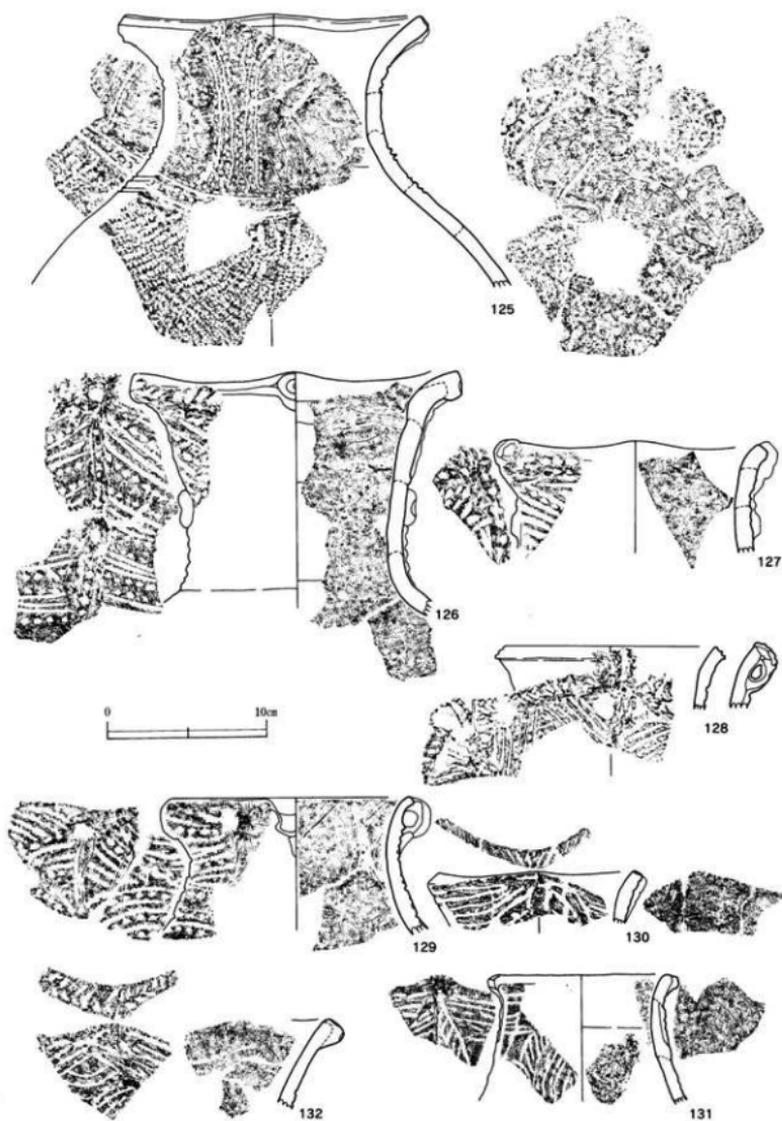
第 77 圖 天道ヶ尾式土器実測図19 (深鉢-19)



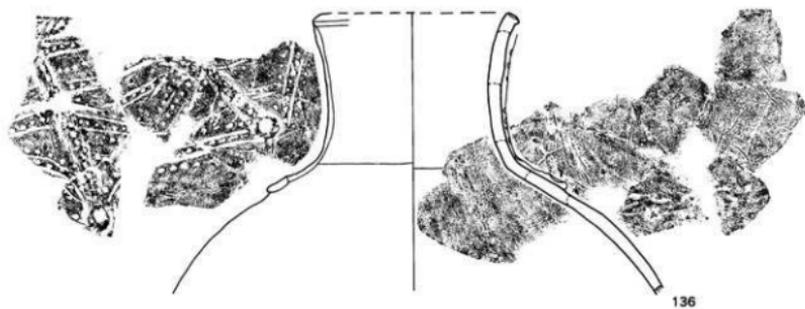
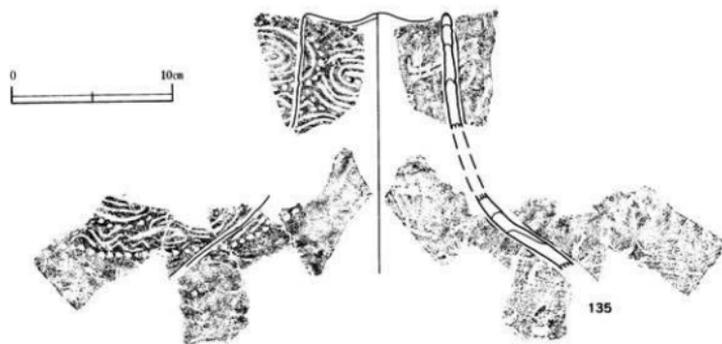
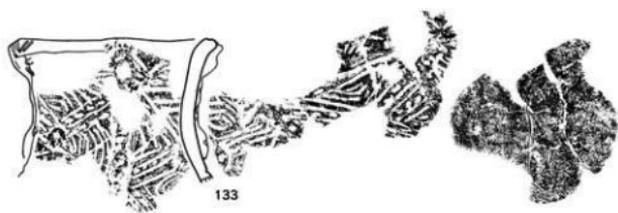
第 78 図 天道ヶ尾式土器実測図20 (深鉢-20)



第 79 図 天道ヶ尾式土器実測図21 (深鉢-21)



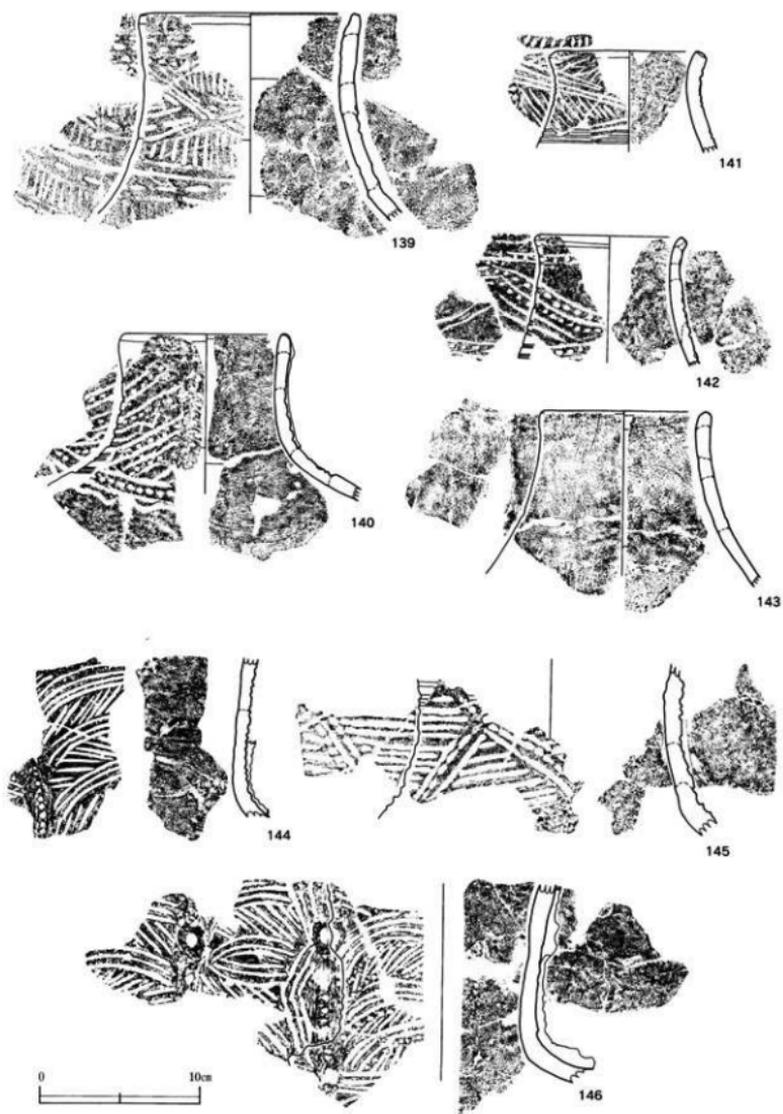
第 80 図 天道ヶ尾式土器実測図22 (壺-1)



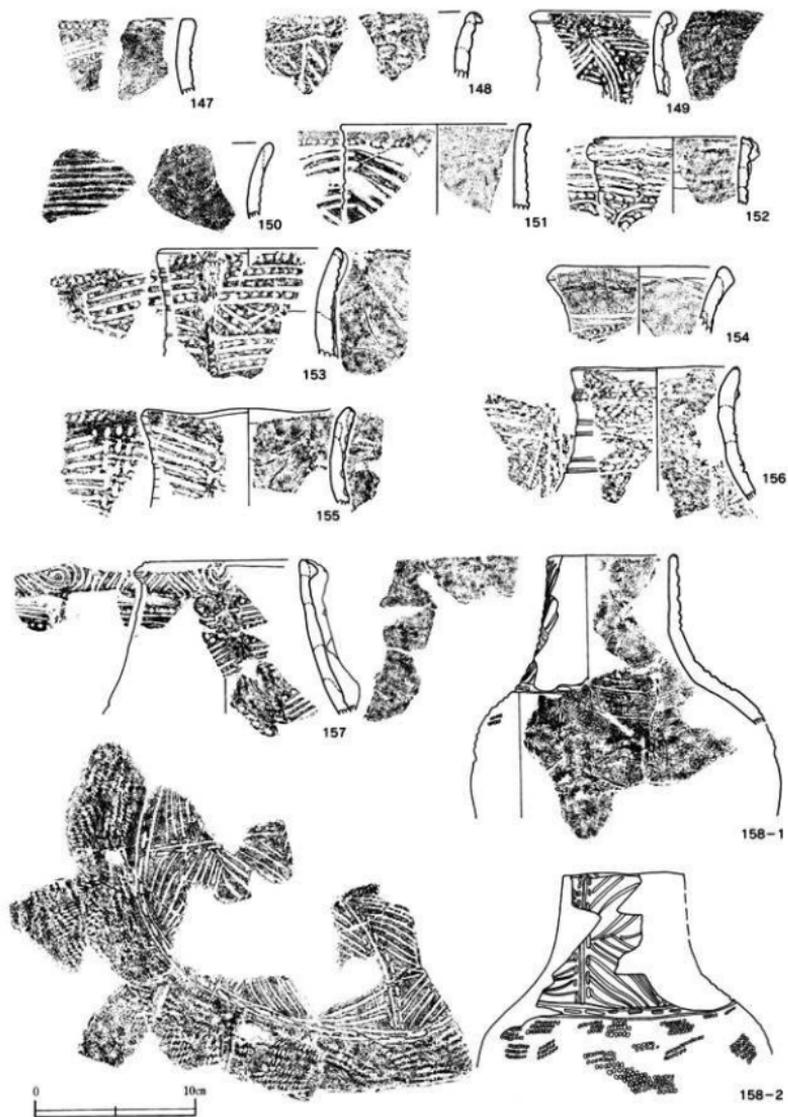
第 81 図 天道ヶ尾式土器実測図23 (壺一2)



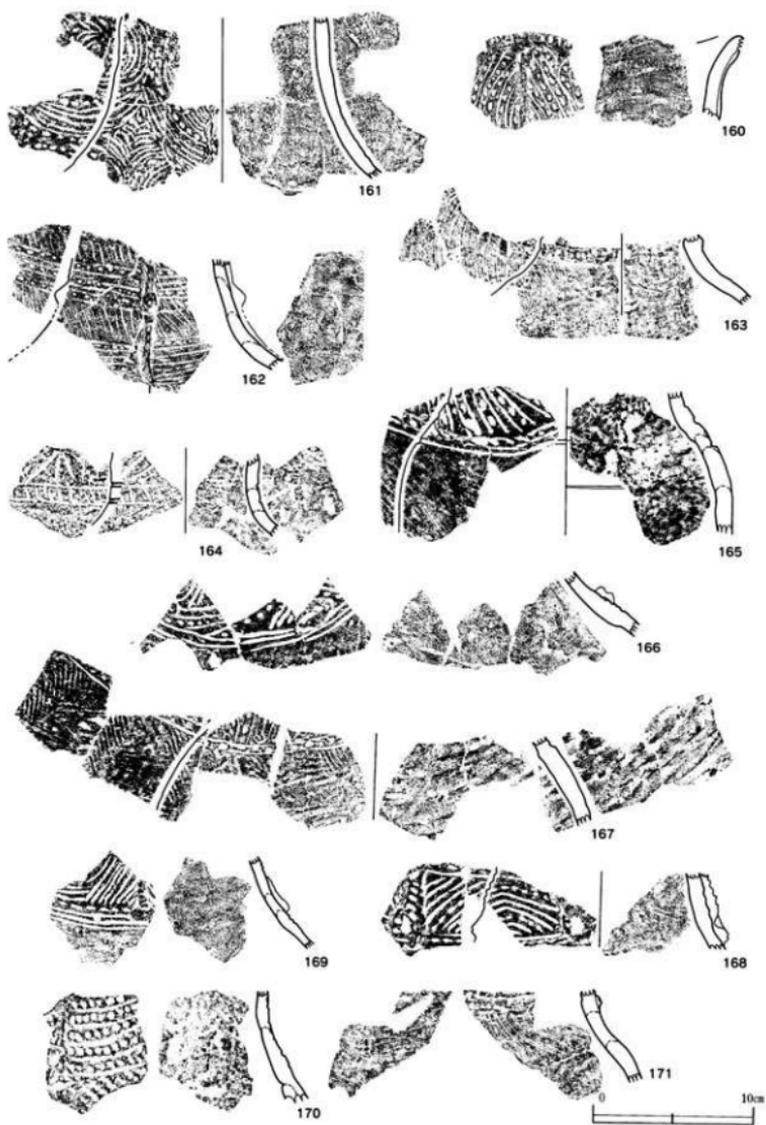
第 82 図 天道ヶ尾式土器塚淵図24 (番一 3)



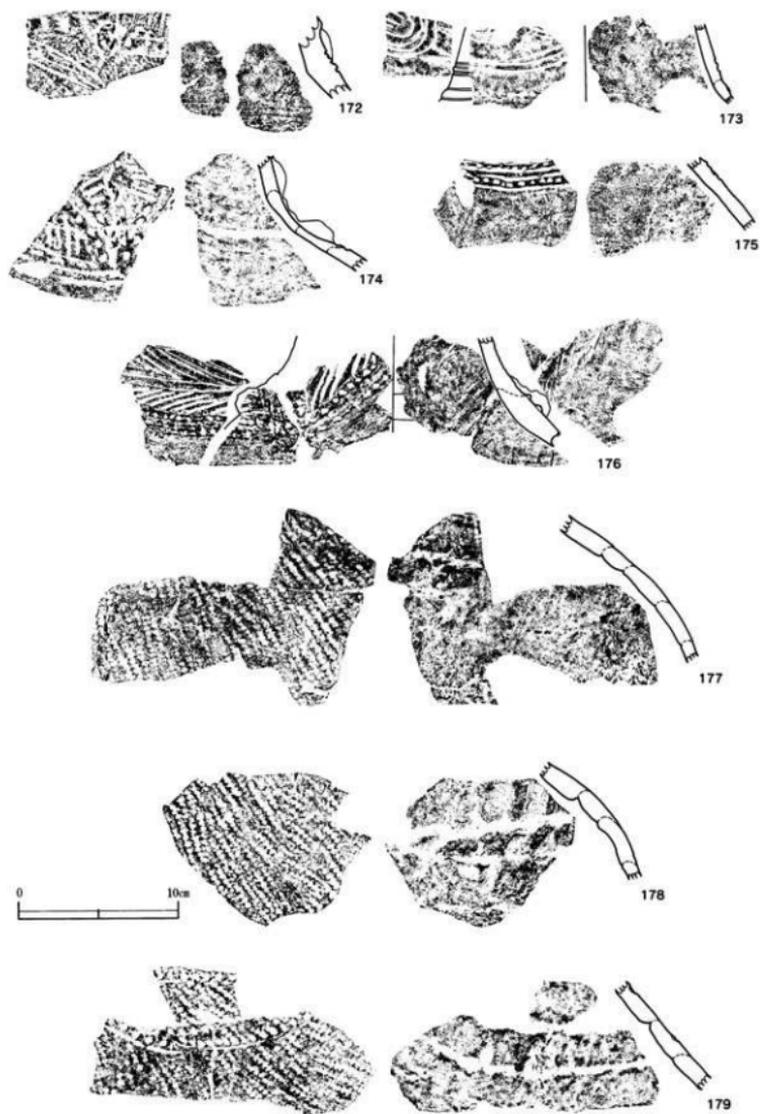
第 83 図 天道ヶ尾式土器実測図25 (壺一4)



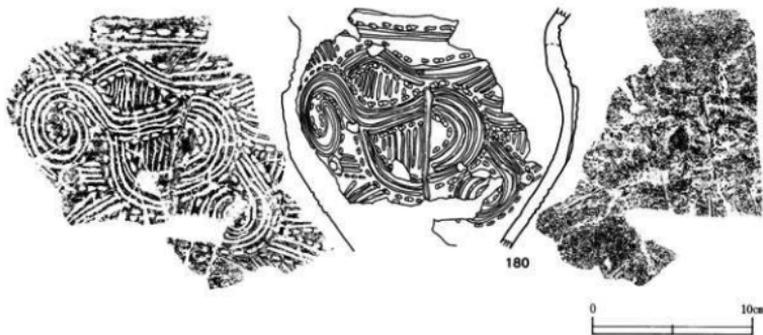
第 84 図 天道ヶ尾式土器実測図26 (壹-5)



第 85 図 天道ヶ尾式土器実測図27 (壺一6)



第 86 図 天道ヶ尾式土器実測図28 (壺一7)



第 87 図 天道ヶ尾式土器実測図29 (壺一 8)

「妙見土器」について (第88図～第90図)

「妙見土器」に分類した土器は、第1群に属する土器か、第2群に属する土器か、分別ができなかった土器について、名付けた土器である。主に胴部や底部がこの類に属する。

1) 深鉢形土器 (第88図～第89図)

胴部や底部では器形的特徴も施文の特徴も、先述したようにほとんど差がない。特に第1群でも第2群でも施文の特徴は、単節斜行縄文を施す土器か、沈線文や刺突連点文などで文様を構成する土器か、であり判別は困難である。

1～8は深鉢形土器の胴部片である。単節斜行縄文が施される土器 (1・2・7～8) か、沈線文や刺突連点文を施文する (3～5) 方法の違いから、この類に属すると判断した土器である。1・6は胴部上半の土器、2～4は胴部中央部の土器、5・7・8は胴部下半の土器である。

9～16は深鉢形土器の底部片である。

器形的特徴には若干下げ底を呈する特徴がある。

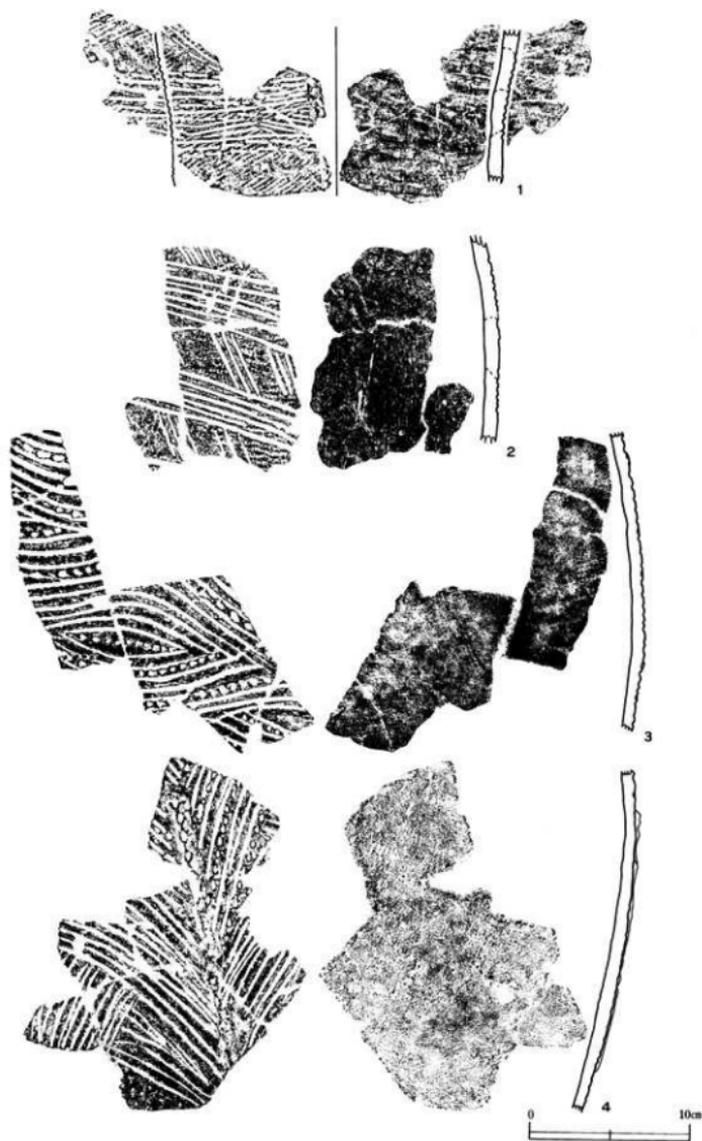
底部を製作するには、端部を斜めに削った円盤状の底面を作成した後に、底面端部から胴部を積み上げる方法を採用している。

施文の特徴としては胴部下端まで単節斜行縄文を施す点を挙げることができる。撚りの種類には、8・10・14のように2段左撚 (LR) の原体で施文する土器や、11や15のように2段右撚 (RL) の原体で施文する土器があった。

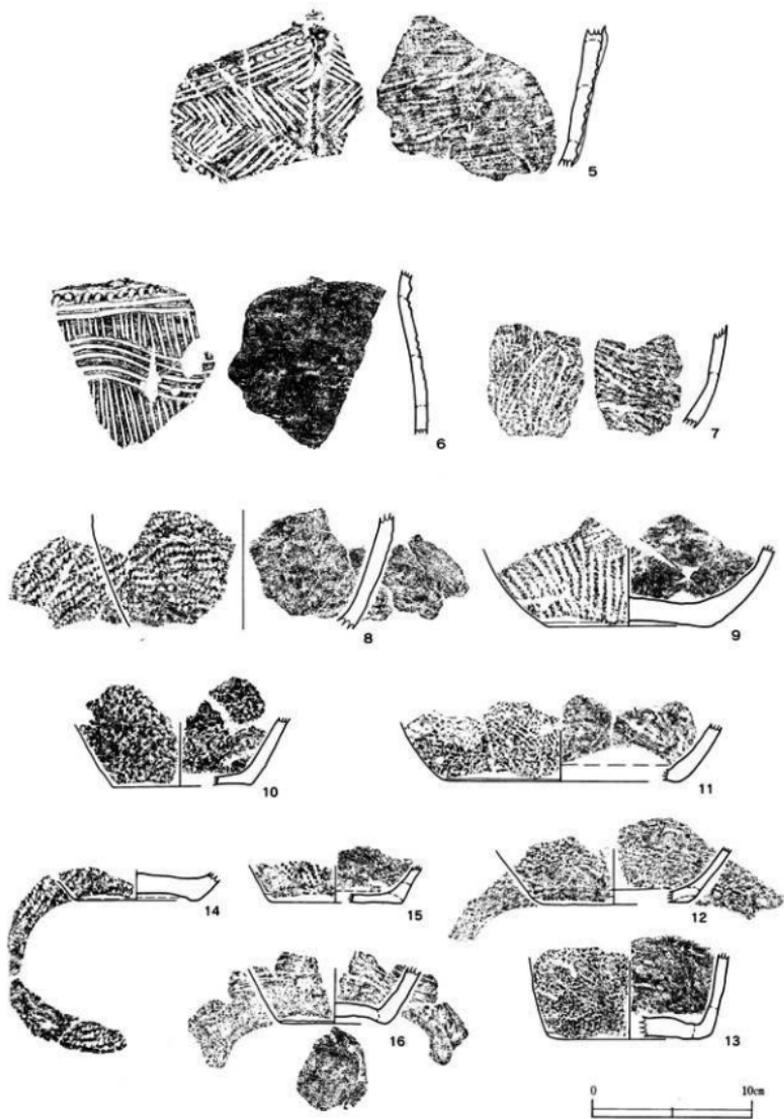
2) 壺形土器 (第90図17～21)

17は口縁部から頸部片である。口縁部と頸部との境と、頸部と胴部との境とに、横位方向に刻目突帯を1条ずつ巡らす土器である。

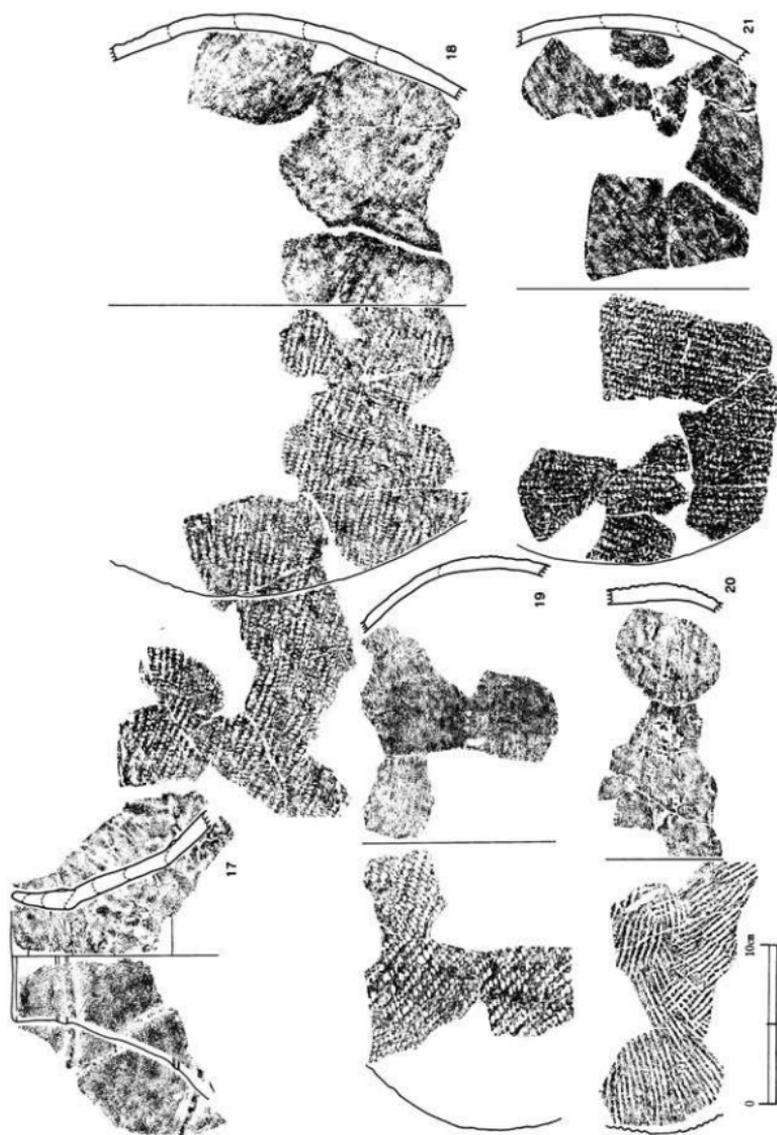
18～21は胴部片である。器形的特徴として中央部で強く張る点を挙げることができる。施文の特徴としては単節斜行縄文を施す点を挙げることができる。撚りの種類には、18・19のように2段左撚 (LR) の原体で施文する土器や、20や21のように2段右撚 (RL) の原体で施文する土器があった。



第 88 図 妙見土器実測図 1 (深鉢-1)



第89圖 妙見土器実測図2 (深鉢-2)



第90图 妙見土器実測図3 (壹一1)

③ 第3群 平枡A類土器(第91図～第158図)

(附図2・3・12・14・15・20・23)

i) 概要

第3群に属する土器は、309個体を資料化した。

出土状況図(第91図～第97図)で注目できるのは、深鉢形土器でも壺形土器でも、R-11・12区とQ-12区南側およびR-13区西側に土器出土希薄域が確認できること、数グリッド離れた地点で出土した土器片が数多く接合したこと、が挙げられる。

また、深鉢形土器はS-10区とQ-10・11区に集中して出土しているのに対して、壺形土器はS-10区とQ-10～13区およびR-13区東側で集中して出土していた。

ところでこの類に属する埋納土器は、埋納土器1-1・1-2・2・3で、合計3基4個体を検出した。これらの埋納土器は、土器埋納遺構群の中では東端と西端に位置する埋納土器である。

第3群に属する土器の特徴は以下の通りである。

i-1) 深鉢形土器(第59図～第79図・附図2・3・12)

まず、本群では土器の大きさに注目した。超大型土器は1～4を、大型土器は5～8・18・19を、中型1類土器は9～13・15～17・20～33を、中型2類土器は34～44・46～49・59～73を、中型3類土器は45・50～58・74～78を、小型土器は81～89を、特殊小型土器は90～107を、指摘できる。

つぎに器形の特徴としては、まず口縁部には浅い波状口縁を呈する土器(1・8・15など)と、平口縁を呈する土器(3・5・17など)とがある。口縁部には小さな三角形の突帯が口唇下に巡る土器(3・17・30など)は第2群と同じ特徴である。しかし、口縁部が三角形に肥厚する土器(12・18・25など)は本群の特徴である。さらにごく一部ではあるが、外反する口縁部に直立する口唇部が付く土器(74・77・159)がある。

なお、口縁形態の違いと口縁部器形の違いの間には相関関係がなく、どちらの口縁部器形にも波状口縁を呈する土器と平口縁を呈する土器とが見られる。

また、土器の大きさの違いと口縁部器形の違いの間にも相関関係がなく、どの大きさの土器にも小さな三角形の突帯が口唇下に巡る土器と口縁部が三角形に肥厚する土器とが見られる。

一方、施文の特徴として以下の特徴を指摘できる。

まず波頂部下と想定した口縁肥厚部下だけでなく、頸部と胴部との境にも瘤状突起を貼付するのが本群の指標である。この属性は、どの大きさの土器についてもあてはまることから、本群の第1指標といえる。

さて、第3群の中には口唇部上端に刻みを施す土器や、口唇部内面に横方向の刺突連点文を1条巡らす土器がある。両方の文様とも施す土器や、どちらか片方の文様を施す土器や、どちらの文様も施さない土器があり、個々それぞれである。ただし、これらの文様を施した場合は、上面観が明状になるように意識した土器が多いことを指摘しておく。さらに、口縁部文様帯には沈線文と刺突連点文とで文様を構成し、山形文や波状文や折帯文や曲線文を施す土器(25・39など)と、棒状工具により羽状文を施す土器(22・40など)とがある。

さらに、胴部文様帯に結節縄文を施すことは第3・4・5群の指標となる。第3群に属する土器は全て原体を縦方向に回転させて施文している。そして、燃りの種類には、2段左燃(LR)の原体で施文する土器(15・26・33など)と、2段右燃(RL)の原体で施文する土器(59・78・172)と、2段左燃(LR)の原体と2段右燃(RL)の原体とを交互に施文して、羽状縄文の文様効果を狙った土器(22・30・45・58など)とがある。

また、口縁部文様帯・頸部文様帯から胴部文様帯にかけて単節斜行縄文を施さずに、沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器(3・6など)は、第2群と同じ特徴の1つであるが、施文具の棒状工具は先端部を丸くして、しっかり施文する点が第2群とは異なる特徴となる。

ところで第2群では、口縁部文様帯から頸部文様帯にかけて沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器は、施文具の先端部を尖らせて沈線文の打ち込みや止めを流して施文する土器であった。そしてこれらの土器の胴部文様帯に施文する縄文は、単節斜行縄文であった。

一方、第3群では口縁部文様帯から頸部文様帯にかけて沈線文と刺突連点文とで文様を構成する土器は、施文具の棒状工具は先端部を丸くして、しっかり施文する土器であった。そしてこれらの土器の胴部文様帯に施文する縄文は、結節縄文であった。

したがって、第2群と第3群の間には、施文具の違いや施文方法の違いと、胴部文様帯に施される原体の種類の違いとに、相関関係があったために群を分けた。

い-2) 壺形土器(第80図125~第87図180)

(附図14・15・20・23)

壺形土器の器形の特徴として、口縁部が外反する器形(175・176)と、頸部から口縁部が直行する「長頸壺」の器形(177~275)を呈する土器とがある。

まず外反器形の土器について、明瞭にこの類に属するといえるのは、175・176の土器だけであった。このうち器形の特徴は第2群と共通する特徴である、即ち、口縁形態は概ね平口縁と判断できる形態を呈する。頸部から口縁部にかけて強く外反する。頸部は短く、頸部と肩部との境は緩やかに移行する、特徴を挙げることができる。

さて施文の特徴としては、まず本群の第1指標である波頂部下と想定した口縁肥厚部下だけでなく、頸部と胴部との境にも瘤状突起を貼付するという特徴が、壺形土器にも指摘できる。

次に、頸部文様帯(頸部から肩部)には縦方向・横方向や斜位方向に沈線文と刺突連点文とで文様を構成する。肩部と胴部との境には、沈線文と刺突連点文を横位方向に巡らす文様で構成する。

ところで胴部文様帯(胴部から胴部にかけて)は全面にわたり無文である(壺重文No.2・7・13)。

一方、長頸壺の器形の特徴として、口縁形態が緩やかな波状口縁を呈する土器(181・194・208など)と、平口縁を呈する土器(177・198・205など)とがある。また口縁部形態が、直行する土器(177~213)と、外反する土器(214~244)とがある。

さらに頸部から肩部にかけては、強く屈曲して移行する土器(245~254)と、なだらかに移行する土器(255~272)とがある。なお、頸部から肩部にかけての屈曲度合いと口縁部形態との相関関係は不明である。

さて施文の特徴としては、波頂部(想定部)下の口縁部や、頸部と肩部との境に、橋状把手や瘤状突起を貼付し、さらに口縁部文様帯から頸部文様帯には沈線文と刺突連点文とで横位方向・縦位方向や斜位方向に文様を構成する土器が多いのは、第2群と同じ特徴である。

ただし深鉢形土器と同様に、施文具の棒状工具は先端部を丸くして、しっかり施文する点が第2群とは異なる特徴である。

ところで壺重文No.13では、頸部文様帯(頸部から胴部にかけて)に2段左摺(LR)の原体と2段右摺(RL)の原体とを交互に施文して、羽状縄文の効果を狙った土器である。一方、胴部文様帯(胴部から胴部にかけて)は

全面にわたり無文である。また、壺重文No.1・9・14においても、胴部文様帯は全面にわたり無文である。この点も、単節斜行縄文を施す第2群と異なる特徴である。

④ 第4群 平特B類土器(第159図~第162図)

い) 概要

第4群に属する土器は、10個体を資料化した。

平特B類に属する土器の出土量が少ないため、出土状況(第91図~第97図)では確定的な特徴は指摘できない。しかし傾向的な特徴としては、主にQ・R・9・10・11区に集中し、その他にR-14区やS-10区でも出土している傾向が挙げられる。

第4群に属する土器は、深鉢形土器は分類できたものの、壺形土器は確認ができなかった。

い-1) 深鉢形土器(第159図~第161図)

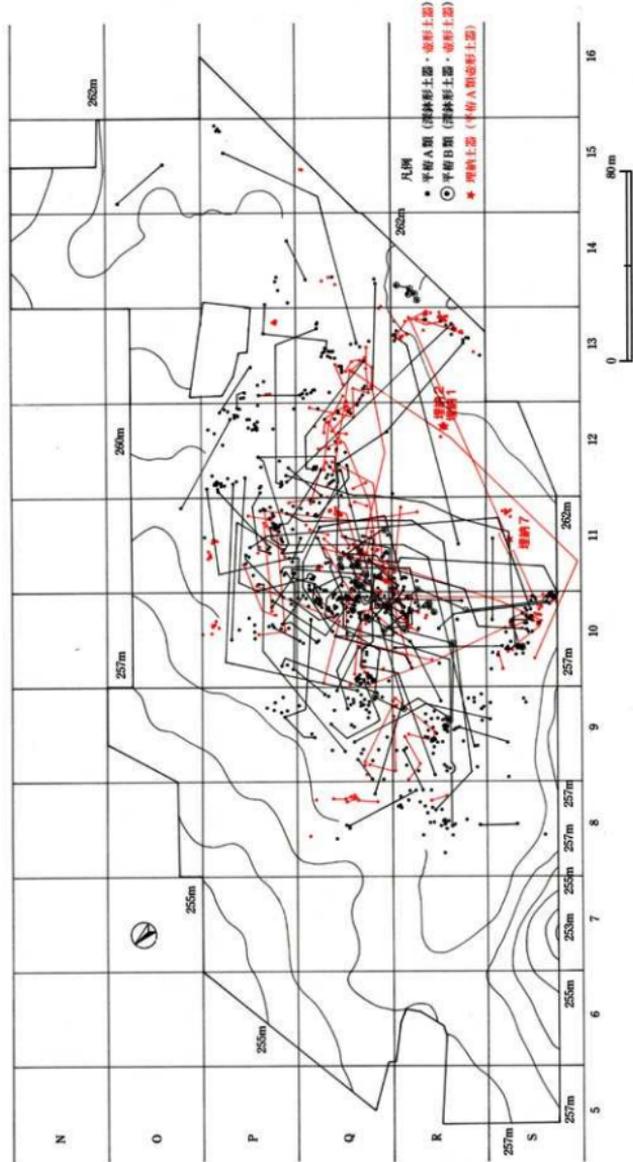
まず、土器の大きさに注目すると、超大型土器は1・2を、大型土器は3・4を、小型土器は9、10を指摘できる。

器形の特徴としては、まず口縁形態には浅い波状口縁を呈する土器(1・2)と、平口縁を呈する土器(3・4)とがある。口縁部には小さな三角形の突帯が口唇下に巡る土器(1・3・6)と、口縁部が三角形に肥厚する土器(2・4)とがあるのは第3群と同様の特徴である。また、第2群に比べて最大径の部分が胴部上半にあるので、頸部から胴部にかけて強く屈曲する器形を呈する土器が多いのが特徴である。

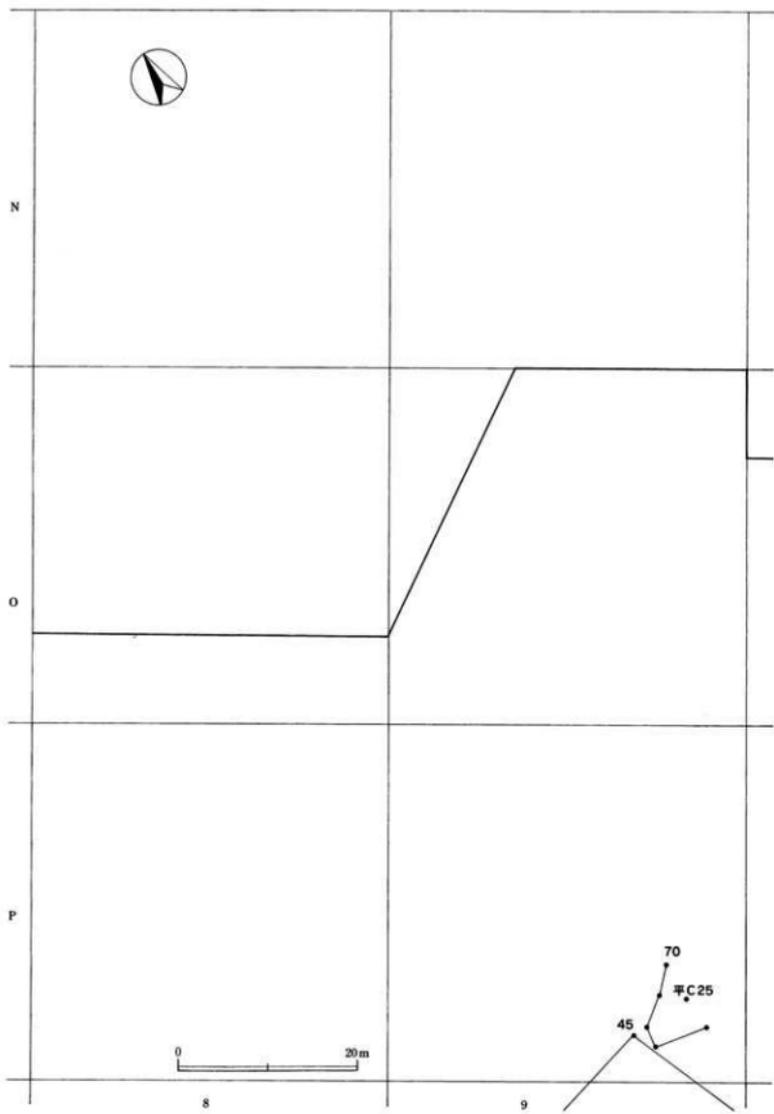
施文の特徴として、まず口縁部文様帯では、口唇下に小さな三角形の突帯を巡らす土器も、口縁部が三角形に肥厚する土器も、刻みを横位方向に羽状で施文する。ところで5・6のように突帯上に単節斜行縄文を横位方向に施す土器がある。

また頸部文様帯から胴部文様帯では、波頂部(想定部)直下に縦位方向に貼付突帯を施したうえに、横位方向に刻目突帯を数条巡らす、第2群と同様の特徴を呈する。

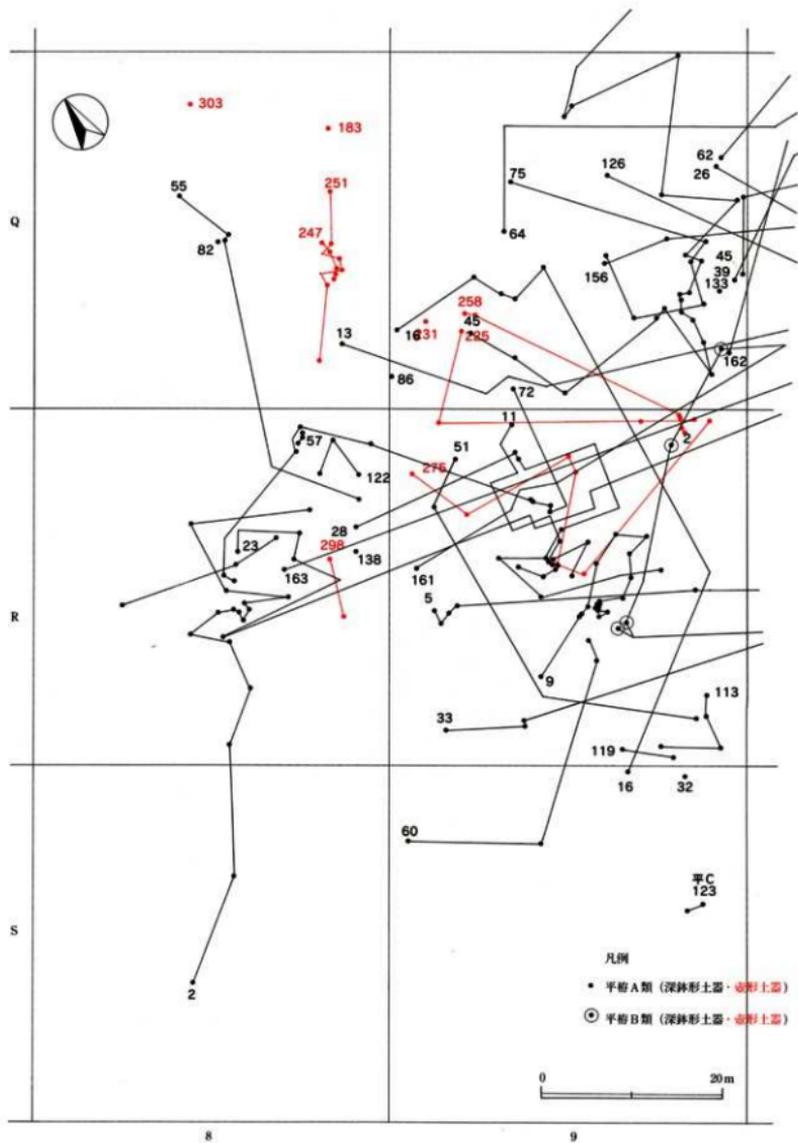
さて、胴部文様帯には結節縄文を縦位方向に回転させて施文している。そして摺りの種類には、2段左摺(LR)の原体で施文する土器(1・3)と、2段左摺(LR)の原体と2段右摺(RL)の原体とを交互に施文して羽状縄文の効果を狙った土器(2・4)とがある。



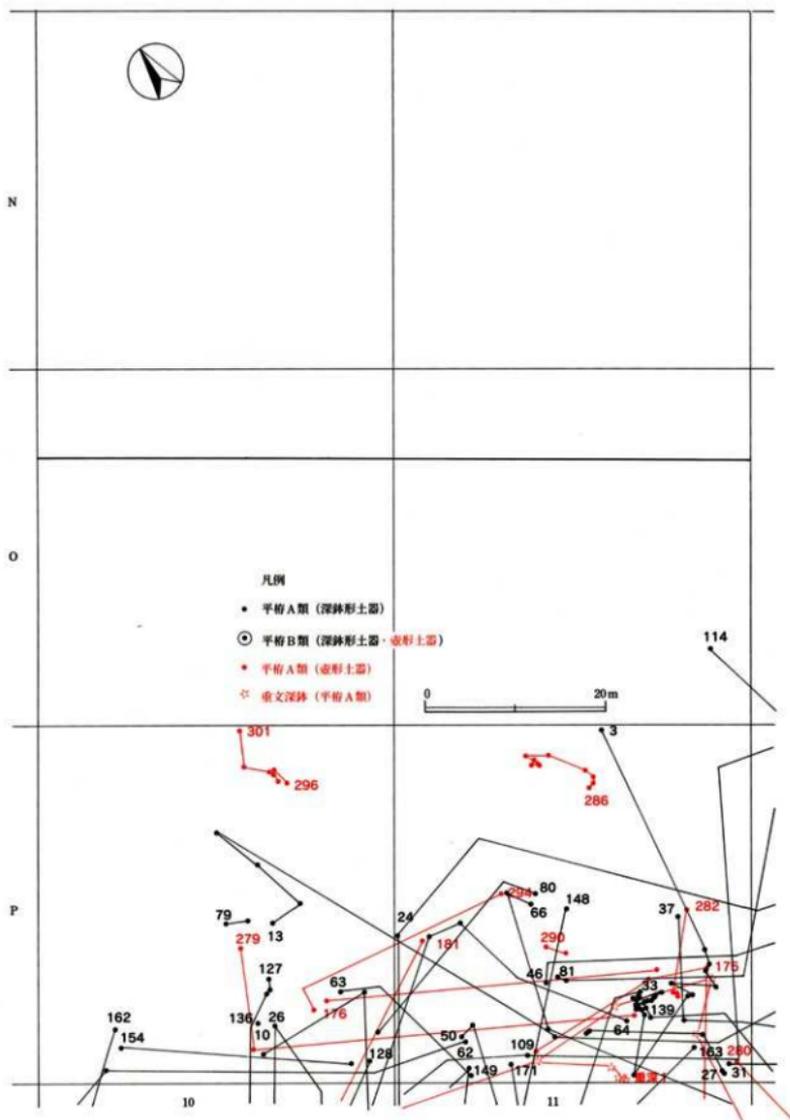
第91図 平射丸・B類土器出土状況全体図



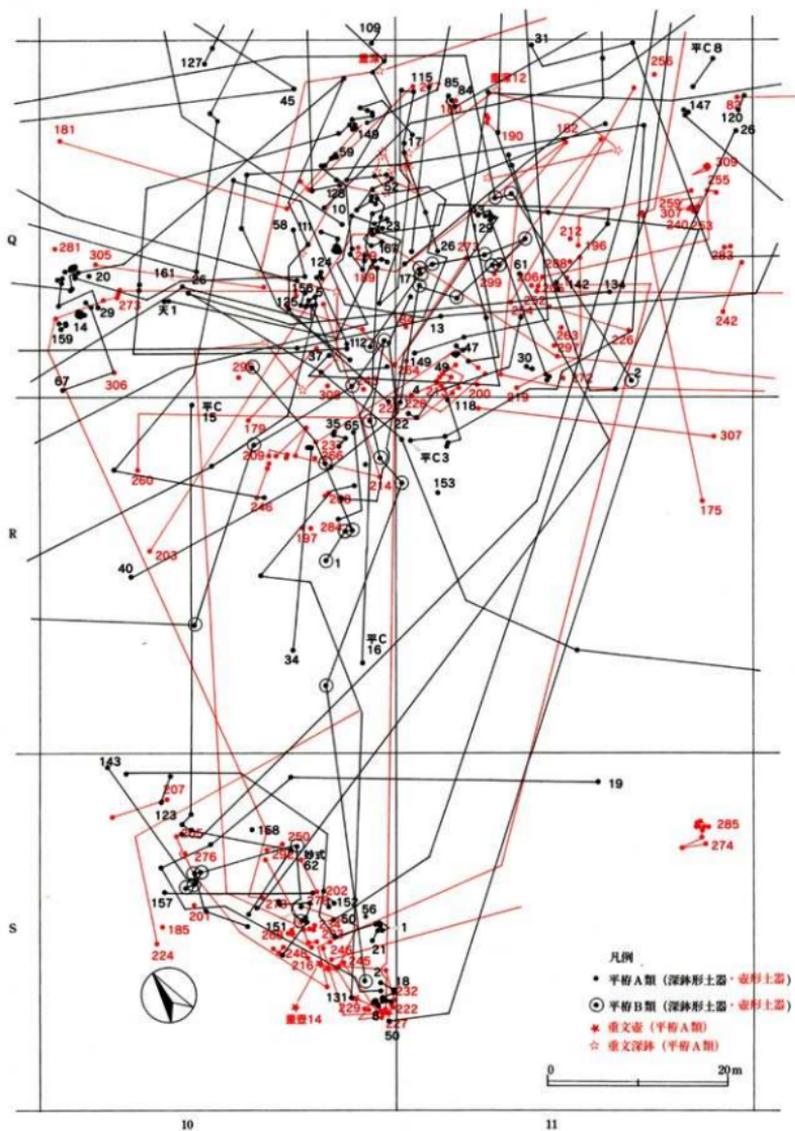
第 92 图 平枋 A・B 類土器出土状況图 (1)



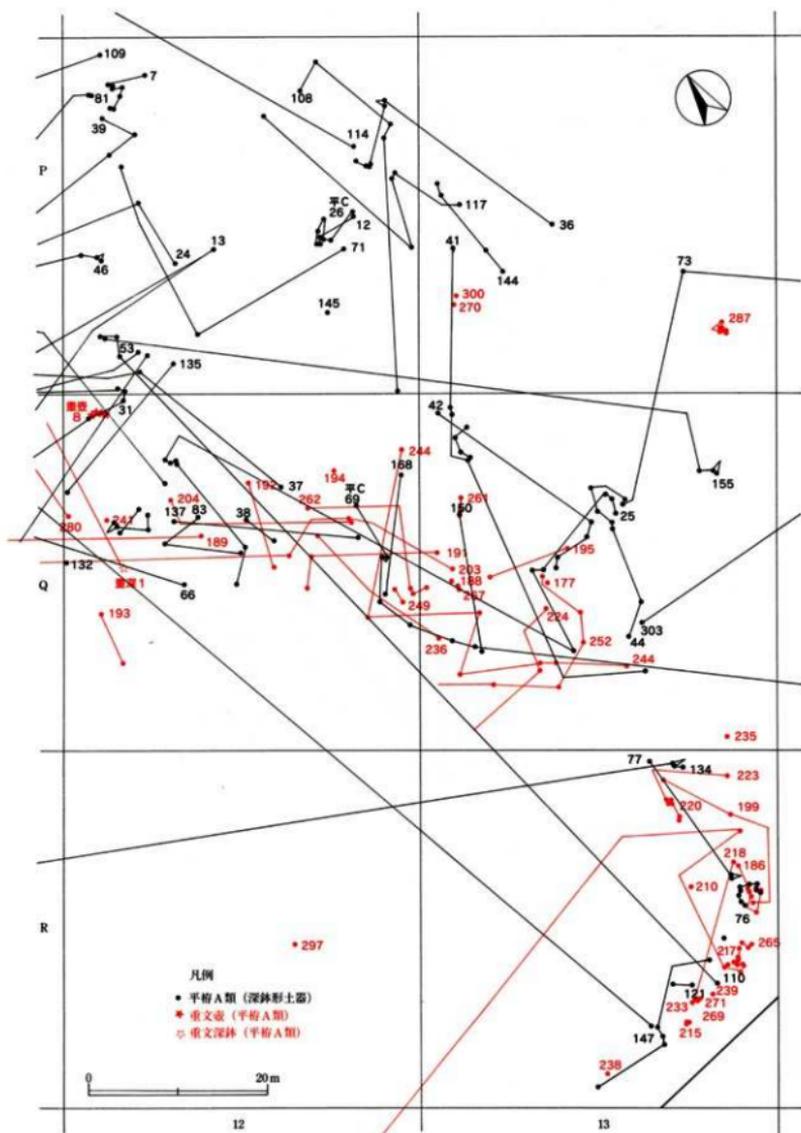
第93圖 平檐A・B類土器出土狀況圖(2)



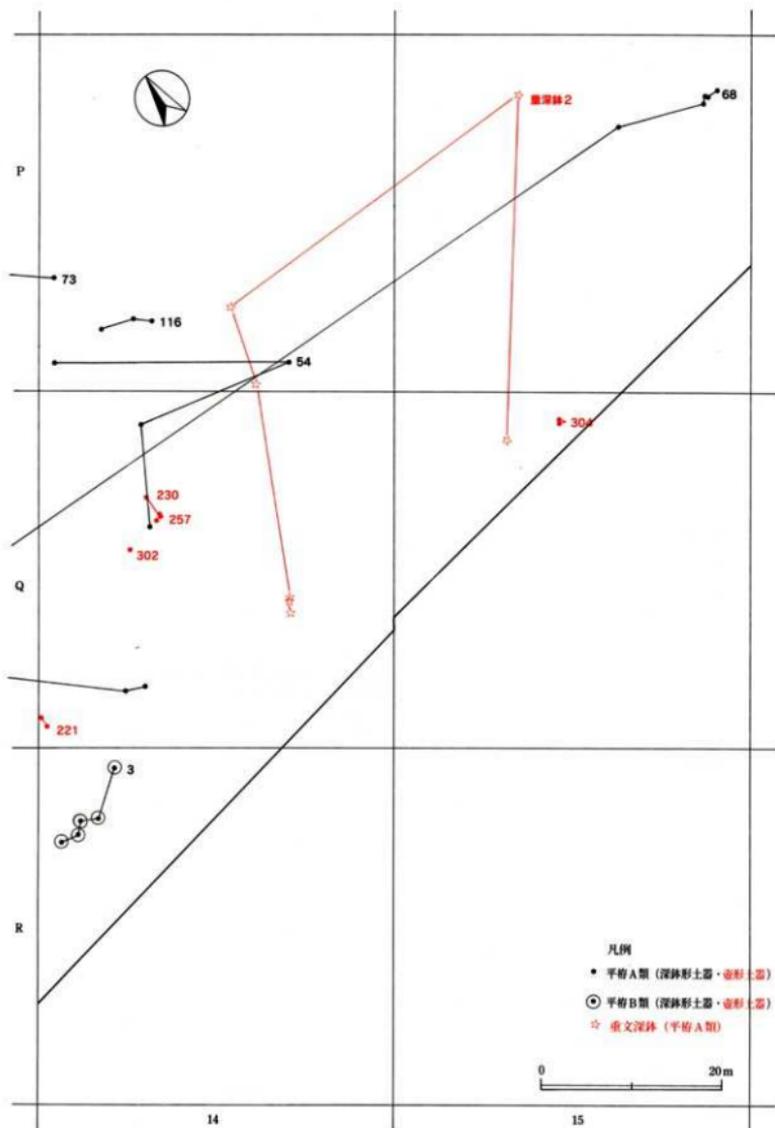
第94圖 平栴A・B類土器出土狀況圖(3)



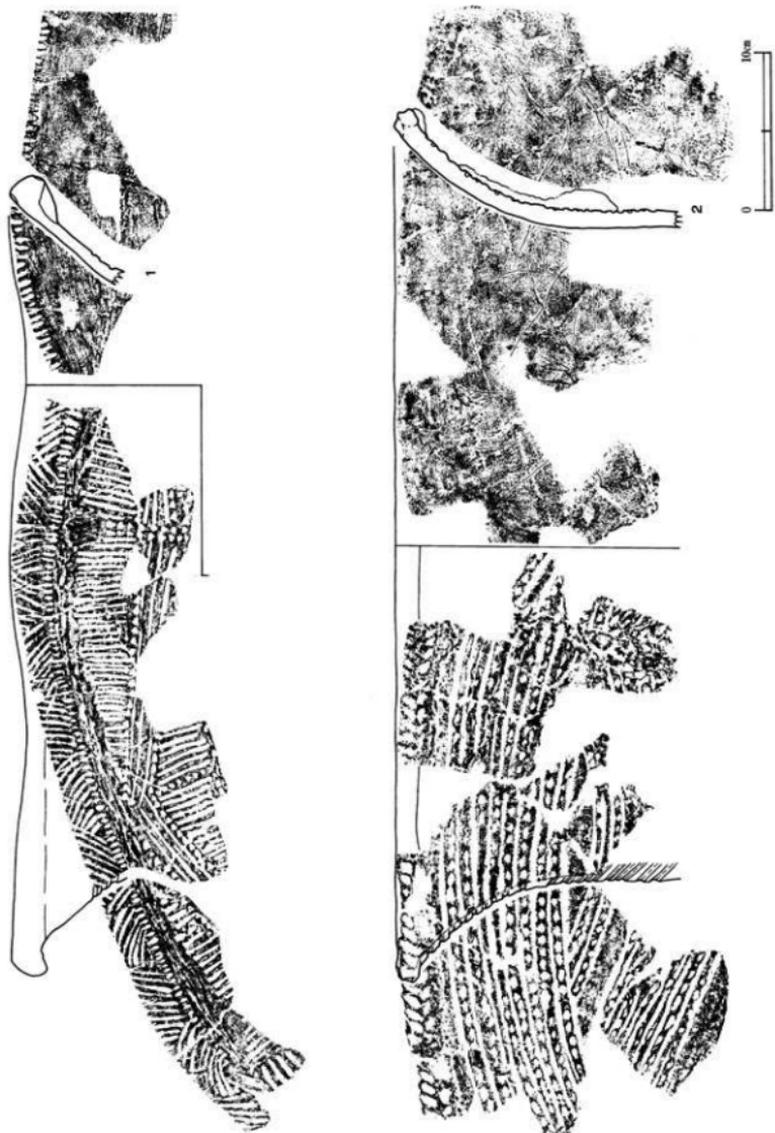
第95圖 平枒A・B類土器出土狀況圖(4)



第96圖 平枋A・B類土器出土狀況圖(5)



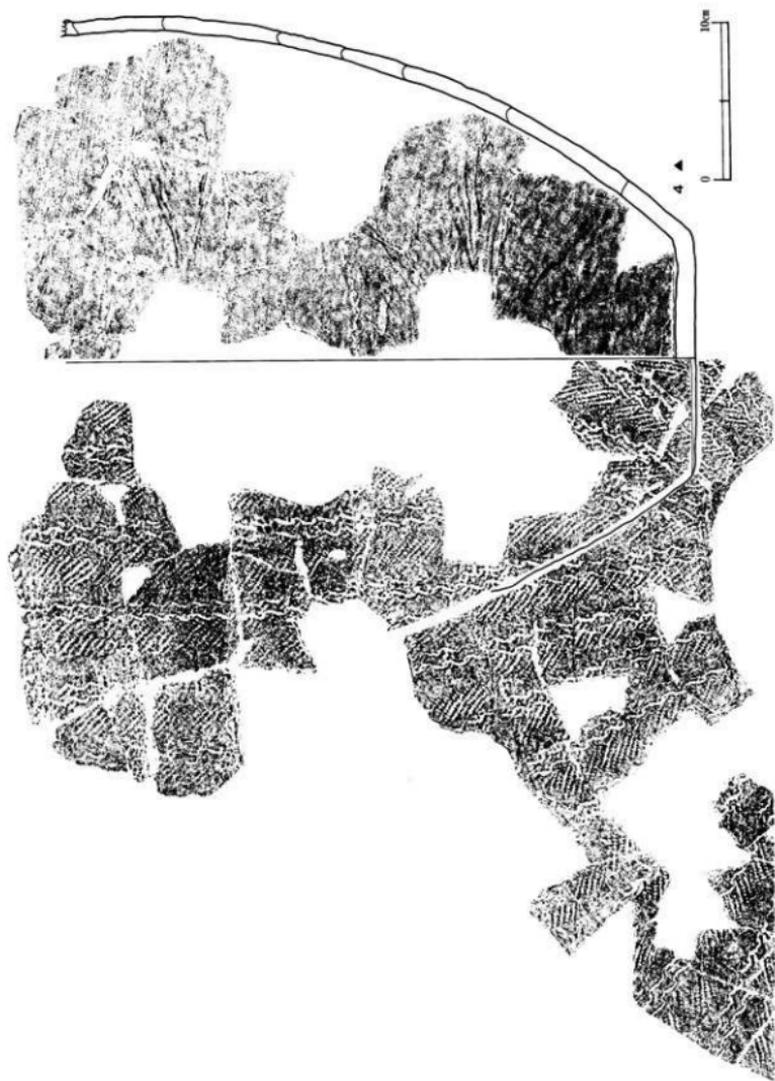
第 97 圖 平拵 A・B 類土器出土狀況圖 (6)



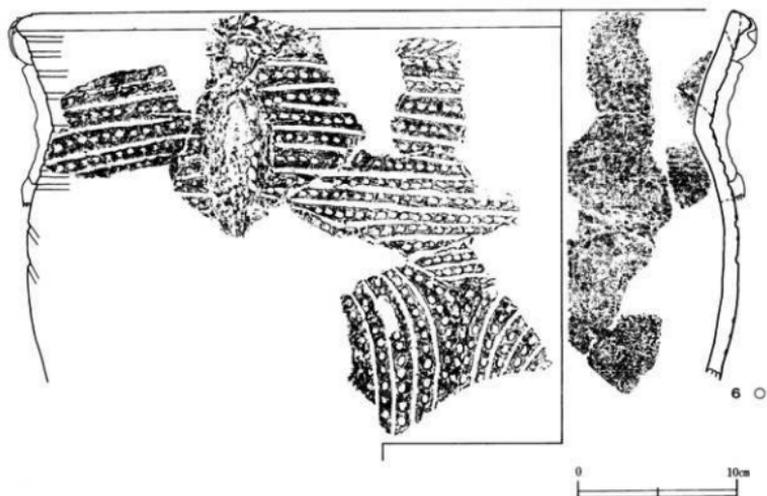
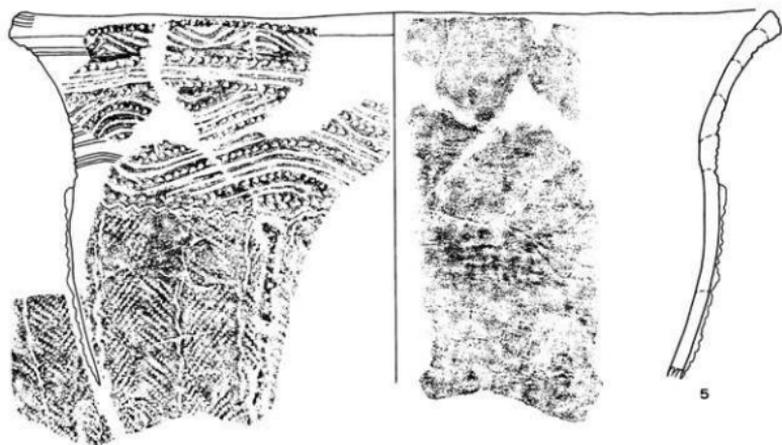
第 98 图 平栴 A 期土器实测图 1 (深鉢一 1)



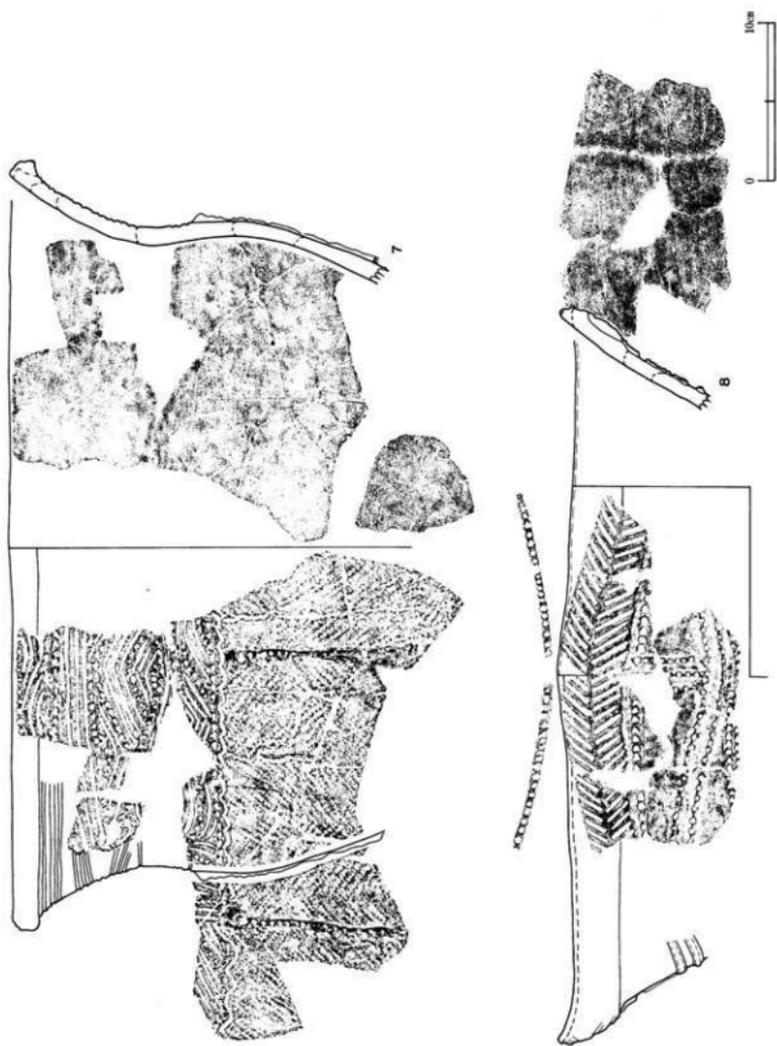
第 99 图 平桥 A 类土器类图 2 (深林-2)



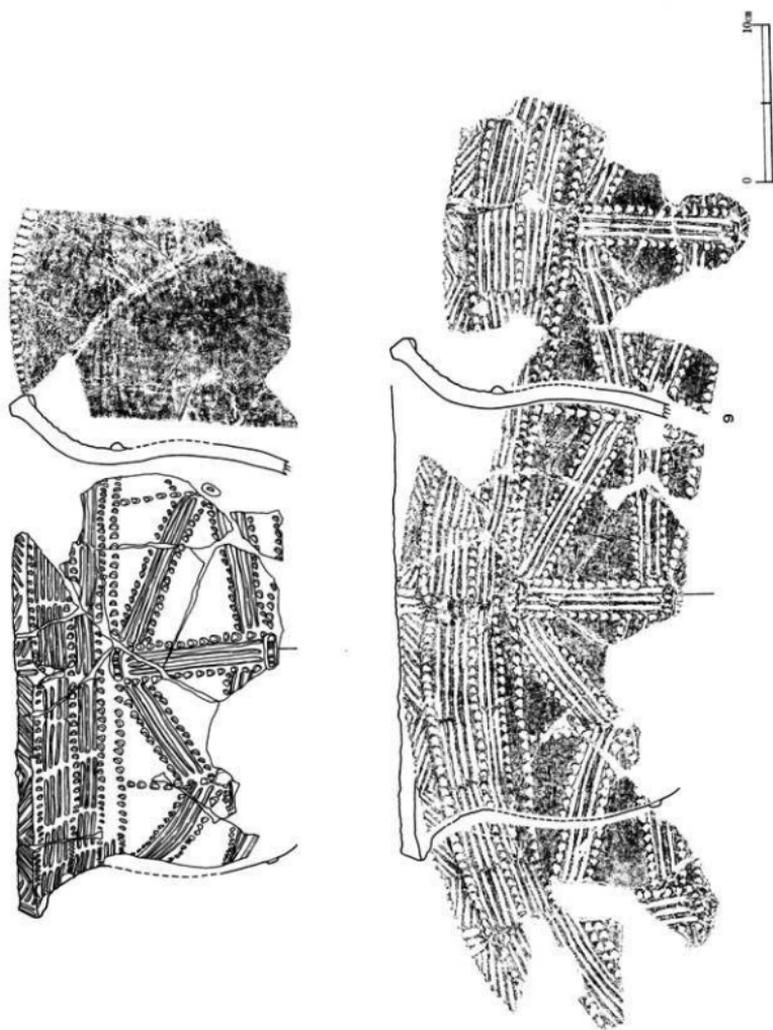
第100図 平谷A郷土器家圃圖3 (張林一3)



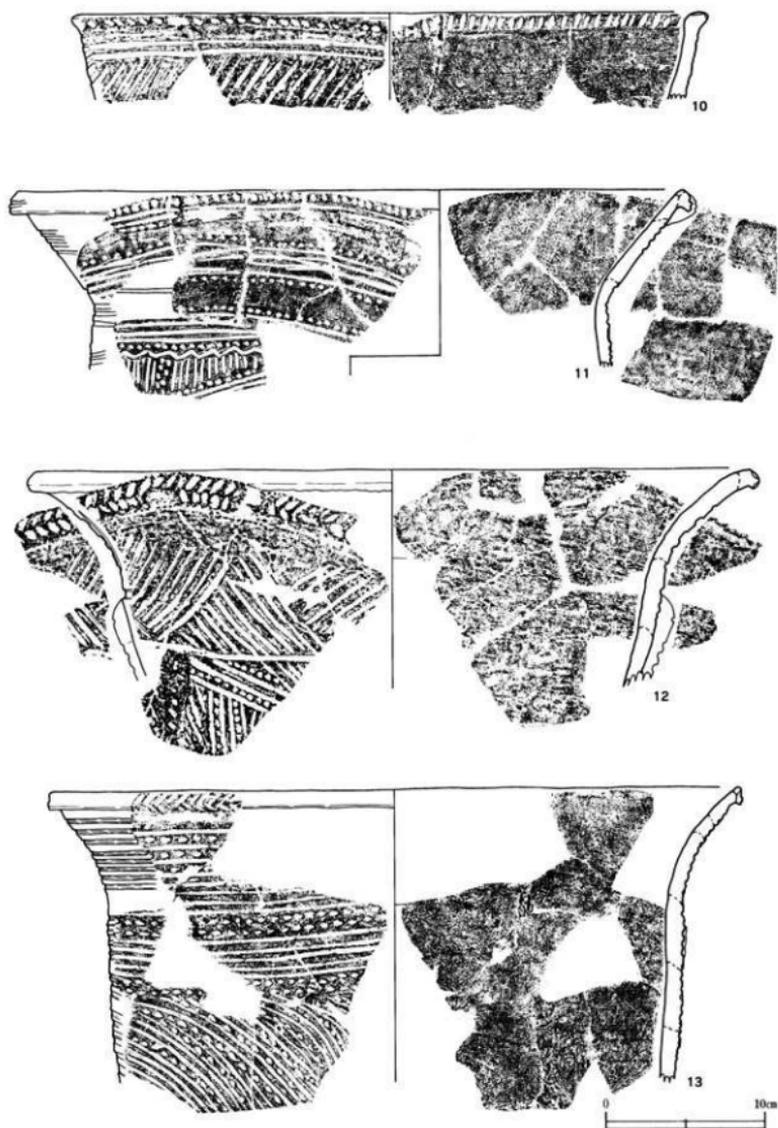
第101图 平埴A類土器実測图4 (深鉢-4)



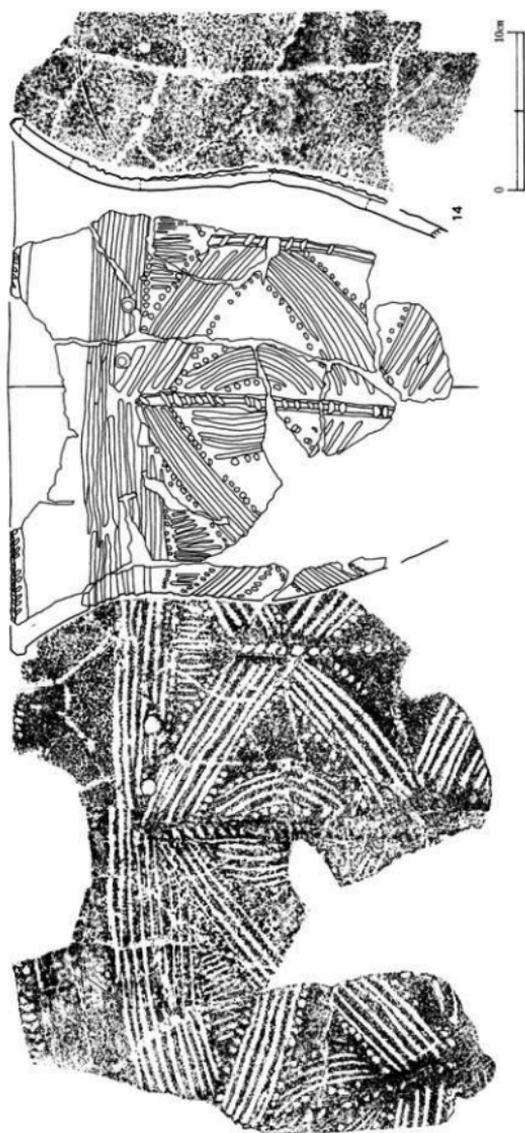
第102圖 平栴A類土器実測圖5 (深鉢一5)



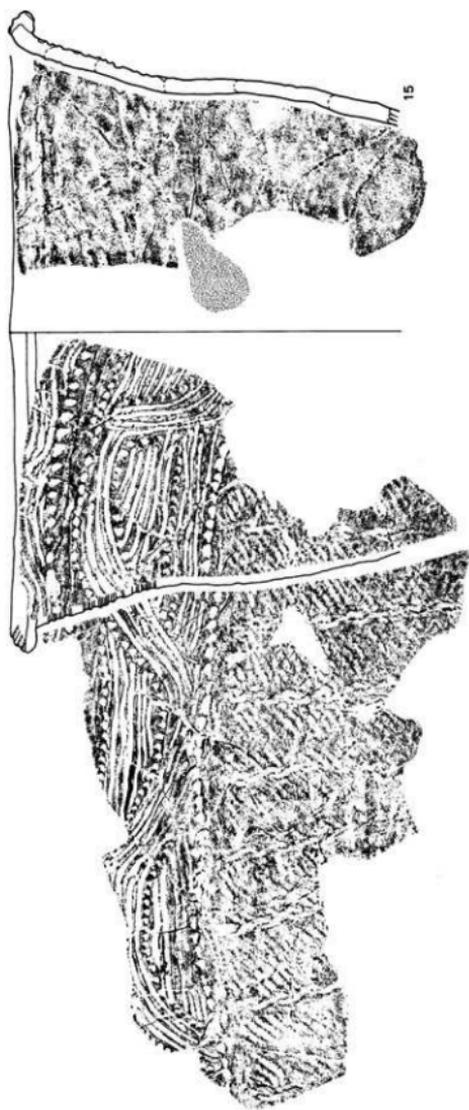
第103图 平砦A新石器时代遗址图6 (探坑—6)



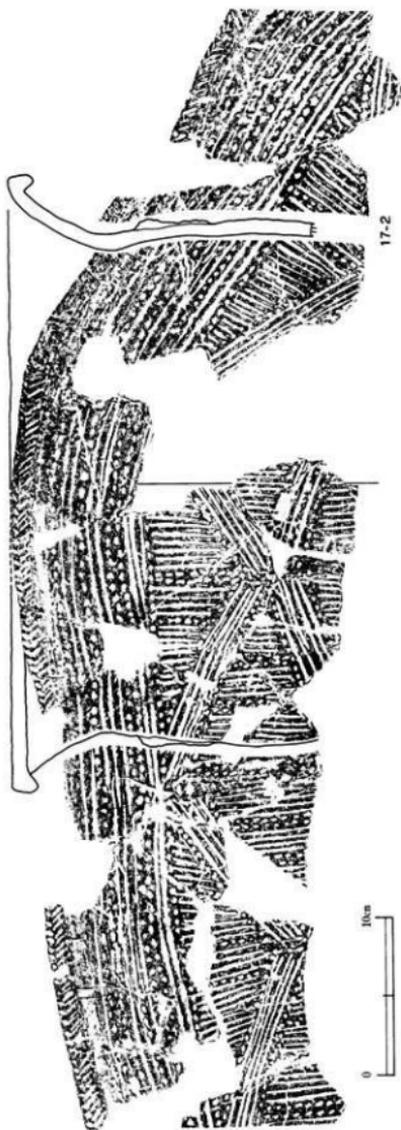
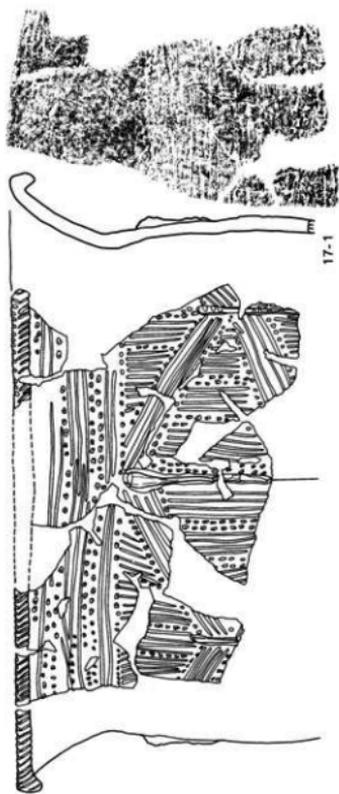
第104 図 平橋A類土器実測図7 (深鉢-7)



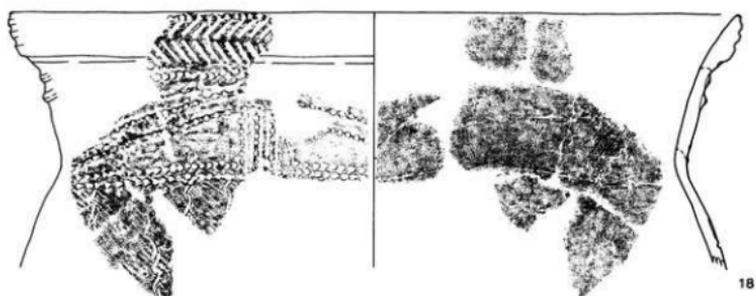
第105図 平栴A類土器実測図8 (深鉢一8)



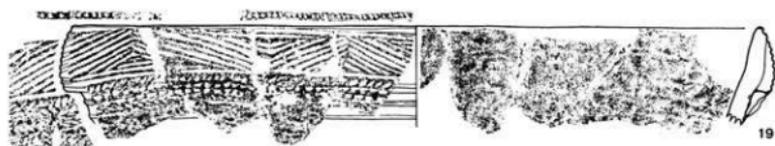
第106图 平桥A類土器実測図9 (深鉢一9)



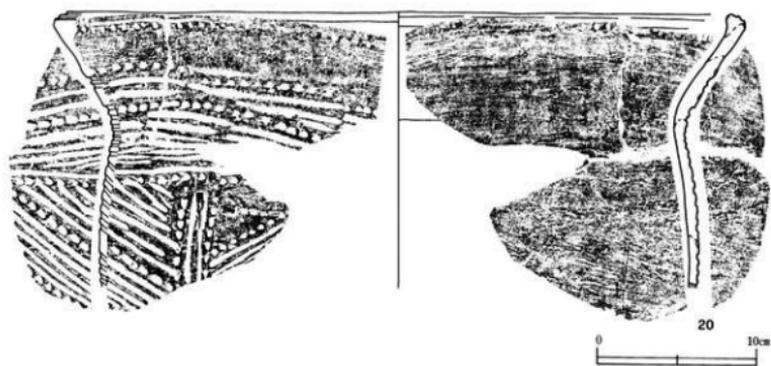
第107図 平栴人類土器実測図10 (深鉢一10)



18

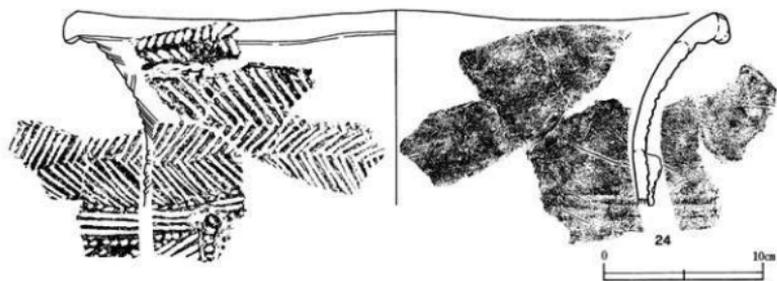
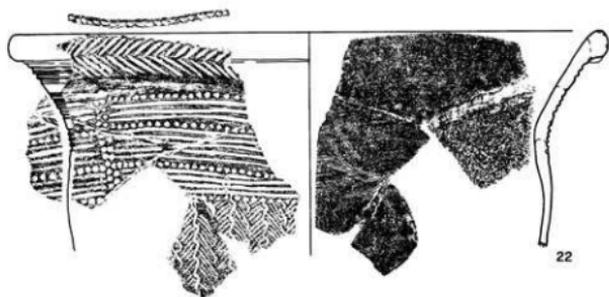
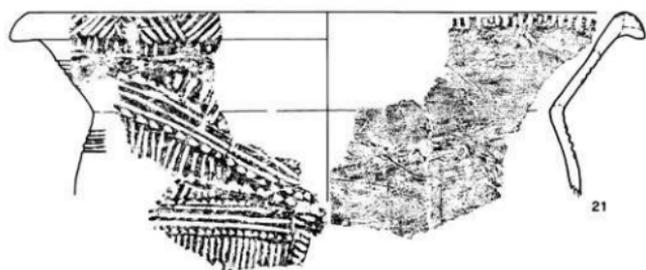


19

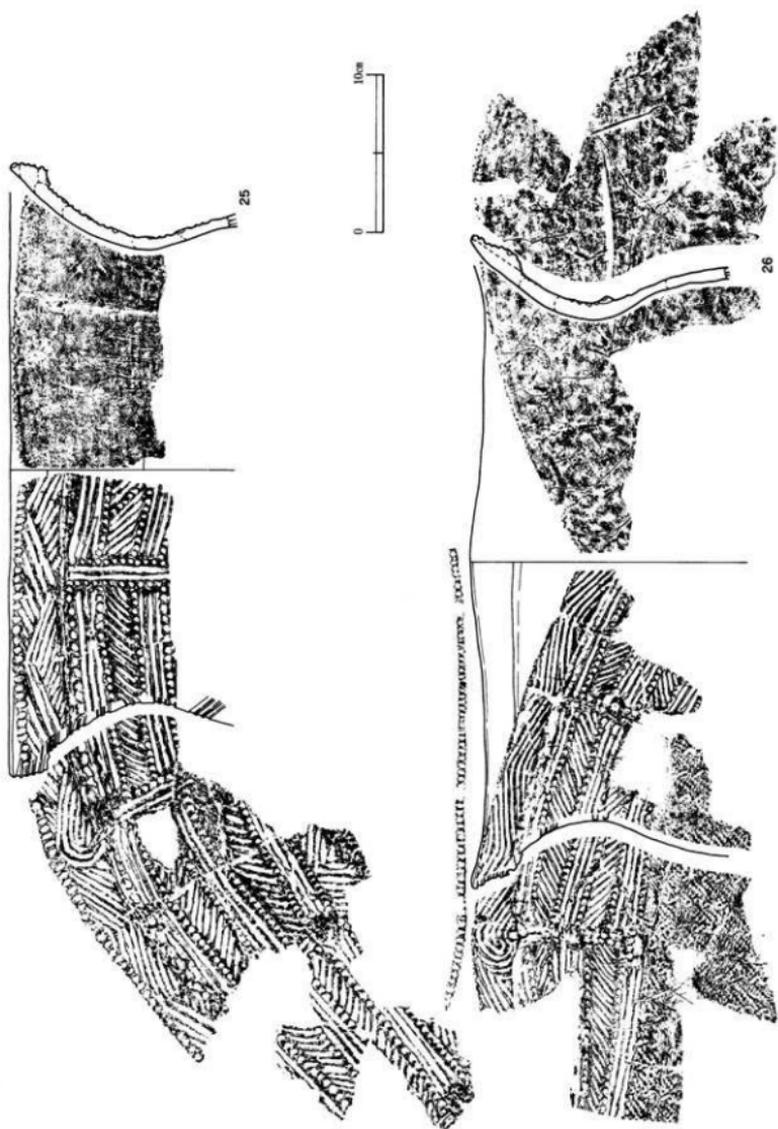


0 20 10cm

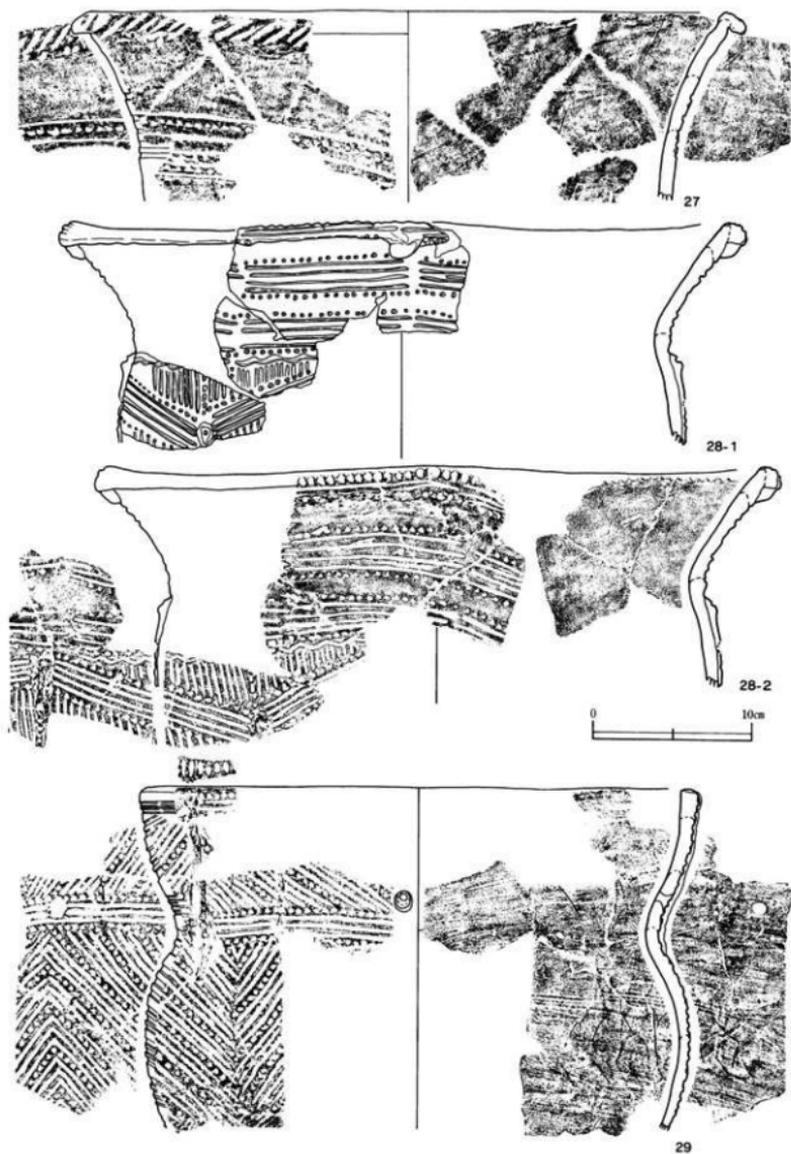
第108圖 平持A類土器実測図11 (深鉢-11)



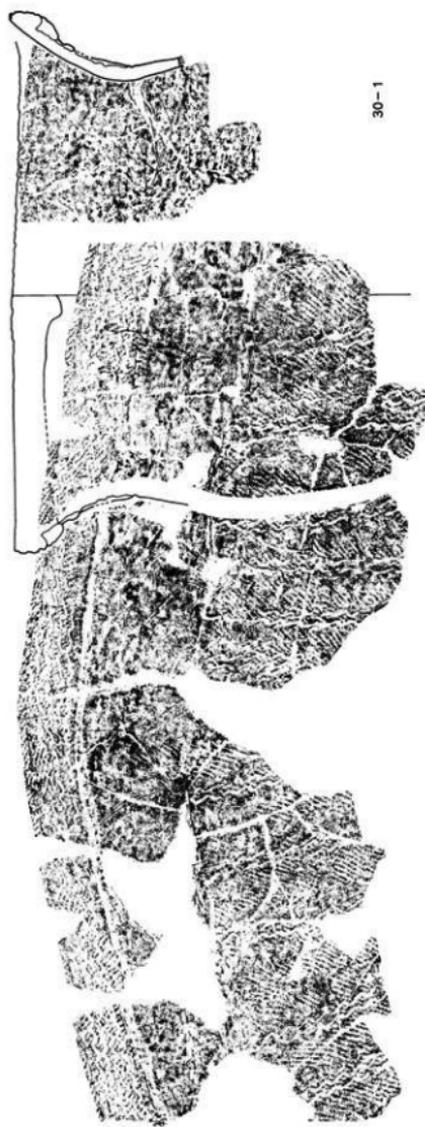
第109 図 平埴A類土器実測図12 (深鉢-12)



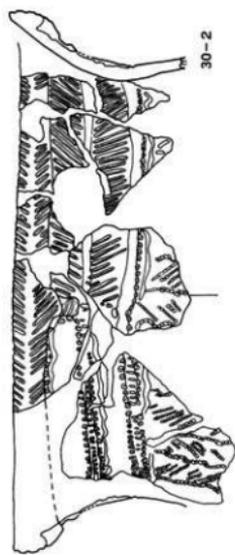
第110圖 平栴A類土器実測図13(深鉢一13)



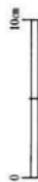
第111图 平埤A類土器実測图14 (深鉢-14)



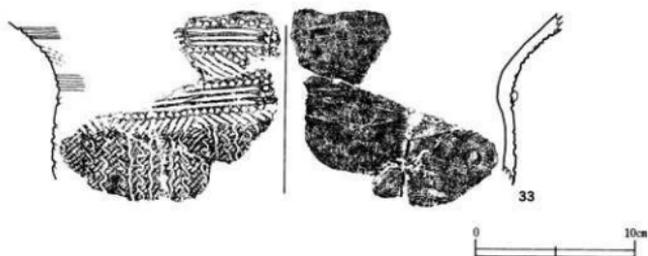
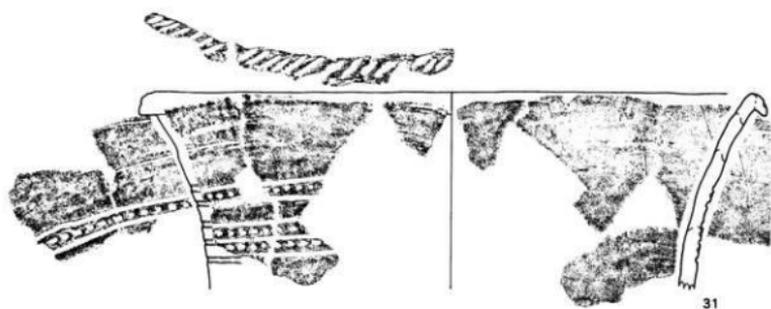
30-1



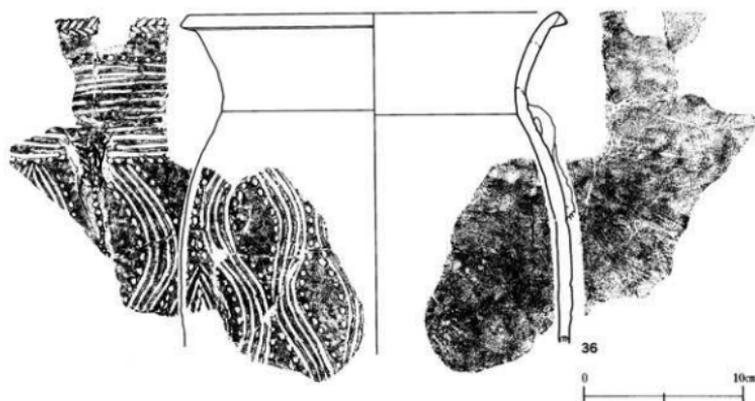
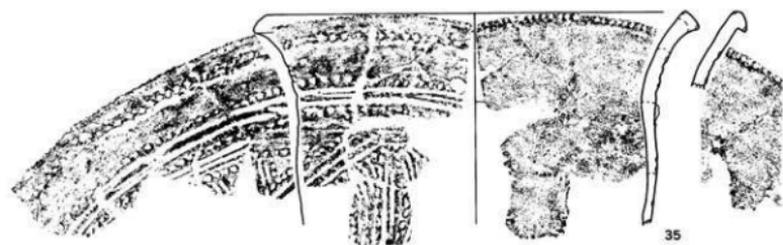
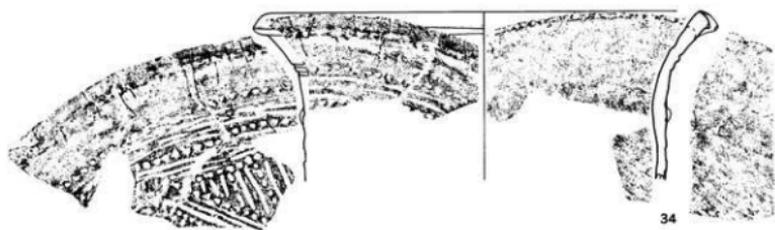
30-2



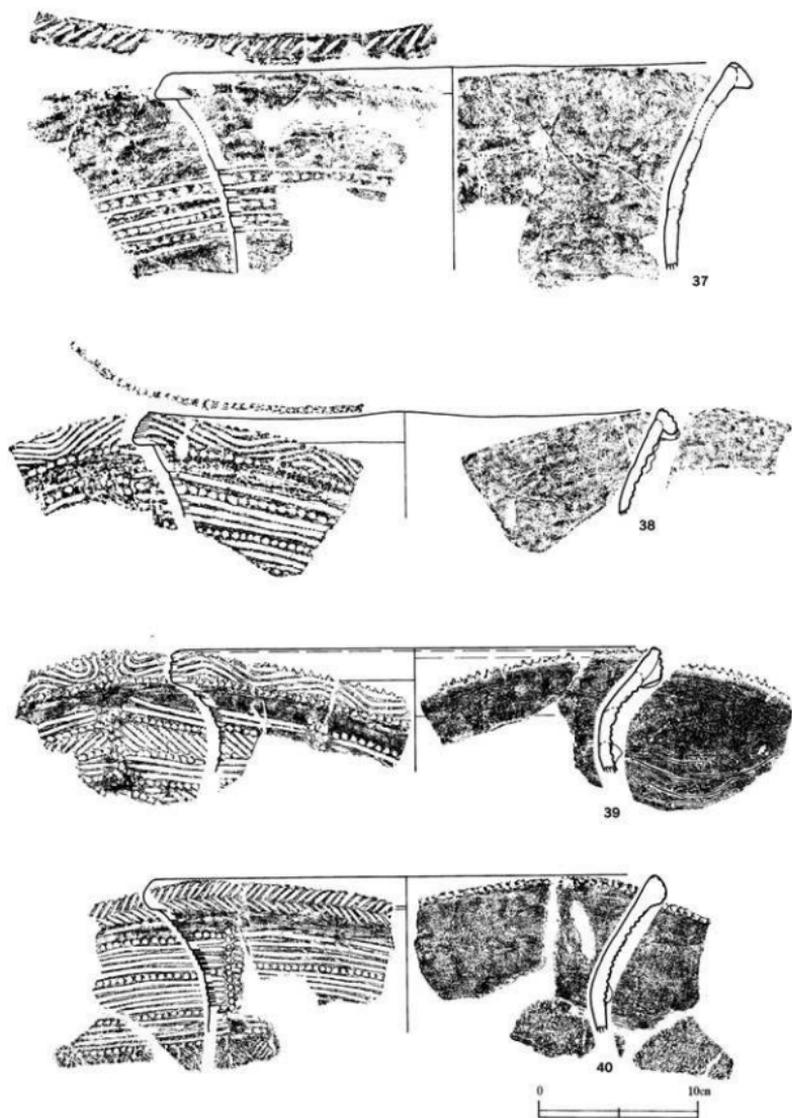
第112圖 平橋A類土器実測図15 (深鉢-15)



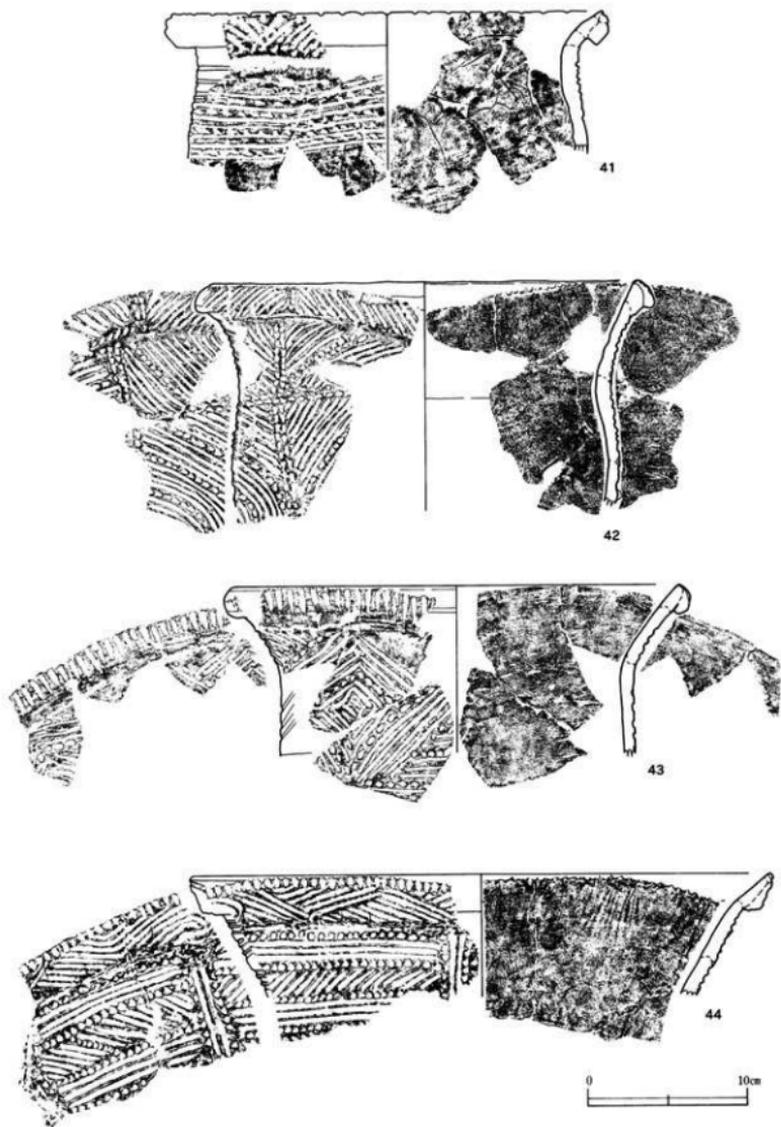
第113图 平椅A類土器実測図16(深鉢-16)



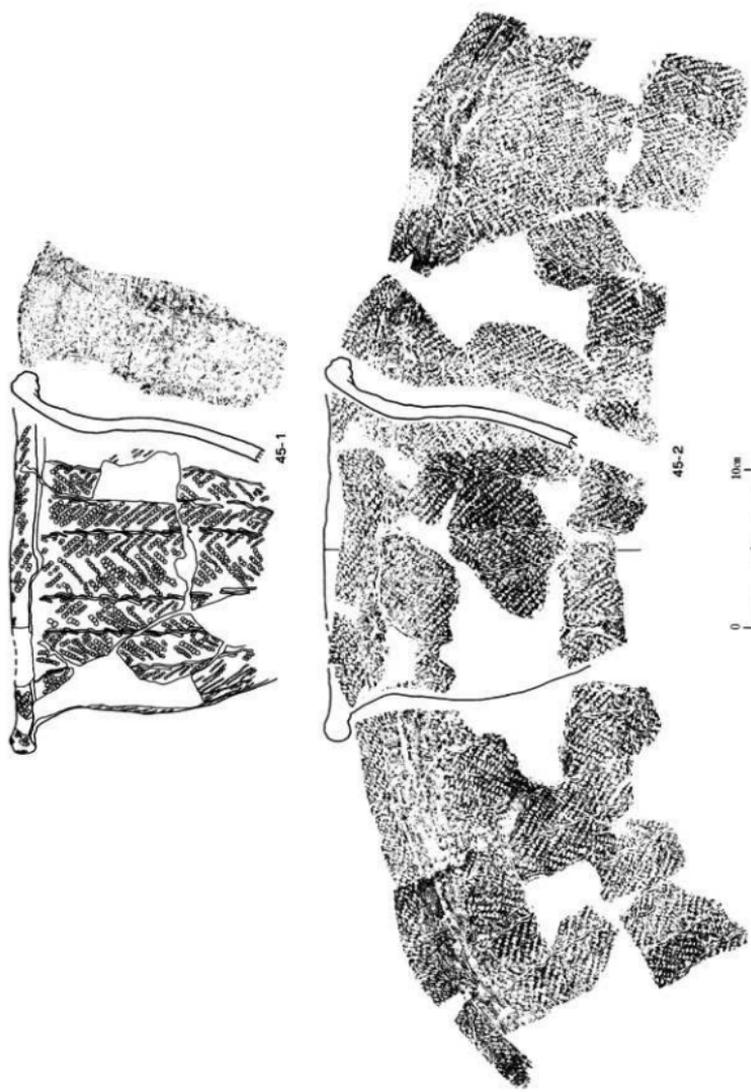
第114图 平枋A類土器実測図17 (深鉢—17)



第115图 平栉A類土器実測図18 (深鉢-18)



第116图 平枋A類土器実測図19(深鉢-19)



第117图 平祐A類土器実測図20 (深鉢一20)